

第12回 2020(令和2)年度



こどもプロジェクト文学賞

～見て、聞いて、調べて、自分の言葉で書いてみよう～

受賞作品集

もくじ

ごあいさつ 北九州市長 北橋健治

選考講話 那須正幹／最相葉月／リリー・フランキー

4 2

小学生の部



大賞

「ぼくファミリーエンバウム(家系図)」チャケレオン

10

佳作

「ぼくの12時間サバイバル体験記」遠藤光之佑

17

「信じて！重度障がい者の学ぶ力」内田博仁

27

選考委員特別賞

那須正幹賞 「虫ののろい」伊藤 麦

33

最相葉月賞 「天国への案内人」川口 颯

42

リリー・フランキー賞 「カマキリが教えてくれたこと」中野 理香

45

中学生の部



大賞

「葬儀のススメ」平家 和志

48

佳作

「曾祖父の覚悟―山村の漁村から」中尾 慶人

69

「小笠原諸島を訪ねて」秋篠宮 悠仁

74

選考委員特別賞

那須正幹賞

「LOVE」歌舞伎

～平成中村座小倉城公演～大石 寛子

83

最相葉月賞

「ツナグ」新池谷 悠

97

リリー・フランキー賞

「なにくそ はなくそ」前田 海杜

119

資料

小学生の部 受賞作品・学校団体賞・最終候補作品

資料

中学生の部 受賞作品・学校団体賞・最終候補作品

資料

応募結果

第12回子どもノンフィクション文学賞



北九州市長

北橋 健治

第12回子どもノンフィクション文学賞を受賞された皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

この文学賞は、子どもたちがノンフィクションを書くことを通して、人間や社会への関心を持ち、自ら考える力を高めていくきっかけとなることと、先人たちが築いてきた豊かな文芸土壌が受け継がれることを願い、2009年度に創設いたしました。

12回目を迎える今回は、コロナ禍での開催となりましたが、国内外から、小学生の部260編、中学生の部97

編の合計357編の作品が寄せられました。

応募された作品の中から、厳正な選考を経て、小学生の部はチャケレオンさんの「ぼくのアミリエンバウム（家系図）」、中学生の部は平家 和志さんの「葬儀のスズメ」が大賞に決定しました。また、10名の方の作品が佳作、選考委員特別賞に選ばれました。入賞された作品はもちろん、いずれの作品も素晴らしく、選考委員の皆様も選考には大変なご苦労をされたことと思います。

さらに、この文学賞に特に熱心に取り組んでいた小・中学校に贈られる学校団体賞は、西武学園文理小学校、日仏学院パリ日本人学校、福岡雙葉小学校、さいたま市立浦和中学校、上越教育大学附属中学校、中野市立高社中学校に決定しました。

受賞者の皆様に改めてお祝い申し上げますとともに、今後とも、作品の創作を続けていかれることを期待しております。

さて、現在本市は、会期を本年12月まで延長して「東アジア文化都市北九州N O N O ▼ N I」を開催し、様々

な文化芸術事業を実施しています。

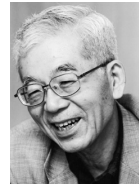
今後適切な新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じながら、「東アジア文化都市北九州NONO」を盛り上げ、豊かな感性を持つ子どもたちを育んでまいりますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びに、選考委員、学校関係者の皆様をはじめ、コンクール実施に当たりご尽力いただいた関係の皆様にお礼を申し上げますとともに、この文学賞に挑戦してくれた子どもたちの中から、将来、すばらしい作家が生まれてくることを、心から期待しています。

コロナ禍の中で

児童文学作家・日本児童文学者協会評議員

那須 正幹



1942年生まれ。児童文学作家。主な作品に、1978年発表の『それいけスッコケ三人組』をはじめとする『スッコケ三人組』シリーズ（巖谷小波賞）があり、2004年末の完結まで、50巻に達した。2005年からは、『スッコケ中生三人組』シリーズを一年一作のペースで刊行。2015年末に最終巻として『スッコケ熟年三人組』を刊行し、シリーズを完結した。ほかにも『なんどの神さま』『さき師たちの空』（読者の石文学賞）『絵で読む広島の原爆』など多数。

昨年来の新型ウイルス蔓延は子どもたちの生活にも様々な影響を与えた。本コンクールにおいても、中学生の応募が大幅に減った。ただ小学生作品が増えているのは、休校など、自由な時間がふえたからかもしれない。

小学生の部で大賞を獲得した『ぼくのファミリーエンバウム（家系図）』は現在ドイツに在住の作者が、家族の歴史を曾祖父の時代から書き起こし、現在に至るまでを描いた力作で、敗戦のため生きる気力を失った曾祖父にかわり、懸命に家族を支えた祖父が、父親にスポーツ、特に柔道を勧め、父もそれに答え、東ドイツ国内の大会で優秀な成績を収めるようになる。やがて東西ドイツが統

一され、父は西ドイツにロボット製造会社に就職する。父は、日本人の母と結婚し、作者が生まれるのだが、ドイツ人の父と、日本人女性との出会いが記されていないのが残念。

佳作となったが『ぼくの12時間サイバイバル体験記』も選者全員が高評価した作品で、一晚のテント暮らしのために、様々なグッズを手作りし、それを利用して、野宿体験をした兄弟の体験記なのだが、様々なグッズというのが、いかにも子どもらしい発想の産物で、読んでいて楽しかった。

『信じて！重度障がい者の学ぶ力』は、生後間もなく先天的自閉症と知的障がいと診断された作者が、二歳のとき母親の指を使って自分の意思を伝えるすべてを学び、知識を広げていく。母親や理解ある指導者により、これだけの文章や自己表現力を習得できたわけで、選者もこの点を評価した。

選者特別賞に推した『虫ののろい』は、筆者がなぜ虫が怖くなったのかということユーマラスに語りつつ、

その原因が、もしかしたら、妹が生まれたことによるのではないかと分析している。読者を意識した作品ということの評価した。

中学生の部は、今回は応募作品も少なく、作品の質もあまりよくなかった。これもコロナ禍の影響かもしれない。もう一つ、やたら長い作品が多かったのも特徴で、もっと簡潔に仕上げしてほしい。

大賞に決定した『葬儀のススメ』は相次いで亡くなった二人の曾祖母の葬儀に出席した作者が葬儀の模様を克明に描いている。葬儀といえば、故人への哀惜や思い出が主流になるのだが、それらはすべて無視し、ただただ葬儀そのものに興味を示しているところが、かえって良かった。本作も長すぎるきらいがあり、今後の課題としてほしい。

佳作の一篇は『曾祖父の覚悟』で、終戦直後まで千葉県で大工見習をしていた曾祖父が戦後高収入を得るため、捕鯨船の乗組員として南氷洋に出漁、命の危険にさらされながらも必死に働き、退職後は故郷の青森県八戸

にもどり、村の若者に捕鯨船に乗るようにすすめ、村は一躍捕鯨の村となる。

もう一つの佳作は『小笠原諸島を訪ねて』という家族旅行の記録だが、東京の港を船で出発し、四日間の行程を丁寧に描き、それぞれの新鮮な感動も素直に記録していた。特に島を離れるおりに島民たちが、次々海に飛び込み別れを惜しむ場面など感動的だった。作者の興味は小笠原諸島の自然や歴史、民俗風習にもおよび、紀行文のお手本のような作品だった。

審査員特別賞は『「OK」歌舞伎』を推した。生まれて初めて地元で開かれた「平成中村座小倉城公演」を観た作者が、絢爛豪華な舞台に魅了され、たちまち大ファンになる。

芝居の演目である「小笠原騒動」についても資料にあたり、さらに中村座が小倉公演にいたった経緯も取材していた。惜しむらくは、作者が力説するわりに、歌舞伎の魅力が読者に伝わらないことで、舞台の様子を視覚的に描写するなりして、補えば良かった。

生と死を見つめる

ノンフィクションライター
最相 葉月



1963年生まれ。1997年「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、2007年「星新一(二〇〇)話をつくった人」で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞など5つの賞を受賞。他の著作に「青いバラ」「ピヨッド・エリソン」「セラピスト」「れるるれる」「クネ 中園朝鮮族の友と日本」「理系という生き方」「胎児のはなし」共著、当賞受賞者への取材を含む「調べてみよう、書いてみよう」講談社など。主なテーマは科学技術と人間の関係性、精神医学、教育、童話ほか。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、人と会って話を聞いたり、外に出かけて調べたりという行為が大幅に制限された一年でした。応募総数にも影響があったようですが、読みごたえのある作品が最終候補に残ったことを大変嬉しく思っています。

小学生の部大賞「ぼくのファミリーエンバウム(家系図)」は選考委員全員が最高点をつけました。旧東ドイツのドレスデン近郊で生きた元資産家の父方の家系について祖父のインタビューをもとにさかのぼり、戦争と東西分断が曾祖父と祖父と祖母、そして父にどんな苦しみをもたらしたかに迫ります。短い原稿なのに、映画を見終えた時

のように深い感動を覚えました。新たな資料も発見したようなので、さらに詳細に迫ってください。

佳作「信じて！ 重度障がい者の学ぶ力」は二歳で知的障害を伴う自閉症と診断された当事者による作品です。知的能力は高いのに、言いたいことを言葉として発することができないために、現在の検査方法では障がい者とみなされ通常の教科書も与えられない。さぞもどかしい日々だったことでしょう。専門家の指導によって電子手帳による表現が可能となったようですが、コミュニケーションとは何かについて再考を促されました。

佳作「ぼくの12時間サイバル体験記」は祖母の家の庭で電気も火も使わずに過ごした半日の記録です。自家製の虫除けやクローラーを作ったり、太陽光で肉を焼いたり、失敗も含めてワクワク楽しんでる様子がよくわかります。続きをどんどん読み進めたくなる筆力に驚きました。ちなみに選考会で、なぜテントを自作しなかったのかな、という声があったことを書き添えておきます。

最相賞の「天国への案内人」は、葬儀社を営む祖父の

仕事についての作品です。みんなが「じい」の仕事を開くと戸惑うのはなぜだろうと気になって、じいをインタビューします。子どもの死、孤立死、いろんな死があります。家族がいない人の骨をじいが一人で拾うこともあるそうです。死を見つめ、生の大切さに気づく、静かで力強い作品です。

中学生の部大賞も葬儀がテーマでした。「葬儀のススメ」は、二つの葬儀の体験記です。二人の曾祖母はどちらも大往生のためか、会場は和やかな雰囲気です。焼香や通夜振る舞い、読経や焼却炉の仕組みまで、丁寧に観察して記述されることで、儀式がもつ意味が浮きぼりになっていきます。コロナの影響で葬儀がよく話題になりますが、死者を弔う儀式について問う優れた作品です。

佳作「小笠原諸島を訪ねて」は、東京竹芝から1000キロ離れた東京都の島への旅行記です。小笠原は第二次世界大戦の戦場であり、野鳥の希少種やウミガメが生息する世界自然遺産でもあります。著者は出会う人々の歴史や文化、いたたく食事、鳥や虫、海や山の美しさを

丁寧に見つめ、かけがえのない対象をどのように守っていけばいいのかについて考えを巡らします。コロナ禍において、そうでなくとも人々の関心が届きにくい離島との関わりについて考えさせられました。

佳作「曾祖父の覚悟 山村の漁村から」は、かつて捕鯨の村といわれた青森県八戸市南郷の歴史を、曾祖父が登場する私家版の音声と映像をもとに描いた作品です。捕鯨船に乗り込む若者と企業との関係や200海里規制によって鯨からマス漁に変わった頃の様子、命を賭して船に乗った曾祖父の半生が描かれます。自分が今ここに あることの奇跡への気づきが、本作の要です。

最相賞「ツナグ」は、これまでも動物と自分との関係について考えてきた著者の思考の軌跡です。豚熱を通して家畜の意味を考察し、養豚農家の「殺処分は家畜の否定」という言葉を引き出したこと、そして、わからないという感情にまっすぐ向き合う姿勢を評価しました。動物と人間の関わりが注目される今、多くの人に読んでほしい作品です。

何に出会って、 何に心を動かされたか

イラストレーター・作家・俳優
リリー・フランキー



1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆・写真・作詞・作曲・俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説『東京タワーオカンとボクと、時々、オトコ』は06年本屋大賞を受賞。2010万部を超すベストセラーとなった。オリジナル絵本『おでんくん』はアニメ化され、オリジナルグッズも性別世代を超え幅広い人気を集めている。

小学生の部

大賞「ぼくのファミリーエンバウム(家系図)」は、激動のドイツの物語は映画や本で知るところでしたが、今生きている男の子が家族の物語を紐解いていく側面から見る当時のドイツの話で、すごく読みやすく興味深かったです。家族の話と歴史が密接に書かれていて、彼がドイツに住んでいたから経験できたということより、彼の着眼点や文章にするべきところが群を抜いて読み手を引き込む力がありました。

佳作「ぼくの12時間サバイバル体験記」は、他の子ども

もたちが稀有な経験をしていたりする中で、小さなことにみずみずしく取り組んでいる子どもの大冒険として、笑いながら読ませてもらいました。こういう目線でみんながテーマを探してくれたらいいと思いました。

佳作「信じて！重度障がい者の学ぶ力」は、全般的に思ったことですが、障がいの度合いがそれぞれ違う中で、病気を患っている子どもや障がいを抱えている子どもが自分の状況を認識しながら生きていくんだなと思います。自分も読んでみました。読み手の方が、障がいの度合いや状況などについて、勉強しないといけないと思いました。

リリー・フランキー賞「カマキリが教えてくれたこと」は、カマキリについてみんながよく知るところを書いていますが、実際に目にした珍しい体験です。最初の書き出しから書き方に文学的なものを感じました。ただ理科的にものを考察しているのではなく、それを文学的に考察して文章にしていました。

中学生の部

大賞「葬儀のススメ」は、葬儀に参加した子どもたちは悲しいという気持ちになりがちですが、葬儀のシステムについて自分なりにきちんと調べていて、宗派については僕も勉強になりました。また調べるだけでなく「ばあちゃんテレビが好きだから…」とか葬儀の様子がフランスよく書かれていました。

佳作「曾祖父の覚悟」は、勇壮な男の短編小説を読んだ気持ちにさせてもらいました。今の10代の子どもたちの文章からは出てきそうにない「捕鯨」とか「たばこ」などそろそろタブーになっていそうなことが物語になっていて新鮮でした。

佳作「小笠原諸島を訪ねて」は、文章として完成させていてすばらしいと思いました。一人の中学生だと考えると、もう少しプライベートな事が書かれていると良いと思いました。

リリー・フランキー賞「なにくそ はなくそ」は、「はなくそ」一つでこれだけよく書けたなという印象です。

すごくまっすぐな感じがでていました。このテーマで書くのだったらコラムとかエッセイの中でも飛び道具となるので、もう少し面白く書けると良いと思いました。

この文学賞は子どもたちにすごく難しいものを課していると思います。何に出会って、何に心を動かされて、自分がその場所にどういう風にどういう距離で待機しているかを含めての文学賞なので、全体的に水準が高くなっていると思います。過去には、何でもないことが書かれている作品があったので、そういう作品ももっと増えてほしいです。(談)



大賞

「ぼくの家系図」

ファミリーエンバウム

ナコブフツツガモムナジウム
Jakob-Fugger-Gymnasium 五年

チャケ レオン

ぼくは今、ギムナジウムに通っている。ぼくのクラスでは、週に一度自分でテーマを決めてそれについて調べたり聞いたりしてそれをレポートにしてクラスで発表し意見を話し合うという授業がある。ぼくの番はまだ先だ。でも何をテーマにするかはもう決めている。

ぼくの決めたテーマは

「DDR東ドイツ」

なぜこのテーマを取り上げたのかというと、ぼくは母が日本人、父がドイツ人のハーフで父はドレスデン市、つまり旧東ドイツ出身だからだ。そして父方のファミリーエンバウムは第二次世界大戦後からドイツが東西に分かれ、ベルリンの壁がほう壊するまでの時代の中でとても辛く悲しく、複雑な人生を送らなければならなかったということもある。

ぼくがこの話を父にすると

「お父さんにとってはそれほど辛い人生ではなかったけれど、オーミ（祖母）、特にオーピ（祖父）にとっては思っていたくない事かもしれないね。でも、戦後の混乱した時代、そして東ドイツ時代を生きた一つの家族としての歴史を話してくれると思うよ。」と言ってくれた。

父から話を聞いたオーピはぼくに今までの人生を話してくれた。

オーピの家は「資本家」というやつで第二次世界大戦

時はとても裕福な家庭だったそうだ。ドイツとブラジルにいくつかの靴下を作る工場を持っていて故郷のツビツカウ市には大きなマンシオンを三つ持っていた。

父親は船でブラジルに渡り、兄弟達と工場を忙しく回っていたためドレスデンの家にはあまりいなかったらしい。

そして戦争はドイツにとってだんだん苦しいものとなっていった。

一九四四年十二月二十五日、オーピはドレスデン市で生まれた。ドイツにとってとても悪いじょうきょうの中での子供の出産を父親はうれしく思っていなかった。それに仕事のことでも忙しく、母親は幼稚園の先生をしていたので生まれてすぐからたく児所のようなところにあずけられていたそうだ。

一九四五年二月十三日

オーミの母親は家族といっしょだった。電車に乗って

ドレスデンに向かっていたのだが、途中の車内で陣痛が始まったので電車を降りて別の病院に行きオーミは生まれた。

この日、ドレスデンではファッシングのお祭りをしていたのでたくさんの子供たちがキレイに着かざって夜まで外にいた。そしてこの日はドレスデン大空襲の日でもあった。

オーミと家族はそのまま電車に乗ってドレスデンに向かっていけば間違いなく空襲で死んでいただろう。オーピや家族も家が市の中心から少し離れていたからなのか幸運にもケガもなく無事で建物のほう壊もなかった。

でもこの空襲とドイツが戦争に負けたせいでオーピの家族の運命は大きく変わるようになった。

空襲で持っていたすべてのマンシオンが壊されてしまったのだ。そして敗戦し、人々が苦しむ中がれきを処分してさら地にするようにと言われたのだ。そんなことを当時の一般市民にできるはずがない。

「できない場合は代わりに行くが土地を没収する」とい

う事と、残りの不足金まで靴下工場の会社を売り払うことで支払わなければならなかったそうだ。

あまりにもひどすぎる話だ。いままで当たり前のようであった裕福な日常が急にすべてなくなってしまうのだ。役所は助けてくれるどころかここぞとばかりに市民から財産をすべて取り上げたのだから。

ぼくは何だか熱くなって両手をギュッとにぎった。

この出来事で母親のじまんだったブロンドの髪がいつしゅんで真っ白になってしまった事がオーピは今でも忘れられないと言う。

そしてオーピの貧しい生活が始まった。

食事の時は父親が食べ終えるまで待たなければならぬ。残りを三人兄弟と母親とでわけあう。もちろん末っ子のオーピは取り合いに負けるのでいつもお腹が空いていた。

父親は「私は資本家だ。誰かにやとわれるのはごめんだ。」と言って仕事をせず教会のカネを鳴らす事だけをした。そんな父親に代わって母親は文句ひとつ言わず働

いた。

そのため、オーピのめんどうは兄と姉が見ていた。といても年が離れていたのほとんど一人ぼっちにされていたらしい。

五才の時、建設現場で兄たちが足場を登って遊んでいた時だった。いつものようにほったらかしにされていたので、一人で登り始めた。そして二階から足をすべらせて頭から落ちてしまったのだ。

そのまま病院に運ばれ、両親は医者から「助かる見込みは少ない」と言われたらしい。

そして当時は仮死状態におく治療ができなかったため、地下の霊安室で治療された。

5日後オーピは目が覚めた。医者もびっくりしたそうだが、落ちた時にたまたま下を歩いていた人の肩に一度ぶつかり、体が回転して足から落ちたのが生死を分けたようだ。

オーピは幸運にも助かったが、この事故が原因で何かに長い時間集中することが出来なくなった。考え事をす

ると激しい頭痛がするようになったためだ。今でも毎日のように痛み止めを飲んでる。

兄はとても優秀で父親にいつもほめられていたのにオーピは勉強に集中することができなくなってしまったため、ひどい言葉や暴力を受けて育つことになった。

父親は相変わらず仕事をせず母は苦勞していたが、その後兄は一級建築士となり、オーピは家具職人となることになる。

兄は家族を豊かにするためドイツ西側の大学に進学をしたと父親に言ったところ、激しく反対されたのであきらめるしかなかった。

そしてベルリンの壁ができてしまった。このことが原因で兄は大学卒業後父親と縁を切って家を出て行ってしまった。

姉も貧乏が嫌だと言ってバツイチだけでも収入のある男性と結婚をして家を出た。

オーピもオーミと結婚し、父が生まれた。

家のリビングには、赤ちゃんの父がおいしいちゃんとお

ばあちゃんに抱っこされた写真がかざられているが、この写真一枚しかない。

どうしてかというと、この後しばらくして父親と母親が自ら人生を終わらせたからだ。

仕事も財産もあり何の不自由もない人生を送るはずだったのに戦争で全てを失い、息苦しい生活を送らなければならぬ。そのうえ、じまんだった息子には縁を切れ、娘から連絡もない。

時々顔を見せに来るのは一番かわいく思わなかったオーピだけ。

「もう、人生を終わりにする。」

とオーピに連絡があった。もちろんオーピは引き止めようとしたが、

「おれの人生だ、自分で決める。」と言って聞かなかった

そうだ。母親も、

「私はこの人について行く」と言った。

オーピは急いで家に向かったが遅かった。そしてなぜ止めることが出来なかったのかと兄と姉に責められた。

その後、兄家族、姉家族から「縁を切る」と言われてしまった。オーピにはオーミと父しかいなくなった。

ぼくは涙を流しながら聞いた。そして怒りを感じた。

生活は苦しいままだった。どうしてかというところ、シュタージでもなければドイツ社会主義統一党員でもなかったから。

そのため生まれてすぐの父を託児所に一日中あずけてオーミも一生けん命働いた。

オーピは家具職人の仕事だけではなく、西側に文房具を納品するための長距離トラック運転手の仕事もかけ持ちした。それでも苦しい時はお金の代わりに労働で支払ったりもした。オーミは欲しい服が買えず店の前でガラス越しに泣いたこともあった。

生活は不自由なことが多かったが、二人は父の成長だけが生きがいであったと言う。

父は学校での成績がとて優秀だった。しかし、党员の家族ではないため大学の教授になることや留学などとはできないことをわかっていた。気軽に相談ができる友人

もない。

それは少しでも政治に文句を言ったり目立つことをするとシュタージに通報されてかんじされたり逮捕されるからだ。誰が党员なのかもわからない。身近にいる親切な仕事仲間や親せき兄弟が信用できないのだ。自分たちで考え、行動しなければならぬ。そこで、父が世界に出るチャンスはスポーツしかないという思いから柔道を始めさせたそうだ。

オーピの期待通り父はスポーツの専門教育科のある学校に通い、どんどん強くなり東ドイツの大会で銅メダルを取るまでになった。

しかし、これから時代が変わるだろうと予測しこのままではいけないと思った父はギムナジウムに編入した。

そしてベルリンの壁がくずれてドイツはひとつになった。ドイツが統一されても相変わらず生活は苦しかったが、父は大学に進学し、遅れた勉強を取り戻すために一生けん命努力をしてディプロムエンジニアという学位を取った。父の判断は正しかった。

オービとオーミにとって父は誇りなのだ。

そして旧西ドイツにあるバイエルン州アウグスブルグ市に本社がある産業ロボットの会社に就職が決まったので故郷のドレスデンを一人出ることになった。

何年か過ぎ父が日本人の母と出会い結婚することになった時、二人はものすごく幸せな気分になったそうだ。

父が東ドイツにいて世界を見ることができるチャンスは「柔道の世界大会に出場すること」しかなかった。そしていつか日本の講道館に行ってみたいというのが父の夢で日本はあこがれの国だった。

そんな父の思いを知っていたからだ。そしてぼくが生まれた。

オービとオーミはドレスデンを心から愛していてドレスデン市民であるということに誇りを持っていた。だから父が引越しをする時いっしょに行こうと言ったのにドレスデンに残った。

そんな二人がぼくのためにドレスデンを離れることを決意してくれた。

そして今

同じマンシヨンの向かいに住んでいるので毎日いっしょにティータイムをする。

今までも何度かは東ドイツの話は聞いていた。原子爆弾がもう少し早く完成していたなら広島や長崎ではなくまずドレスデンに落とされていたという話や、お金がなくて仕事をたくさんかけ持ちしていたとか、兄と姉に連絡がつかないとか大変だったんだなど思う気持ちは持っていたけど、ここまで苦しい思いをしていたとは想像もつかなかった。

アウグスブルグに住むようになってからもバスで団体旅行に参加した時、最初は親しく話しかけてきた人達もオーミやオービが話すドレスデンなまりを聞いたとたんに話すのを止めたりするとか、カフェで二人が話をしていると、「お前たち東ドイツのせいでおれたちの年金が減ってるんだ！くそっつたれ。」と、いきなり知らない人にかん違いのひどいことを言われる事もあったらしい。

旧東ドイツのことを指す「オッシー（東の奴ら）」と

いう差別用語があるそうで今でもこの言葉は使われている。

ぼくにとって「東ドイツ」というのは正直に言うところ。「本」つまり、たくさん持つてる歴史の本の中の一つだった。

ぼくは間違っていた。「歴史」というのはまったく違う個々の生活史もふくまれている。

オーピにとっては「人生」なのだから。ドレスデンの空襲でどちらかが死んでしまっていたら、父は生まれていないもちろんぼくもない。

ぼくはオーピから父、父からぼくと血を受け継いだファミリエンバウムの新しい一員だ。

今回ぼくがオーピの人生を聞かされたことがきっかけで、父は家系図をさかのぼって調べようと言った。戦争でほとんど失っているのでも難しかったが、オーピの祖父が書いた日記と歴史資料、写真が公文書館に保存されていることがわかった。

父はさっそく問い合わせ、資料のコピーなどを見るこ

とはできるのかたずねた。正式にはまだ許可はもらってないけれども近いうちに便りがあるだろうと思う。少しだけネットでも見るのができたため写真を見つけた。父に少し似ていてこうふんした。このことをオーピに話すすごく喜んでくれて便りを楽しみに待ってくれている。

残りの人生、今まで受け続けてきた深い傷が少しでもいえるようにたくさんのお愛を二人に伝えたいし、一日でも長くより多くの時間をいっしょに楽しく笑って過ごしたいと思っている。

それから学校でのレポートは、最初に発表しようと考えていた内容について今は少し違うものになった。

最後にぼくも父もオーピも「チャケ」というおなじファミリエンバウムの血を受け継いだことをあらためて誇りに思いたい。

おわり



小学生の部

佳作

「ぼくの12時間」

サバイバル体験記

西武学園文理小学校 三年

遠藤 光之佑

ぼくは真っ暗闇の中、駆け抜けた。空から巨人がおりてきそうな、今にもとびかかってきそうな星のない夜空だった。

〈始まりはここから〉

ぼくは生きるきびしさを体験してみたかった。そして、自分がどれだけ生きる力があるのか挑戦してみたかっ

た。なぜかと言うと、ぼくは、この世界で生き残れる人間になりたいからだ。たくさんの命を守る人間になりたいからだ。

そう思っ、この夏休みに、サバイバルに挑戦してみることになった。できるだけ自分で作ったものを使って、夕方から、朝まで外ですごしてみることにした。お母さんには、火を使っはいけないよということ、もう暑が続くから準備はしっかりするように言われた。ぼくは、文明がない頃の辛さを知っみたいし、自分で作った電気で夜を過ごしてみたい。ぼくはきょう味あることに集中することが好きだ。

〈最強の虫よけスプレーの開発だ！〉

今日は、サバイバルに使うものを考えてみた。虫よけスプレーは特に使うだろう。夜は蚊が多い。体温が高いと蚊にねらわれやすい。ぼくの体温は36度4分ある。森みたいな公園でサッカーしていると、蚊にたくさん刺されて、かゆい思いをしたことがある。虫よけは、自分でも作ることができるとお母さんが話していたので、ぼく

は調べて、自分で作ってみることにした。

インターネットで、「虫よけ 手作り」と調べてみるとたくさん動画が見つかったので、いくつか見てみた。

虫よけスプレ어의作り方の動画には、病院の待合室で流れているようなさわやかな音楽が使われていた。ハッカ油をつかった虫よけスプレ어의作り方がしよいかいされていたが、ぼくはハッカの香りが苦手なので、それはやめることにした。どくだみをつかった虫よけスプレーもあった。どくだみといえば、家の近所のやき肉屋の前でどくだみを発見して、匂いをかいでみたことを思い出していた。理科の花の授業で、どくだみはくさいと先生が話していたからだ。たしかめたら、本当に不思議なくさいにおいがした。これも、虫よけにはつかいたくないと思った。

最強の虫よけスプレーはぼくがきらいなおいはやめておこうと思った。

食糧についても今後、考えないといけないと思った。

夕飯はおにぎりにしようと思ったけれど、火がないと作

れないと思った。

夜、真っ暗な中で一人で過ごすことを考えるとこわくなってきて、仲間が欲しくなってきた。お兄ちゃんにも夜一緒にすごしてもらおうと思った。お兄ちゃんは、ぼくの何倍もの知しきを持っているし心強いからだ。

〈心強い仲間を手に入れよ 8月12日〉

蚊がきらいな匂いは、レモン、ミント、お酢というところがわかった。レモンはポッカレモンでもレモンが入っているのでもいいそうだ。ポッカレモンは、やき肉とかに使うもので、レモンをしばってできたものだ。ポッカレモンは家の近くのお店に売っているのをみたことがあるから、買いに行こうと思った。

しかし、5さいくらいの子の恥ずかしい気持ちを思い出してしまい、行きたくなかった。どんなことかというとお母さんに買いたい物をたのまれて、買いたい物に行った時のことだ。ぼくはポケットにお金をつっこんで、手ぶらで買物に行ったところ、買ったものとおつりを、レジの人にどう明のポリぶくろに入れられてもたされた。

ぼくはまだレジの人と話しくく、知らない人だからスーパーのふくろに買ったものを入れてとは言えなかった。とう明のポリぶくろからは、ぼくが買った冷凍シャケと、おつりがみんなから丸見えだった。とても恥ずかしい思いをして、家に帰った。ポッカレモンを買いにくいのをやめた。

お昼ご飯を食べる時に、お兄ちゃんにぼくの計画を説明した。そしたら、お兄ちゃんは、しぶい顔でこつちを見てきた。おでこにシワがよっていて、俺はやりたくないと言った。ぼくは、もうこの計画をやめようと思った。今までやってきた苦労はなんだという気持ちになった。

しばらく、ご飯を食べながら、お兄ちゃんにもう一度、交しようしてみた。交換条件を出した。交換条件の内容は秘密だ。そしたら、お兄ちゃんは喜んでいいよと言った。ぼくは、よーし！と思った。

へしようげきの事実 8月13日

虫よけスプレーは、お酢をつかって作ってみることに

した。りんご酢をつかった虫よけスプレーの作り方を見つけたからだ。りんご酢なら、りんごのようないい香りがすると思った。しかしそれは大きなまちがいだったことに後で気づくことになった。

電気を作る材料と、りんご酢をお店に買いに行った。買い物で恥ずかしい思いをしないためにエコバックとおさいふを持って行った。電気は、電池を使うよりもエコなソーラーパネルを使ったライトを作ろうと思った。作り方は、ソーラーゲルデンライトのソーラーパネルと、エドライトLEDライトの部分はずし、LEDライトを下に向けて、ビンの口の中にすっぽり入れる。スイッチを入れてみると、レントゲンでとったほねのような光が、ビンから太陽のようにとびでてとてもきれいだった。光は広くはとどかなかったので、4個用意した。充電されたライトが、何時間もつか分らないから、明日、実験してみることにした。

りんご酢をつかった虫よけを作った。つくり方は、りんご酢50ミリリットル、水50ミリリットルをスプレーボ

トルに入れてよくふるだけ。作ったものを自分のうでにシュツシュツとかけてみた。はなを近付けてみたら、信じられないくらいのお臭がはなに入ってきた。りんご酢は、りんごのような匂いがすると思ったら、大間違いだ。納豆のようなよくわからない匂いがした。すぐにうでをかたの方まで全部洗ったけど、まだ匂いがはなに残った。これは失敗に終わった。

蚊がきらいな匂いで、ミントがあることを思い出した。

ミントを口に入れて噛むと、口の中の匂いが消えて、蚊がこなくなるらしい。うちのリビングの花だらけのたなに、ミントがあることをお母さんに教えてもらった。ミントの葉をとって、水で洗って、まずはかいでみた。そしたら、はみがき粉のかおりがした。口の中に入れて、かんでみると、香りとはちがう味がしてオエってなった。お兄ちゃんにも試してもらったが、30秒くらいで吐きそうになっていた。けっきょくポッカレモンを買いに行くことにした。

ポッカレモンを買って、虫よけスプレーをつくった。

りんご酢で作ったのと同じように、レモン50ミリリットルと、水50ミリリットルをスプレーボトルに入れた。もう失敗しませんがとにかくこをきめて、うでにシュツシュツとかけた。はなを近付けたら、まさか、まさか、まさか、まさか、オレンジジュースの匂いがした。これならいけると思った。お兄ちゃんにもオレンジジュースの匂いがすると言って、これならいけると言っていた。虫よけスプレー成功だ。

〈結果は起きたらやってきた 8月14日〉

昨夜、テントの中に入れるライトのてんどう時間を調べた。5時間、太陽に当てて充電した。夜19時45分に、和室の机の上においてスイッチをオンにした。

今日、朝起きると、ライトはまだついてた。12時間以上、点灯することがわかった。これで、12時間サバイバルが明るく過ごせる。

〈暑さにまけない対処法 8月15日〉

今日は、こく暑対策のグッズを買いに行った。こく暑対策とは、ねっ中しようにならないための対策くだ。ぼ

くの住んでいるさい玉泉は、最高気温が35度、36度くらいが続いている。ねっ中しようにならないためには、すずしいところにいることが大事だということは知っている。なのでぼくは、保れいざい、はっぽうスチロールのクーラーボックス、ミニせんぷうきでミニクーラーをつくることにした。後は、スプレーボトルを買った。水を入れて体にスプレーして風を当てると体感が5度下がるというからだ。家でやってみたら本当にすずしくなった。それ以外には、温度計を買った。

サバイバルの場しよを自ぜんがたくさんある、ひいおばあちゃんちの庭にした。畑には、ぼくがすきなキュウリがたくさんなっている。

〈偶然の出会い 8月17日〉

おみせにははっぽうスチロールのクーラーボックスを買いに行った。なぜなら昨日、ミニクーラーを作っていたら、クーラーボックスがこわれてしまったからだ。クーラーボックスのよこ面に穴をあけて、ミニせん風きをクーラーボックスにむりやりおしこんだら、パキッとこ

われてしまった。次はもう少し大きいクーラーボックスを買おうと思った。

しかし、クーラーボックスは売っていたがはっぽうスチロールのものではなかったから買わなかった。

クーラーボックス売り場の近くに、テントが売っていた。大きさはやく、たて2メートル、横1.5メートル、高さ1メートルちよいくらいの茶色と黄色の5000円くらいのテントだった。このテントでねたら気持ちよさそうだなと思って、お母さんにこのテントを買ってほしいとたのんだ。お母さんは買っていいけど、自分のちよ金で買いなさいねと言った。ぼくはどうしようかなって思ったけど、買うことに決めた。レジにならんだ時、少しきんちようした。

レジで会計が終わったしゆんかん、よっしゃー俺のものはこの中に入っていた。ぼくはかたにかついたり頭の上のせたりして、ヤッホーという気持ちで、お店から歩いて帰った。

どう路は暑くてムシムシしていたけど暑さはふきとんだ。

〈2度目のクーラー 8月18日〉

今日も、はっぼうスチロールのクーラーボックスをさがしに行った。しかし、前と同じサイズのものだった。

だから今回は作戦をかえることにした。クーラーボックスのそこを使うことにした。なぜなら、そくめんを使うよりもめんせきが広いからだ。

穴をあけて、ミニせん風きをおしこむことにせいこうした。そして、クーラーボックスのふたにたて10センチ横2センチの長方形の穴を2つあけた。クーラーボックスの中に、保れいざいを二つ入れて、ふたをしめてかんせいだ。後は、ミニせんぶうきの電源を入れて、プロペラを回すだけだ。

電源を入れると、つめたいくうきが長方形の2つの穴から出てきた。家のれいとうこを開けたときのれい気のような風だ。こんなにすずしいの！と思った。気温36度の家の外に出て試してみた。とてもすずしかった。これ

でテントの中をすずしくすることができそうだ。

〈テストーテストーテストォー！ 8月19日〉

今日の朝、お母さんがそうこをそうじしに行った。その時に、ぼくの作った虫よけスプレーのこうかがあるか試してもらった。

家にかえてきたお母さんは、今日1か所しかさされなかったわと、ひとりごとのように手を洗いながら言った。さらにつづけて、今日は蚊がすくなかったんだよとリビングにいる家ぞくに言った。ぼくはなんでだろうと考えた。すると、お父さんがコーヒーをのみながら、たしかに最近、家の中でも蚊がいよいよねと言った。すると、お母さんが、この一週間くらい外の気温が高いから蚊がでてこないんじゃないのかしらと言い返した。

調べてみると、蚊は気温が35度をこえると、きゅう血意欲が低下すると書いてあった。もしかすると、サバイバル当日は、蚊はそんなにいないのではないのかと思った。お昼、ぼくは家の中でテントを広げてみることにした。ワンタッチのテントで、ボンと広がった。まるで、ポケ

モンのマスターボールをなげたしゅん間のようだった。お店で見たテントと同じとは思えないくらい大きく見えた。中に入ってみると4人くらい横になれそうだった。

ぼくはさっそく、テントのまどのなものを全部しめて、自分で作ったクーラーをテントのゆかにおいてつけてみた。クーラーからはすずしい風が出てきて、お兄ちゃんと一緒に、中でおかしを食べた。

しばらくしたら、だんだんと暑くなってきた。なんで、クーラーがあるのに暑いのだろう。お兄ちゃんは、クーラーといえば、高いところについているから、テントの高いところにつけたらいいのではないかと言った。ぼくは考えた。

〈たくさんの失敗 8月20日〉

今日は、新しいじょうほうを仕入れに、図書館へ行った。そこで、たまたま自衛隊式防災サバイバルブックという本を手にとった。そこに、とてもおどろくことが書いてあった。それは、なんと火がなくてもお米が炊けるということだった。ヒートパック（発熱剤）を使用する

らしい。おにぎりは食べられないかと思ったけれど、おにぎりが食べれることがわかった。

さらに、その本には驚くことが書いてあった。火がなくてもお肉がやけるらしい。簡単にいうと、太陽光を利用する。装置的なものを使うと約2時間くらいでやけるそう。ぼくは、豚肉をやって食べようと思ひ、このアイデアをお昼ご飯を作っているお母さんに話してみた。けど、お母さんは豚肉はやめた方がいいと言った。もし、火が通らなかつたら、お腹を壊すかららしい。お母さんは牛肉をすすめてくれた。ぼくは、お昼ご飯を食べるすぐ材料を買いに行くことを決めた。

〈準備最終日 8月21日〉

今日は準備最終日。昨日、見つからなかつたヒートパックを探しに出かけた。一時間半近く探して、やっと見つけた。防災グッズコーナーに並んでいた。家に帰ってさっそく、本に書いてあった通り、お米を炊いてみると、発熱させて25分くらいで炊けるはずが、お米はまだかたかつたし、水も残っていた。原因はフリーザパックに大

きい穴をあけてしまったことだ。熱が逃げてしまったと思いい改良したが、3回やっても失敗した。

そして、クーラーをテントの天井につけることにした。なぜかというと、冷たい空気は、上から下に行くからだ。

テントの天井にクーラーをぶら下げて、スイッチをオンにした。1時間もしたら、さすがにテントの中はキンキンに涼しくなるだろうと思いいテントをしめきった。1時間後、ぼくは楽しみにしながらテントを開けて中に入った。あれ・・・涼しくないぞ・・・。一体、何が起こったんだろう。なんで涼しくないんだろう。家のクーラーは高いところにあつて部屋は涼しくなるのに、なぜ涼しくならないのだろう。

〈12時間サイバルスタート〉

今日は朝から大忙し。荷物をまとめて、ひいおばあちゃんちに向かつた。

庭の気温は約40度。テントを設置して、自作のクーラーをつけてテントをしめた。太陽が出ているので、さっそく牛肉をやく準備をした。太陽が牛肉に反射されるよう

に、アルミニウムの角度を調整するのが大変で汗がだくだく流れてきた。30分後に見に行くと、牛肉が赤から部分的にうす茶色に変わつていた。しかし、その後、すぐに太陽が雲に隠れてしまった。もう肉はやけない。今日の夕飯は、ごはんときゅうりだけかため息が出た。きゅうりを焔に取りに行き、塩でこすつてチクチクをとるように洗つた。

テントに戻つて、少しチャックをあけて中に手を突っ込むと、ちょっと涼しい風がテントの中を漂つていた。こ、これは冷房がきいていのか！と息をのみ、ドキドキしながら中に入った。そしたら、中が涼しかった。成功だ！と思つた。とても嬉しかった。家の中で実験した時に、涼しくならなかつたのは、室内の気温が涼しかったから、涼しく感じなかつたのではないかと思つた。時間がたつのがゆっくりで、10分が30分くらいに感じた。

朝のニュースで、今日は大気が不安定だと天気予報士が言つていた通り、遠くで雷がなる音が聞こえた。小鳥たちがいっせいに鳴き出して向かいの家の屋根にとまっ

た。小鳥たちは、雷のワンタイムイベントを見ているかのようだった。

暗くなりかけてきて、自作の電気を出して、お米をたいた。家で5回失敗して、ヒートパックを大きいのに変更したので今回は成功すると思った。しかし、今回も失敗した。悲しかった。ぼくは、ヒートパックの熱で水を温めて、太陽でやけなかった牛肉をゆでることにした。

これはなかなか美味しかった。すっかり外は暗くなっていた。

真っ暗の中、自作の電気をひとつ持って、お兄ちゃんと土手を散歩することにした。しめった風がすずしく感じた。土手の上がると街の明るい景色が遠くの方に見えた。光がたくさんある中で、青いライトが際立って見えた。ぼくとお兄ちゃんは、遠くの明るいビルに近づくように土手の上を歩いて行った。このまま歩いたら、僕たちの家に着くのかなとお兄ちゃんと話したり、大声で歌ったりして気分は最高だった。ところが真っ暗な空が急に明るくなり、雷がピカッと光った。やばい、雨がふ

ると思って、急いで振り返って、もとの道をさかのぼるように帰った。遠くの景色が森にかわった。ぼくは真っ暗闇の中、駆け抜けた。空から巨人が降りてきそうな、今にもとびかかってきそうな星のない夜空だった。怖いという気持ちで耳をふさぎながら走って帰った。サンダールが脱げるくらい思いつきり走った。

テントに着くと、まずは、安心した。布団に入っていることにした。たくさん虫が鳴いていた。きつとメスを呼ぶためだと思った。こんな静かだとこれだけの虫の声が聞こえるんだと思った。

朝起きたら5時30分だった。5時間しかねなかったけど、よくねれたと思った。テントから出ると寒いくらいだった。ぼくたちはテントを片付けて家に帰った。

〈サバイバル終りよう〉

家に帰ってまずシャワーを浴びた。言葉に表せないくらい気持ちよくてずっと浴びていた。朝ご飯は、わかめの味噌汁と、おにぎりとベーコンと目玉焼きが出てきた。サバイバルをやっていたから、家のご飯がごうかに見え

た。サバイバルで一番苦しかったのは、おにぎりが作れ

えた。

なかったことだ。食べれないのはとても苦しかった。ため息が出るほどだ。家のご飯はとても美味しかった。ぼくは、おにぎりを3つ食べた。

一人で生きるのは本当に^{きび}厳しいと思った。夜もし、ひとりぼっちだったらきつとシンとした静かな夜の中、すごくすごく寂しくなってしまったと思う。仲間って大事ななど、家族と朝ご飯を食べながら思った。

今まで自分で作ったものだけで耐えてみようとやってきたけれど、やってみるとうまく行かないことがたくさんあった。世界を電気で明るくしたエジソンのような研究者たちが失敗をつみ重ねた話を思い出した。研究者たちは本当にど力をし続ける人たちだなと思った。

ぼくはまだ、たくさんの命を守るには早いと思った。けれど、大人になったら世界に優しい発明をして、たくさんの命を守りたいとも思った。

家の窓から外を見ると、巨人が降りてきそうな真っ暗だった空が、輝いたトロフィーのようにまぶしい空に見



小学生の部

佳作

「信じて！」

重度障がい者の学ぶ力

横浜市立青葉台小学校 六年

内田 博仁

自閉症という言葉を知ったことはありませんか？今の時代ずいぶん知られてきた言葉なので知っているものしくは聞いたことがあるという人が多いかもしれない。自閉症はいまだに原因が解明されていない先天性の機能障害だ。僕は2歳の時に重い知的障害を伴う自閉症と診断され、生きていくための最低限必要なことしか教育はいらない

と医者宣告された。

僕の中にある言葉に最初に気づいてくれたのは母だった。この子は知的障害が重いので大切にゆっくり育てていきましようという実質何も理解できないのだから文字や数字の指導や勉強は必要ないと宣告された母は僕をどう育てたいのかとひどく悩んでるように見えた。僕は焦った。なぜなら僕はその時すでに文字の理解はあったし、話している内容もほとんど理解してたし、勉強にも興味があり色々もつと知っていたと思っていた。

僕が2歳の時のことだ。僕は何とかして母に僕は何も分かってない知的障害ではないと伝えたくて機会を伺っていた(2歳の子がそんなことを考えるかって？でも本当なのだから僕は事実として伝える)

ある日母と祖母の家に行った時、ある教材があった。救急車やパトカー、消防車のサイレン音が流れてこれは何の音かな？と聞かれボタンを押して答える教材だ。祖母は僕が何も分からないと思っっているから

「音が鳴るね」

「面白いね」

と僕に話しかける。僕は今こそチャンスだ!と思った。

僕は母の手をがしつと掴み、ピーポーというサイレンの音の後にパトカーのボタンを母の指を使って押した。正解!と音が鳴り響いた。

「え…」

と母と祖母がびっくりしたのか呆然とした後

「待ってこの子わかってる!」

と興奮して叫んだ。

「じゃあこれは?」

サイレン音を出す。僕は母の指を使い次々と当てる(この頃の僕は自分の指や体をコントロールできなかった)の母の指を使い答えを示していた)

「この子は馬鹿じゃない。話せないだけで色々わかっている!」

そう言いながら母は僕の中に一筋の光を見いだしたのか、何か決意したかのような強い目で僕を泣きながら見つめていた。

それから母は僕が本当に理解しているのか確認する作業に夢中になって、毎日のように僕に問題を出し続けた。冷蔵庫は飛ぶ?○か×か、自転車より飛行機が早い?○か×かなど。僕は母の手を使い次々と当てる。周りからは知的障害だと何も理解してないと言われ続けていたのだから母の驚き、興奮は相当なものだった。そして絶望的な僕の子育てに希望を見いだした母は僕に毎日勉強を教え始めた。言葉のカードをたくさん見せたり数字を何度もなぞらせたり。僕は目線をその文字に合わせたりじっと集中したり反応することができなかったのだから、ちゃんと本当に聞いているかどうか母は分からなかったと思う。それでも母は僕を信じ続け僕の中にある可能性、目には見えないけれど光る何か希望を疑いなく信じ、とにかく僕を毎日机に座らせ日々教材を増やしていき、熱心にひたむきに毎日僕の教育に励んだ。

表面的には変な声を出したりパニックや奇声を発したりとても知性のある行動はとれてはいなかった僕だったが、母は僕を知性の備わった子供として日々接してくれ

た。おかげで僕は幼少期にたくさん言葉や知識のシャワーを浴び、僕の内面は真つすぐにすくすくと成長していった。

僕が小学校に入学して不思議に思ったことがある。教科書がないのだ。僕は本が大好きだし理科や社会や新しいことを知れること、勉強を教えてもらえることにわくわくし期待していた。でも支援学級では先生が僕に合わせた教材を用意していた。幼稚園児が遊びで使うような絵カードやおもちゃやまるで何も理解してない赤ちゃんに接するようなものばかりだった。僕はショックだった。僕が話せないから？視線も行動も言われたことに無反応だから？

その外見の現象だけで何も理解してないと判断される。もっと言うなら知能検査の成績だけでIQの数字だけで重い知的障害があり何も理解できないと判断されてしまう（自分の動きをコントロールできない自閉症児の正確な知能を判定するのは不可能だと思う）

勉強はどんな子供にも必要だ。例外なくどんな子供に

も。勉強は人生を豊かにしてくれる。人格を形成するのにとっても大切なことだ。何度も言うどんな子供にもだ。決して差別してはいけない。なぜ話せないだけで勉強は

必要ないと決めつけるのだろう。どうして決められた検査だけでその子供の全てが判ると判断するのだろう。百人以上れば百人とも違うのにどうして一つの検査だけで全てを判断できる？もし重い知的障害があると判断された子が本当は色々理解していたら？実際僕はIQは低いが小さい頃から毎日訓練を続けこうやって文章を綴っている。もちろん全ての子を見誤っているとは言わない。でも中には僕のように実際は色々理解していたら？

現在知能を計る検査方法は主に田中ビネー式が使われている。田中ビネー式とは心理学者の田中寛一が昭和二十二年に発表し度々改訂しながら現在も使われている検査方法だ。昔と違って自閉症については新たなことが色々分かってきているのに改訂されているとはいえずっと同じ方法で知能を計っているのだ。この検査方法だと口頭で答えられない子や体をコントロールできない

子には解答がほぼ不可能なので正確な知能の結果を出せ
ないと思う。内面や人格の豊かさ本当の意味での知性を
計るのは難しい。

僕はこの検査が何よりも苦手だった。何せ車はどれ？
と聞かれそんなの分かるに決まってるって思ってるの
に、頭では分かっているのに体が動かないのだ。まるで
頭と体を繋ぐ重要なコードが切れてしまってるような感
覚？指を動かしたくても指令が指に届かないのだ。結局
僕は車を指さすことができない。そしてああ分からない
のねと判断されてしまう。車がわからないわけないじゃ
ないかー僕は間違った判断をされたことに動揺し落胆し
そして悪いことにこうなるとどんどん集中力を失くし、
より体と心の制御がなくなる。

僕達がテストができないのは理解できないからではな
い。思ったことを出力する手段がないからだ。脳と体の
指令が上手く伝達しないだけで適切な訓練をすればきち
んと教育できるのだ。

アメリカのテキサス州に僕みたいに言葉は発すること

はできないが、理解はしていて勉強の機会や教育を望ん
でいる子供達を集め教育する学校がある。RPMという
教育法だ。僕も最初は二者択一から始めたのだがこの方
法もまずは選ぶことから始める。全く表現方法を知らな
い子に教えるのはもの凄いエネルギーを要する。ソマ先
生は子供の気持ちを奮い立たせるためにカモン！カモ
ン！と何度も叫ぶ。そこでやっと選ぶべき指が動くのだ。
そうやって内側にある知識や言葉を少しずつ引き出して
いく。そして段階的に文字を指させるように導いてゆく
のだ。こうした方法で本来学ぶべき算数や歴史や化学な
ど幅広い学科教育をして人格を育てていく。

では日本ではこういった教育法はないかといえれば実は
ある。僕が教わった先生國學院大學の柴田教授だ。

「柴田保之 東京大学教育学部心理学科を卒業後同大
学大学院を経て國學院大學に勤務。専門は重度・重複障
がい児の教育の実践的研究」プレジデント紹介欄より

柴田先生は障がい者支援をきっかけに約二十年前から
言語表現の研究を続け言葉を発することができない人達

のコミュニケーション方法を研究、実践している。

柴田教授は現場主義だ。休みの日も支援学校などに出向き何とか言葉を引き出そうとあらゆる手法を試す。手のひらに字を指で書かせようとしたりあいうえおの表を使ってみたり。僕は柴田先生の指導で電子手帳で文字を打つ方法を教わり自分自身で何の補助もなく文章が打てるようになった。

柴田先生はいつも汗だくで休みも取らず毎回平気で四、五時間はぶっ続けて指導をしてくれた。変な話いつも無料だ。どんな人も平等に教育を受けるべきだという信念や決意がもう違う。本物の先生だ。頭が下がる。

世の中は日々変わっていく。偉大な先生方が勇気を出し逆境を恐れずこの狭い閉じ込められた世界から輝く未来への扉を開いてくれた。

おかげで僕は未来を信じていることができるようになり、自分の可能性や自分の存在が皆と同じように唯一無二である、一人一人どんな子供もたった一度の人生を豊かで色どりのある冒険に満ちた人生にする権利があるのだ

と心から信じていることができた。

僕は運よく僕の知性に気づき根気よく粘り強く強い意志で教育してくださる先生や家族に恵まれた。でもまだ世の中には話せないだけでその内面に溢れている言葉や思いを出せず受けるべき教育を受けることができない仲間達がいるのだ。

僕はそれがとてももどかしいし悔しい。今までの常識、知的障害が重く話せない、物事をほとんど理解してない。この常識を覆すのは勇気がいる。

僕だって怖いし正直家や支援のある施設で大人しく守られて生きたほうが楽かもしれない。

でも人生は多くの経験があつてこそ素晴らしいのだ。

心が震える物語に出会ったり、心が躍るような音楽に触れたり、難しい問題が解けた達成感、仲間達と喧嘩したり大笑いしたり：それが仲間と学べる醍醐味生きているという実感、喜びなのではないか。

人生とは興奮や驚きの連続なのだ。成長できる喜び学びの素晴らしい機会を僕達から奪わないでほしい。

だから僕はこうして打っている。勇気を出して壁を破って。変化には勇気が必要なのだから。

世界中の僕のような子供達みんなの閉じこめられた内面が開き、その子供に適した教育を受け人生が変わり、輝く未来をみんなが手にして欲しい。

僕だけが満たされても仕方ないのだ。

子供達が平等に教育を受けるチャンスに恵まれること。仲間達が受けるべき教育を受けることができる為に僕はこれからも日々努力していきたい。

世界中で教育を受ける子供が増えることでより良い知恵や力が集まり世界がより良く変わる。世界が今よりさらに素晴らしい発展をとげることができるのだ。限界を決めてしまうのは簡単だ。でも信じてくれる人がいたら自分ではできると信じられたらその瞬間から人生は世界は変わるのだ。

僕は伝えていきたい。全ての子供に学ぶ権利があるのだと。

そして全ての子供に学ぶ力があるのだと。

参考文献

「最重度の障害児たちが語りはじめるとき」

「自閉症の僕がありがとうを言えるまで」

中村尚樹

イド・ケダー



小学生の部
選考委員特別賞
那須正幹賞

「虫ののろい」

八王子市立南大沢小学校 四年

伊藤 麦

のろいをかけられてしまったのだろうか。

わたしは虫がこわい。

それを友だちに話すと、うんうんとうなづいてくれて、「そうだよね。ゴキブリとかって本当にいやー」という話になる。

実を言うと、わたしはまたゴキブリに会ったことがな

い。もしゴキブリに会ったらショックで死んでしまうかも知れない。お母さんがものすごくきれいずきなおかげで、わたしは9才まで生きのびる事が出来た。

わたしはアリですらこわい。小さいころ一メートル先を歩いているアリを見つけると、かたまつて動けなくなるほどだった。アリは自分より大きなミミズや青虫を食べてしまう。小さいけれど、肉食じゅうだ。バッタだってこわい。セミだってこわい。

中でも一番にがてなのが、ぐねぐね曲がる虫だ。

今年の春の事。お父さんともうすぐ3才になる妹のさとわたしで、ピクニックに出かけた。うちの家族は毎週のようにピクニックをする。その日はすごい空も晴れていていい気持ちだったので、少し遠くまで自転車を走らせて、長池公園に行った。おかの上にのぼって3人でおいしいお弁当を食べたあと、池をめざしてハイキングに出かけた。長池公園は山全体が公園になっていて、まん中に一本ほそうされた道がある。その道の先に池が

あるのだ。ささがはしゃいで一番前を走っていった。その後ろをお父さんがおいかけける。わたしは一番後ろでおいしい空気を味わいながら歩いていた。青くすみ切った空には雲ひとつない。少しぬれた葉っぱがキラキラとかがやいている。ほんのり温かい春風がわたしのかみをゆらす。

しばらく歩いていると足元でなにかのしせんを感じた。「なんだろう」

見てみると、小指くらいの大ささの黒いものが、うねうねと動いている。ざわざわと毛をゆらして、体にポツポツと赤くて丸いものがある。

それがまるでたくさんの目に見えた。

「毛虫っー」

とわたしはさげんで、思わず3メートルくらい後ろにげた。きゆうに口の中がもこもこぐちゅぐちゅしてくる。黒いゴマのような味と、かゆいようなチクチクするような感じが口の中に広がる。自分の毛まで毛虫のようにさか出ちになる。手や足に力が入らなくなり、うまくこきゅ

うができなくなってきた。わたしがこんなにだいさんじなのに、お父さんとささはテクテクと先を進んでいく。「まってよ」とわたしは弱々しく言った。「はやくおいで」とお父さんが歩きながら答えた。もう10メートルいじょう先のほうにいる。

「まってつてば」と今度は大きな声でさげんだ。

「だいじょうぶだよ」とお父さんのん気な声で答えるが、はっきりいってせんせんだいじょうぶじゃない。わたしはへろへろと歩き出した。なるべく毛虫に近づかないように道のはしっこを歩いた。しばらく進むと、また別の毛虫がいたので、またぐるっと遠回りして歩く。そうやってなんとか歩いていたら、進むにつれて毛虫が多くなって来た。毛虫をよけるとちゅうで、また別の毛虫をよけなければならぬ。ここはまるで毛虫メイロだ。なるべく毛虫は見たくないけど、ぜったいに毛虫をふみたくないの、ただひたすら地面だけをうす目で見ながら、毛虫から少しでも遠い道を歩いた。

こうしてやっと池の広場に来る事が出来た。めでたし

めでたし。ではありませんでした。そこにはじごくのよ
うな光けい広がっていた。「いいけしきだね」とささ
とお父さんが話している。広場には四角いコンクリート
の池があって、あたりには毛虫はうじゃこらといた。お
父さんはささをだっこして歩いていく。足元はあまり見
ていないようで、毛虫をふみつぶしてしまったのが見え
た。グチャグチャグチュツと音が聞こえたような気がし
た。口の中にじゃあくな味が広がった。わたしはひっし
で「もういやだあ。帰ろう。毛虫こわいよ」とせつとく
した。「えらいまあ来たばかりじゃん」とお父さんが言っ
た。「ここで遊びたい」とささも言った。二人とも不満そ
うだったけど、帰る事になった。

帰り道もまた毛虫メイロを通らなければならない。な
んだか来た時よりも毛虫がふえているような気がした。
なんでこんなにたくさんいるの。なんだか来た時より大
きくなってる。メイロがどんどんむずかしくなっていく。
出口がわからない。気がつくどわたしはせんぶの方角を
毛虫にかこまれていた。毛虫がじりじりとわたしのほう

にせまってくる。わたしは思わず「うえー」と声を出
した。お父さんがふり返って、ふしぎそうに笑った。

「毛虫はなんにもしないからだいいじょうぶだよ」と言っ
た。ウンだ。虫は心の中にしん入してくる。わたしの世
界をこわし、どんどんわたしのい場所をなくしてゆく。

「こんなのせんぜんこわくないよ！」とささがあきれた
ように言った。まったく歩けなくなったわたしに、お父
さんはイライラしながら、「ほら、2才だっただいいじょ
うぶなんだから。」と言った。なんで分かってくれない
んだらう。二人がなにか別の生き物のように見えてくる。
虫ぞくの仲間かもしれない。わたしは一人ぼっちのこわ
さと虫のおそろしさでパニックになった。

「いやだいやだいやだこわいこわいこわいこわいこわい
こわいこわい!!」とわたしは山じゅうの空気をふるわ
せるような声でなきさげんだ。

その後のことはあまりおぼえていない。わたしは外で
遊ぶのがこわくなった。それ以来長池公園へのピクニッ
クは一度も行っていない。何度もさそわれたけどいつも

「本が読みたいから」と言っていることわっている。

「まるで、のろいにかけられたみたいだな。」

とお父さんが言った。

「のろい?」

空からハテナマークの雨がふってきた。のろいといえ
ばおとぎ話のまほうだよね。わるいマジョがかけるや
つ?っていうかなんのこと?

そのときは意味が分からなかったけれど、今になって
考えてみると分かる気がする。たしかに道に虫がおちて
いるくらいで動けないのはおかしい。実さいに虫がお
そってきているわけではない。想ぞうしてしまってこわ
いのだ。虫がかじっているのではなく、かじられたとこ
ろをそうぞうしてしまっただけなのさ。

どうしてのろいがかかってしまったのだろう。「あな
たは虫がこわくなるこわくなる。」とだれかがわた
しにさいみんじゅつをかけたのか。その人を見つけてさ
いみんじゅつをとかせれば、のろいはとけるのだろうか。

わたしは虫がこわくなった理由をさがすために、きお
くをたどる事にした。

「お母さん、なんでわたし虫がこわくなったの?」と聞
いてみた。するとお母さんは「生まれつきじゃない?」

と答えた。

「そうだな。でも、今ほどじゃなかったよ。昔は公園の
虫にきょうみを持った。」とお父さんが言った。

そういえば公園にあながあいていてふしぎに思った事
あるな。いつもお父さんといっしょに行っていた公園だ。
まだ前の家に住んでいたころだから、2才のころだと思
う。はじめてそれがアリのすだと知ってきょうみをもっ
たわたしはどうしても気になって、指をつっこんでし
まったのだ。(ガブツ)あまりにいたかったので、目にいっ
ぱいなみだをうかべてあわてて指を引きぬいた。すると
その指にはア리가かみついていた。指先からポタツと血
が流れおちる。わたしはじめて自分の血を見た
のだ。それ以来わたしは虫がこわくてたまらなくなった

のだ。

その思い出をお父さんに話してみた。すると、お父さんは笑って言った。

「そんな事はぜったいにない。それはにせものの記、おくだよ。実さいにはおこっていないことが思い出になってしまふのはよくあることなんだ。きゆう急車のうちゅう人とかさ。」

（あつ、たしかに……）とわたしは思った。それは昔、お父さんと交通公園に行ったときのこと。ピーポーとサイレンを鳴らしてきゆう急車がやってきた。はじめてみるきゆう急車にわたしはきょうみを持ってのぞいてみた。すると、助手せきにうちゅう人が乗っていたのをはつきりおぼえている。緑色の人間がたのうちゅう人で、緑色のおかっぱで、緑色の目が光っていた。

「えっ。今でも本当にあったことだと思ってる？ たしかにきゆう急車が交通公園に来たことはあったよ。急病人が運ばれていったね。でも、麦とお父さんはきゆう急車からそうとうはなれた所にいたんだよ。だれが乗って

たのか見えるはずはない。そもそもうちゅう人って本当にしんじてるの？」お父さんは笑って言った。

たしかに今、かんがえてみれば、あれは二セのきおくのかのうせいもあるなあと思う。うちゅう人がもしいたとしても地球にはいない気がする。もし地球にうちゅう人が来ていたとしても、きゆう急車ではたらいたりはしない気がする。だから二セモノのきおくがあるというの
はなっとくできた。だけど、やっぱりそのきおくは本当の気がする。あまりにもはつきりおぼえているから、それがうそだと言われるとふしぎな気持ちになる。もしかしたらお父さんは、うちゅう人にきおくを消されたのかもしれない。

「麦は思いこみがはげしいからなあ。」とお父さんは言った。

3才のとき、わたしの家は南大沢にひっこしてきて、新しいようち園に入るようになった。前のようち園とくらべると、かなり野せいでとくしゆなようち園では、

だして園庭を走らされたり、山のぼりをたくさんさせられていた。山のぼりをしてるとき虫をたくさん見たけど、平気だった。そのようち園でわたしはいつもビリッ

ケツだった。走るのおそいし、あく力もない。でも、

わたしには、おどろくべきとくぎがあった事をこの作文を書いていて思いだした。わたしはバツタをつかまえるのがじょうずだったのだ。さすがに大きいのはこわくて、小さなショウリョウバッタだけど、わたしはつかまえるのがとくいで、3秒あればつかまえる事ができた。だからほかの子たちにもとってあげていた。ようち園で畑をたがやしにいったとき、みんなでイナゴをつかまえた事もある。わたしはたくさんつかまえた。農家の人がイナゴをカリッカリに焼いてくれて、あまいしうゆで味つけて食べてた。すっごいおいしかった。おすしほどじゃないけど。

もしかしてこれもニセモノの記おくだろうか？

「それはたぶん本当のことだな。イナゴの写真がのこっている。それに、年長さんの時よくダンゴムシをつかま

て見せてくれたな。」

わたしのお母さんも虫ぎらいだ。もちろんわたしほどじゃないけど。わたしが虫ぎらいになったのは、お母さんがこわがっていたからこわくなったってのはちよっとあるかも。

だけど、わたしはようち園のときは、もう虫ぎらいではなかったらしい。ということは、のろいをかけられたのはその後だ。小学2年生のころには、かく実にこわかったから、一年生から二年生の間になにかあったのだ。その間にお母さんと虫がたくさん出るところに行っていないのでお母さんは、はんにんじゃあないと思う。

お父さんとはよく虫のいる公園に行った。お父さんはいつも「こわくないよ。この虫はなんにもしないよ。」と言っていた。だから、「虫がこわくなる、こわくなる」とさしみんじゅつをかけたりはしないだろう。

小学生になってわたしが虫をこわがっていると、お父さんは、「そのキャラやめろ」って言った。わたしはその

言葉にすっごいきずついた。わたしがブリッコで虫ぎらいのふりをしているとお父さんは思っていたようだ。

もしかしたら、学校の友だちがのろいをかけたのかもしれない。とってわたしはいろいろ考えてみた。でも、学校の友だちはみんなやさしすぎる。だから「こわくなるこわくなる」とわたしにのろいをかけたりはしないと思う。

だとすると一体だれがわたしにのろいをかけたのだらう。

わたしが1年生のとき妹のささが生まれた。まだ0才の赤ちゃんがのろいをかけるのは、どう考えても無理だ。

でも、まてよ？

わたしが虫ぎらいになった時期と、ささが生まれた時期は、完全にいっちしている。これってなにか関係あるのかな。

わたしはあのころさびしかった。気づいてもらいたかった。

ささが生まれる前わたしはお母さんをひとりじめしていた。ささがうまれてうれしかったけど、ささばっかり「かわいいねー」って言って、わたしのことは後回しになった。「これくらいでできるでしょ」っていう感じになって、急になんでも自分でやらないといけなくなった。ささが元気に足を動かしただけで、「これはサッカーせん手になれるかも。』オリンピックに出れるかも』って言ってささばっかりズルイと思った。

それに、お母さんが急にこわくなった。ささが大へんだから、そのストレスがわたしにぶつけられている気がした。説明しても「こうすればよかったですよ』って一方的におしつけられて、わたしの言うことは、なかなか聞いてもらえなくなった。

ささは3才になった。ささはわたしのことが大すきだ。わたしたちはとても仲よしになった。でも、実を言うと、わたしは、まだ少しささにしっとしていて、(ささがい

なければいいのに)と思うことがある。

外に出かけると、お父さんやお母さんは、さきから目
がはなせなくなる。だからわたしのことは放っておかれ
る。わたしはもっとかまってほしかった。自分の事をもっ
と心配してほしかった。

お父さんに虫がこわいって言っても、まったく相手に
してくれなかったから、わたしは大きな声でこわいと
言った。「虫がこわい！虫がこわい！」と何度もくりかえ
し口にした。わかってほしかったから。聞いてくれなかつ
たから。感じようてきにつよく。こわいと言った。そう
したらまずまず虫がこわくなってきた。のうに虫はこわ
いものだって、固定されてしまった。

わたしにのろいをかけていたのは自分じしんだったの
だ。

「大きくなったらたんけん家になるって、ずっと言っ
たのに」とお父さんが言った。わたしはたんけん家に

なって、山の中で宝さがしをしたかった。

今でも山は大すきだ。だから山にいる虫ならだいじょ
うぶ。せつたいにこわくないとは言切れないけど、き
本的にはこわくない。今までたくさん山のぼりをしてき
て、山で生きる虫には愛着がある。

「長池公園だって山なんだけどな。」と、お父さん。

でも、長池公園の道はほそうされている。それは人間
のじん地だ。人間のじん地に入ってくる虫はこわい。目
だっちゃうんだよね。目に入っちゃうの。自分たちが住
んでいるじん地に、勝手に入ってくる虫は、かい物のよ
うに見えてしまうからこわいんだよね。「じゃあ、道が
ほそうされていなければだいいょうぶなの？」とお父さ
んが聞いた。わたしは少し考えて、「たぶんだいじょう
ぶだと思う。」と答えた。虫たちのすみかに入っていく
のは、自分が入っていく立場だからこわくない。山の中
をたんけんしていて、毛虫に出会ってもこわくなかった。
ありのままのすがたでいる虫は、こわくない気がする。

「お父さん、春になったら、また長池公園に行こう。」
わたしは勇気を出して言った。

のろいのなぞは、とけたし、もう虫にあってもなんと
かなりそうな気がする。もしまたこわくなったら、山道
ににげこんじゃえばいいんだ。



小学生の部
選考委員特別賞

最相葉月賞

「天国への案内人」

西武学園文理小学校 三年

川口 颯

ぼくのおじいちゃんは社長だ。ものすごい力持ちで、おもしろくて、ぼくといっぱい遊んでくれて、しかられることもあるけどぼくはおじいちゃんのが大好きだ。「もう!!颯君はじいのことばかり。ばあもこんなにかわいがってるっていうのに。」

って、となりでおばあちゃんがすねちゃうぐらい、ぼく

はおじいちゃんのが好きなんだ。

キャッチボールをしたりチャンバラをしたり洗車を手伝ったり、ぼくはいつもじいのをばをはなれない。でも、じいのスマホが鳴ると、そんな楽しい時間も終わりになる。じいは急いで仕事に向かう。じいの仕事はそうぎ屋さんだ。おそう式の仕事はいつもとつぜんだ。だから、小学校の入学式も運動会も発表会も、いつも来てくれるって約そくしていても急にお仕事になって来られなくなってしまう。一しよにおでかけていても電話があるとすぐに帰らなくてはいけない。小さい時は泣いていたけど、今は、ぼくもえ顔で「いってらっしゃい。お仕事、がんばってね。」って言えるんだ。オレ、大人になったよな、えらくなつたなと時々思ったりする。

ある日学校で、

「颯のおじいちゃん、何の社長なの?」

って友だちに聞かれた。ぼくは

「おそうしきやさんだよ。」

と答えた。すごいだろって気持ちで言ったんだ。でもみ

んなは「えっ？」って感じの顔をして、何だか暗い感じになった。あれ、何でだろう。オレ、変なこと言ったかな。みんなには「そうぎやさん」と言っても通じないことがあったから、わざわざ「おそうしきやさん」って言っただけなのに。すぐにチャイムが鳴って授業が始まった。授業中も気になった。いつも「静かに」って注意されればかりいる帰りのスクールバスの中でも一言もしゃべらないで考えていた。

「川口君、今日静かにできたね。」

ってほめられたけれど、全然うれしくなかった。家に帰って制服から着がえたとたん、よくわからないけど涙が出てきた。さっきのみんなの「え？」が気になって仕方なかった。そのとき、ひいおばあちゃんが死んだときのことを思い出した。あのとときじいは、死んでるひいおばあちゃんを平気でさわってた。ドライアイスを交かんしたり、口をとじたりしてた。ぼくは動かなくなったひいおばあちゃんがこわくて、とおくから見えていたけど、じいは何とも思っていないみたいだった。そうか、そうぎや

さんて死体さわる仕事なのかな。だからみんな「えっ」ってなったのかな。ぼくはその日、元気が出なかった。大好きなじいの仕事は、いやな仕事なのかな。次の日も、その次の日も気になっていた。

何日かたって、ぼくは勇気を出して聞いてみた。

「じいはおそうぎのお仕事好き？」

って。じいは少しびっくりした顔で、

「ん？そうだなあ。好きだよ。」

って言った。ぼくがお仕事のことを聞くなんて初めてだからかな。じいは答えたあともびっくりの顔のままぼくを見てた。そして、

「あのお、おそうぎのお仕事って大変なの？」

と聞いた。本当は、

「死んだ人をさわる仕事なの？じいはこわくないの？」

って聞こうとしたけど、聞けなかった。じいが死体をさわるなんてぼくはこわかった。

「お仕事かあ。そうか。」

じいは少し考えてこう言った。

「颯ちゃん、お仕事はな、何でも大変なんだよ。楽な仕事なんてないだろうなあ。でも、『いいそうぎになりました。ありがとう。』って言ってもらえたら、大変だったことなんてわすれちゃうんだよ。」

じいは、え顔で答えてくれた。ぼくと久しぶりに会ったときと同じぐらいの最高のえ顔だった。よかった。じいは、おそうぎの仕事が好きなんだ。本当によかった。

そして、じいの仕事はなくなった人がきちんと天国に行けるようにすること、悲しんでいるまわりの人たちも安心してなくなった人を天国に送り出せるようにお手伝いすることなんだってことも教えてくれた。なくなってから何日も見つからないままの人もいるし、家族もいなくてたった一人でなくなっていく人もいるそうさ。そんな人には、じいが一人でお骨をひろうこともあるそうさ。それから、百さいをすぎるといものものすごく長生きをした人もいればよくより小さい子どもがなくなることもある。その一人一人に心をこめて、せいっぱいのそうぎをじゅんびするんだって。その人の天国へ

の旅立ちを最高のものにするためにがんばっているというお話をしてくれた。やっぱりぼくの大好きなおじいちゃんはかっこよかった。おじいちゃんは天国への案内人だ。

もう一つじいがぼくにお話してくれたことがある。人はみんないつか死んでしまうということだ。どんなにえらくたってどんなにお金持ちの人だって、もちろん、じいもぼくもだ。でも、さいごにいい人生だったなって思えるように、そう思いながら天国に行けるように、生きているぼくたちはすてきな毎日にしていかなきゃいけないということ。だから、ぼくは勉強も運動も、友だちと遊ぶことも、お手伝いも、すべてのことを一生けん命に全力でがんばることがひつようなんだとわかった。

お仕事についてしつ問したら、じいはそれだけじゃなくて、ぼくが毎日、どうすごしていかなくてはいけないかということにも気づかせてくれたんだ。やっぱりじいは、かっこいい。



小学生の部
選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

「カマキリが教えてくれたこと」

渋谷区立千駄谷小学校 四年

中野 理香

その日は秋とは思えないほど暖かく、青空が広がる気持ちのよい日でした。人ごみの中紅葉を見に行つて、自転車で帰ろうとした時のことです。巨大なカマキリがモゾモゾと動いているのを見つけました。普通の大きさのカマキリだったらそのまま通りすぎてしまったと思うのですが、とても大きかったのでわたしはふしぎに思い、

自転車をおりてみることにしました。

巨大だと思っていたカマキリは実は二匹でした。二匹のカマキリが、けんかみたいにとっ組み合いをしていたのです。カマのようにするどいギザギザのついている大きな前足ではげしく相手を攻げきし、羽をふるわせています。大きな腹がゆっくりとモゾモゾ動いて、まるでおすもうさんの取り組みのようです。

しかし次のしゅん間、信じられないことがおこったのです。なんと、大きな方のカマキリが小さい方のカマキリの胸をがっしりと前足で固定し、頭を食べはじめたのです。三角形の頭からのびたしよっ角を交互に動かし、UFOキャッチャーのアームみたいな何本ものひげのようなものが出た口でバリバリと食べていきます。大きな目の中には黒い点があるのですが、どこを見ているのかはわかりません。大きなカマキリは無表情のまま、あつという間に頭を食べてしまったのです。

私はショックのあまり何がおきているのか理解できずにいきましたが、とっさに小さなカマキリを助けなきゃと

思い、木の棒で二匹をひきはなしました。大きなカマキリは必死で相手にしがみつこうとしましたが、私も必死にそれをふりほどき、ようやく大きなカマキリを追いはらうことができました。頭のなくなったカマキリはその場でクルクルとまわりながら動いています。頭がないので方向がわからないのかなあと思いました。

しばらくすると、今までいなかった小さなアリが何匹もやってきて、カマキリの体によじのぼってきました。

いつもならアリが自分より体の大きいカマキリの方に来ることはないと思うのですが、弱っているからやってくるのでしょうか。何となくこわい感じがしました。しかしカマキリは残った後ろ足でいねいに一匹ずつア리를ふりはらいました。ついにたくさんいたアリはどこかにまた消えていきました。頭のないカマキリも回転しなげらなるとか移動し、草むらの中に消えていきました。

頭のないカマキリが体を一生けん命ふるわせて、それでも必死に生きようとしている姿に私はしばらく声も出ませんでした。そしてもう少し早く二匹をはなしてあげ

れば良かったと思いました。

家に帰ってから、さっき見たことが頭からはなれず、インターネットでカマキリの共食いについて調べてみることにしました。するとそこにはもっと信じられないことが書いてあったのです。

なんと、頭を食べていたカマキリはメスで食べられていたのはオス。二匹はカップルだったのです。カマキリのメスはオスに求愛されるとオスを食べてしまいます。どうしてかという、メスが卵を産むためにたくさん栄養が必要だからです。食べられたオスのカマキリは自分が死ぬことで子供たちに栄養をあたえることができます。自分が食べられた方が子孫を残すのに有利なのだそうです。

私はまた頭の中が真っ白になってしまいました。私は頭を食べられたオスのカマキリが痛そうでかわいそうだと思っていました。でも実はオスは喜んでメスに食べられていたのです。カマキリに気持ちがあるかどうかはわかりません。でも私が良いことだと思っただけは、

カマキリにとってはおせっかいだったのです。そしてメスがオスを食べることはひどいことではなく、カマキリが生きていくために必要なことだったのです。その日は心の中がモヤモヤしてなかなか寝ることができませんでした。

次の日起きると、いつもの朝とは少し違うような気がしました。なんとなく目の前にある自然や生き物たちがそこにいることに理由がある気がしたからです。

今回カマキリが教えてくれたことが二つあります。ひとつは何があっても一生存けん命生きようということです。頭を食べられても必死に動きまわるカマキリを見てそう思いました。もうひとつは自然には人間とは違うルールやきまりがあって、勝手に変えてはいけないのかもしれないということです。生き物たちがすることには何か理由があると思うのです。だから良いとか悪いとか決められないのです。

私はこの体験を通して、もっと自然のしくみやきまり、その理由について知りたくくなりました。そんな気持ちに

させてくれたカマキリたちにありがとうございます。



大賞

「葬儀のススメ」

多摩市立諏訪中学校 二年

平家 和志

二〇一九年、僕は二回もお葬式に行った。不思議なことに、お葬式なのにみんなが笑顔だった。お葬式に行ったのは小学二年生(二〇一四年)の時以来だ。夏と冬にそれぞれ一回で、どちらも曾祖母である。夏・ミエおばあちゃん(祖母の母)で夏休みに。冬・ノブおばあちゃん(祖父の母)で、学校を四日ほど休んで行った。お葬式の後はそのまま冬休みを過ごした。しかし宗派が違う

ので、全く同じお葬式ではなかった。

八月、曾祖母が二人とも体調が悪いということで、東京に帰る予定の日を二週間ぐらい伸ばした。八月二十七日に帰るということになった。決めてから五日ぐらいたった朝、母に起こされて、「今日は大人が忙しいから妹と一緒におとなしくしておいて。」と言われた。この時、勝手にノブおばあちゃんが亡くなったと思ひ込んでいたが、実際はミエおばあちゃんが亡くなったのだった。

お昼前に、祖父母の家に近いコンビニへ行つた。お昼ご飯のおにぎりを二個買い、コンビニの目の前のお通夜会館へ行つた。お通夜会館は、葬祭ホールの真横にある。会館は豪華で、踊れそうな広さの玄関ホール、広めのお風呂、トイレ、二台のベッドがあるベッドルーム、広い畳の祭壇の間、キッチン、そして畳の広間がある平屋の家である。キッチンにはテーブルがあり、四人で使えるようになっている。ここでいとこ達と昼食を食べた。キッチンではお湯も使えるが、夏なので使わなかった。冬だとすぐくありがたい。この会館がホールの敷地内に三棟

もある。小二の時に系列店の会館に泊まった。その時はベッドではなく、和室に布団を敷いて寝た。これは、夜^{*1}伽(よとぎ)というそうだ。隣の部屋には祭壇があり、一晩中電気がついていたので、眠りづらかった。小学二年生の時だったのに記憶に残っているということは、とてもワクワクしてたのだと思う。このような会館が葬祭ホール横にあるのが当たり前と思っていたが、全国共通ではなかった。東京にある葬儀屋さんでは、泊まれる葬儀屋がごく少なかった。

ミエおばあちゃんが畳の上に布団を敷いて北枕で寝ていた。布団の前で合掌をした。北枕とは、『お釈迦様がご入滅の際、「頭北面西脇臥」つまり頭を北、顔を西に向け』^{*1}ていたことに由来するそうだ。仏にならせてあげたいという願いが込められているらしい。合掌をする前に、ミエおばあちゃんの顔の上に掛けられていた白い布を取った。この布は今では意味がない様だが、昔は^{*2}「も^{*3}しかしたら息を吹き返すかもしれない」という願いや、顔が青白くなってしまおうのぞと見せないように、乾

燥防止のためにかけていたそうだ。お通夜会館はエアコンが効いていて涼しく、過ごしやすかった。夕方のお通夜までやる事が無かったので、一旦祖父母の家に帰った。ゲームをしたり、テレビを見て楽しんでいたら、いつのまにか夕方になっていた。またお通夜会館に行くと、親戚がたくさん来ていた。

いとこ達と座布団の取り合いをしていたら、「もう座れろ。」と言われ、部屋の一番後ろの右はじに正座をした。しばらくお経を聞いていたが、途中で飽きたので、数珠の珠が何個あるのか数えていた。四分の三を超えたあたりで毎回個数を忘れるので、何回も調べた。三十六個あった。お経の時間がつぶせたかな?と思ったが、まだまだ続いていた。お経が続く中、葬儀会社の人が黒い箱を持ってきた。「本日はまわし焼香でお願いします。」と葬祭会社の人が言っていた。「まわし焼香」ってなんだろう。と思ったが、黒い箱が列に沿ってジグザグと人から人へ渡されていたので「回し焼香」なのだと分かった。焼香は何度かやっているが、やはりやり方が分からないので、

前にいる大人たちを見た。「箱の右側から、ざらざらしたものを顔の前までもってくる。においを嗅いで、箱の左側の石にかける。」この動作を二回繰り返していた。ザラザラしたものを、顔の前まで持ってきている人もいた。

ついに黒い箱が回ってきた。黒い箱は二つの部屋に仕切られていて、右側には黒い線香の切れ端のようなものが、左側には赤くなるほど熱々になった石が置いてあった。見様見真似で、右側の線香を親指と人差し指でつまみ、鼻の前でにおいを嗅いだ。土と線香を混ぜて焼いたようなにおいだった。左の石にそれをかけると赤くなり、線香のにおいがした。いつもと違う不思議な感覚で、楽しかった。二回行って隣の人へ渡した。

焼香について辞書で調べてみた。黒い箱は「香炉」、線香の切れ端のようなものは「櫛（しきみ）」というそうだ。櫛とは「主に墓場などに植える常緑樹」の葉や皮を、粉末にしたお香で、「抹香」というものらしい。嗅ぐ機会はあるが、あの香りは癖になる。ただ、そも

そも焼香はにおいを嗅ぐものではなかった。額まで持ってきている人が正しかったのだ。

あの動作は、おしいた^{*5}だくというそうだ。また、おしいた^{*5}だく回数^{*6}は、宗派によって違うらしい。ミエおばあちゃんの宗派は「日蓮宗」というそうだ。日蓮宗では、数珠の珠の個数^{*6}がなんと一〇八個もあるそうだ。写真を見ると、とても長かった。数珠が二周しているのだ。切れたら大変だと思う。

父に、父ならばどうやるのか、気になって聞いてみた。「まず、粉みたいなのを一つまみつまんで、顔の前に持ち上げる。一回、顔の前に止めて、火がついているところに粉を落とす。そのあと、合掌する。」と言っていた。父の家の宗派は、「臨済宗妙心寺派」と分かった。臨済宗は一回おしいた^{*5}だくそうだ。ただ、同じ宗派でも、立場や場所によって違いがあるのだ。

お経が終わると、ご飯になった。仕出しもできる日本料理屋から届いていた。料理の皿を運ぶのを手伝い、ビールの王冠を気持ちよく開けて親戚のコップに注いでいた

ら、先に食べ始めていた従妹が五人分の唐揚げを全て食べようとしていたので、慌てて止めた。そのお陰で自分の唐揚げを一、二個手に入れることが出来た。酢ものが入った二つあったが、誰も食べておらず、はとこが一つ食べるというので、残りをもらった。色々なものおいしい料理屋なので、期待して食べたが、そんなにおいしい食べ物ではなかった。しかも大皿に乗るサイズだったので、食べるのに飽きた。この食事も儀式の一つで「通夜^{※1}ぶるまい」というそうだ。満腹になり、苦しくなったので、従兄と先に祖父母の家へ帰った。

翌日、朝からお通夜会館へ行った。ミエおばあちゃんは顔の前に衝立を立て、化粧をしていた。着物も変わっていた。旅支度というらしい。衝立を畳んだ後、懐に、「三途の川の渡賃」を入れていた。質がよさそうな紙に、六枚の小銭の絵が印刷されているようだった。

そのあと、台車に乗せて運ばれてきた、ピンク色の棺に収めた。ピンク色なんて初めて見た。ふたが湾曲していて、落ち着いたデザインだった。ミエおばあちゃんが

生前に使っていた物を中に入れ、ふたを閉めた。その時に祖父が、「釘は打たないんですか？」と聞いていた。葬祭会社の人が、「もう今は打たないですよ。」と言っていた。確かに、九年前の父方の祖父のお葬式の時は釘を打っていた気がする。しかし、釘を打つのはお通夜ではなく、葬祭ホールから出棺する直前だ。たぶん祖父は、ふたの端が湾曲したフタにどうやって釘を打つのか気になったのだと思う。九年前は、台車ではなくて、男性が集められて人力で運んでいた記憶がある。九年でこんなに変化するのにびっくりした。棺は、持ってきたときに使った台車でホールに運ばれていった。

ホールへ行くと、祭壇には花がたくさん飾られていた。テレビで見る、芸能人のお別れ会の時のように一面が花で覆われ、かわいい感じだった。

お葬式が始まった。広い葬祭ホールで、パイプ椅子に座った。最初に、「大正、昭和、平成、令和、四つの時代を駆け抜け、……」という言葉を読んだ。弔歌を大伯父さんが歌った。弔歌とは、「死をとむらう

歌。」^{*7}ということらしい。歌といっても、楽器などの伴奏はなく、声だけだった。そして、お経が始まった。やっぱりお経は眠くなる。昨晩はよく寝ていたはずで、まだ朝なのに。催眠効果でもあるのだろうか。こっくりこっくり、寝と起きを繰り返していた。ほぼ寝た頃、斎場内にシンバルの音が響いた。僕は飛び起きた。三人のお坊さんが、仏壇に置いてある鐘の大きい版・太鼓・シンバルで音楽を奏でていた。まず左にいるお坊さんが鐘を使いトライアングルのような音を鳴らし、次に真ん中に座っている和尚さんが太鼓を叩いた。最後に右手にいるお坊さんがシンバルを一回鳴らしたと思うと、手首をひねりながら胸の前あたりに持ってきて、バスケのチェストパスのように手を動かした。シンバルは高速回転した。お坊さんがシンバルを少し傾けるとチャリチャリといひ音がした。聞いて面白く、休憩時間のようで、面白かった。楽器のパートが終わった時には、もうないの？と思うほどだった。妹に感想を聞くと、「あそこだけ面白かった。」

と言った。

調べてみると、あの鐘は引磐^{※※の(注)}(いんきん)、シンバルは鏡祓(にようはち)というそうだ。また、あの楽器の儀式は日蓮宗や曹洞宗などで行われるそうだ。ほかの宗派のお葬式でもせひやって欲しい。楽器の演奏を聞きにきつと参列者が増えると思う。

焼香の時間になった。今度の焼香は二、三人ずつ席を立て、祭壇前の香炉まで歩いて行く方式だった。パイプ椅子から立つと、腰が楽になって気持ちよく、眠気も吹き飛んだ。香炉は祭壇の前にあり、行くときには手前にいる和尚さんに挨拶をした。先に焼香した人は遠くで見えなかったもので、昨日の記憶を頼りに焼香し、パイプ椅子に座った。

参列者全員の焼香が終わり、これでパイプ椅子から解放される！と思ったが、「続いて、告別式を行います。」と司会の人。気持ちは落胆した。そこからもお経は続いた。やっと告別式が終わると、みんなで棺に花をたくさん入れた。花祭壇でたくさんきれいな花があったから

だ。特に白い花がきれいだった。ユリだった気がする。

棺の中は花でいっぱいになった。この花を入れる事が、釘を打つ代わりになるのだ。ミエおばあちゃんの頭の横に、きれいで構図が決まっている写真があった。ミエおばあちゃんの夫の写真だった。すごく若くに亡くなったそうだった。写真も一緒に燃やすのは、天でも顔が分かるという意味らしい。しかし、その写真は原本で、燃やすとよく撮れている写真が無くなってしまふので、いとこ叔父がもらっていった。告別式が終わると、棺の運び出しが始まった。外には霊柩車が止まっていた。喪主の妻(大伯母さん)が遺影を持っていた。僕たちは、マイクロバスに乗って霊柩車を追いかけた。

山道を通り、火葬場に着いた。八幡浜市の火葬場「やすらぎ聖苑」は、株式会社日本環境工設計事務所が設計した建物で、敷地面積は約五〇一〇㎡、建築面積は約一八〇五㎡で、山の上の方にある。駐車スペースはとても広い。火葬炉は四基で、告別室が一室、収骨室が一室、待合室は三部屋ある。お金をかけて建てたようで、室内

の壁は結構値段が高そうな石でできていて、入ってすぐのホールの壁には見上げるほど大きな宇和海の絵画がかけられている。各部屋の名前のプレートは金属を立体的に切り出し、貼り付けていて、高級感が演出されている。

棺は、やすらぎ聖苑に到着したときから、「電動カート」に乗せられていた。このカートはハンドル一つで簡単に棺を動かすことができる。ハンドルは、列車のワンハンドルマスコンのようになっていて、下や上に引張ったり、左右に曲げて操作する。そうすると、棺の位置を上下したり、カーブすることができる。

隣の部屋に案内された。告別室という。ここの自動ドアは、出るつもりがないのに壁際に寄っただけで反応してしまふ。一度開いてしまふと、完全に開くまで動き続け、静かな空間に自動ドアの音が響いてしまふのである。しかも、部屋が狭いのに入がたくさんいるので、無意識に近づいてしまふ。告別式をここでもした。しかし、葬祭ホールで行った告別式とは違って、お経は唱えない。この告別式は最後に故人の顔を見られる機会だった

た。

告別式が終わり、自動ドアを通過して、隣の「炉前ホール」へ出る。炉前ホールから火葬炉の中に棺を入れた。火葬炉の中の台の上に、土で作られている様なプレートが置かれてあった。それには、金属の棒がUの字の逆向きに刺さっていて、棺を簡単におけるようになっていた。四基の炉があるが、二つ以上使っているのを見たことはない。今回は一番右だった。あらかじめ炉の扉が開いていた。

この扉は、炉前扉という。やすらぎ聖苑の炉前扉は、兵庫にある株式会社アルフィックス製の「アルミキャスト製デザイン扉」で、「奥行きをもたせる事で、重厚感を演出している」（ホームページを要約）。見た目は、高級ホテルのエレベーターの様だ。幅が狭く奥行きがある炉に入れるときに役立つのが、あの電動カートだ。簡単に棺を持ち上げられる機械はすごいと思う。炉の中はどうなっているのか気になって覗いてみた。

真ん中に腰ぐらゐの高さの台があり、そこに棺を載せ

る。台の周り、手前以外の三方はすべてピカピカの金属製の波板で囲まれていた。手前側は流石に見えなかった。扉の横には液晶ディスプレイがあり、「故〇〇様」と表示されている。やすらぎ聖苑の炉やシステムは株式会社宮本工業所製だ。宮本工業所のホームページの火葬炉納入実績例に書いてあった。

宮本工業所は、火葬炉に関して、日本国内で六六五件の納入実績（令和二年五月二十六日時点）。トップシェアらしい。ディスプレイも、コンピューター管理の恩恵かもしれない。

職員の人が、扉を閉めるので合掌をお願いします。と言った。職員の人が「合掌」と掛け声をしてみんなが合掌したのと同時に、炉前扉の横のボタンを押した。ちよつと扉が気になったので目を開けると、炉前扉が閉まる前に、別の扉が見えた。炉前扉の内側に炉自体の扉があるようで、耐火性と思われる厚い金属製だった。この扉があるので、棺は全面が金属製の板で囲まれたようだ。職員の人が、「おなおりくださいませ。」と言ったので、合

掌を終わった。今度は、扉の開閉スイッチの近くにある点火スイッチを押す。何回もは行っていないが、毎回、職員の人が、「私が押ししてもよろしいでしょうか」と言う。

このスイッチについて調べてみると、点火スイッチではないことがわかった。炉の向こう側にいる火葬技師に、準備が終わったことを知らせるためのボタンなのだそう。調べる前までは、機械が裏で動いているのかなと思っていた。だが実際は、火葬技師と呼ばれる人が操作しているようだ。

火葬には、二種類^{*13}の方式があるようだ。ロストル式と台車式で、日本では台車式が普及している。ロストル式は骨が残る受け皿の上に何本かの鉄の棒があり、その棒の上に棺を置いてバーナーで焼く。そのため、燃えたあとの骨が落ちるため、原型をとどめにくいらしい。一方、台車式は、耐熱性の台車に直接棺を載せるため、骨が原型をとどめやすいようだ。ロストル式で使われるバーナーは、火葬技師の人が操作する。台車式の方は、コンピュータで火葬技師の人を支援して、温度をコント

ロールしている炉もある。そうする事で、職人技だった火葬技師の負担を減らすことが出来たり、環境にも優しくなるのだ。やすらぎ聖苑では、煙突が見当たらない。これも利点だと思う。

調べてみると、衝撃の事実が分かった。

炉に入れられて、金属の板で囲まれたと思われた棺だが、実はあの空間は炉ではなかったのだ！^{*14}あれは前室といい、遺族に炉を見せないため・冷却するための空間なのだ。考えてみると、人を燃やす温度で加熱しているのにも関わらず、綺麗な金属の波板になることはないのだ。待合室に行こうとしたとき、急に誰かにつむじを触られた。棺から写真を持っていったいとこ叔父だった。親戚の子供のつむじが何個あるのかをよく確認するらしい。びっくりするのでやめてほしい。

待合室に入った。この部屋は広く、天井も高い。奥にはとても大きい窓があり、外には緑が広がっていた。横長の机が左右にそれぞれ一列で並べられていて、左側の机にはお弁当が積まれていた。一人一つが用意されてい

た。このお弁当もあの日本料理屋のらしい。開けてみると、まさかの二段重ねだった。スーパーの少し高めの弁当に入っている料理はほぼ入っていて、てんぷらもあつた。てんぷらが、飲食店で出てくるような「えび、なす、かぼちゃ、肉、白身魚」で驚いた。しかし、もっと驚いたのはお刺身が入っていたことだ。マグロのブロック、タイ、鮭だったと思う。仕出し弁当にお刺身が入るのは見たことがなかった。よく見ると、お刺身の下には保冷剤が入っていた。保冷剤のおかげか、お刺身は冷え冷えどころか凍っていた。鮮度があつても美味しかった。ほかのテーブルの大人たちのミエおばあちゃんの昔の話が聞こえてきて、母が言った。ミエさんは、「羊羹はよく噛んで食べなさいやー。」と言っていたらしい。僕は聞いたことがなかったので、ミエおばあちゃんもダジャレを言うんだなと思った。羊羹の話は多分これからも忘れないと思う。

放送が流れた。そろそろ火葬が終わるので待合室の片づけをしてくださいという話だった。弁当は食べきれな

かったので、持ち帰ることにした。ごみを片付け終わり、トイレに行った。そのときに、廊下の向こうで電動カーの走行音がなっていた。ロビーで少し待っていると、今度は収骨の準備ができたので収骨室に来てくださいということだった。収骨室の部屋の看板も銀色のかっこいい文字だった。ただ、真下にコピー用紙が貼り付けてあり、「収骨室」と大きな文字で書かれていた。印刷した文字だったが、一応明朝体だった。ゴシック体だったら雰囲気壊してしまうと思う。親になんで大きな文字で書いてあるのと聞くと、元々の字が小さすぎてお年寄りが読めなかったんじゃない？と言われた。そんな考えはなかった。

収骨をした。収骨室はトイレの廊下の先で、さっき聞こえていた音は、焼き終わって熱々な骨を電動カートで運んだ音だったようだ。高温で焼きたてのアツアツで触れないプレートでも、機械なら持ち上げることができる。収骨するときちょうどいい高さにするために、骨を焼いた後のプレートは台に置かれていた。これも電動カー

トのおかげだ。収骨に使う箸は長く、太くて木か竹でできていた。

先にも述べたとおり、焼いた後の骨は熱い。なので、収骨室は夏場の炎天下並みか、それ以上に暑い。だから二回の放送の間に少し時間があった。焼いて熱々の骨を冷ますためだ。汗がたっぷり出てきた。救いは、部屋の床や壁、骨を焼いた後のプレートを置く台が大理石で出ている事だった。そのおかげで、数℃下がっていたと思う。

骨は、足から頭に向かって壺に入れた。コンピュータ管理されているこの火葬場では収骨室にモニターがあり、今の火葬場内の状態が表示されていた。今この部屋が使われているという情報が出ていた。見ていて面白かった。

ミエおばあちゃんの骨壺に名前を書いた時、ミエエの漢字が、火葬許可証に書いた漢字と違っていたことに祖父が気がついた。線が一本多かったのだ。

^{*15}呪術廻戦というアニメの第二話で、主人公が一人で祖

父の収骨をする場面が出てきた。こちらも腰ぐらいの高さの台に、電動カートでプレートが置かれていた。主人公が、プレートの上の骨を箸を使って壺に入れていた。そこで違和感があった。なぜかというところ、プレートの上の骨を全て壺に収めていたのだ。普通に骨を入れていくと、全然入らないはずだ。しかも、火葬場の人も出てこなかった。また、収骨室が狭く、これじゃあ暑すぎてその場にいられないはずである。この場面は原作にはなく、アニメでしか出てこなかった。

だが仙台など^{*16}東日本では骨壺にすべての骨を入れるそう^{*17}だ。西日本と東日本では骨壺のサイズが異なり、一般的に東日本のほうが大きいそうだ。

収骨をし終わり、火葬場からマイクロバスに乗って、葬祭ホールへ帰った。お通夜会館の片づけを見に行くと、新聞紙で包まれた花束がたくさん作られていた。花祭壇だったので、たくさんのお花束ができたそうだ。持ち帰るのを手伝った。三個持ったが、結構重かった。祖父母の家に帰ると、叔母さんにお清め塩をかけてもらった。お

葬式はすごく疲れた。

東京に帰った後、祖母が母に

「ヤッパリ納骨となると、あの暗くて寒いところに入んなはると思うと可哀相です。」

とメッセージを送ってきた。母は、

「仏様に苦しむ体は要りません。」

と返していた。

この文章を書いている途中に、母が一枚の半紙を出してきた。墨で和歌が書いてあった。ミエおばあちゃんが書いた習字だそう。きれいな文字だった。もらった和紙にたまたま入った書き損じらしい。ミエおばあちゃんには趣味をたくさん持っていて、習字のほかにも色々なものを作っていたそう。

ミエおばあちゃん、享年百歳。

十二月十八日、ノブおばあちゃんが亡くなった。前日、母に「ノブおばあちゃんが危篤らしいから、学校に話し

てきて。」と言われた。その時は、「危篤」という漢字が思い浮かばなかった。既読の濁点がない言葉として覚えた。翌日、学校で担任の先生に言うときに、「危篤」という言葉を忘れていたが、この覚え方のおかげで言うことが出来た。

翌日は朝五時に起きた。朝ごはんを食べずに列車に乗って大きい駅へ行き、京浜急行バスに乗って羽田空港へ向かった。横浜ベイブリッジの上で、みんなは今学校なんだよなと思いつつ、少しだけ寝た。授業をさぼってる？のが不思議な感覚だった。でも、小二の時にもお葬式で行かなかった。初めてではなかった。

飛行機に乗った。初めて妹が横に大人がいない状態に乗った。僕は、中学生なのに飛行機のビニール風船をもらってしまった。飛行機を降りた後すぐに妹に風船をあげた。ちょっとだけ喜んでくれた。高速バスに乗って八幡浜駅へ向かった。

八幡浜駅は愛媛県八幡浜市にあり、祖父母の家の最寄り駅である。バスには誰も乗っていないくて、貸し切りだっ

た。母に、妹が酔うからなんか遊んであげてと言われたので、無理言うなどと思った。仕方なく、高速道路のわきに立ってる動物注意の看板で、次の動物はなくんか？という遊びをやったら、一つも看板がなくて、妹に「うそつき」と言われた。めっちゃめっちゃかわいかった。

祖父母の家の前を通り、ここで降ろして〜と思ってるうちに駅についた。お迎えが来てくれるかな〜と思いつつ、駅前をウロウロしていたら、ピンクの軽自動車が出来た。伯父さんが運転していた。「大体準備は終わったから、帰ってゆっくりしてな〜。」と言われた。少し走ると、祖父母の家についた。

祖父母の家はお店で、社長は伯父さんだ。お店の入り口の両側、僕の手がギリギリ届かない高さに見覚えのない、顔よりも大きな提灯が掛けてあった。「御霊灯」と書いてあった。葬儀業者が用意したのだと思う。店の入口は引き戸で、背が高い人でも余裕で通れる高さがある。屋根は一番高いところからこの高さまで傾斜している。提灯はこの屋根の端にかけてあった。引き戸の開かない

ほうのガラスの前には、お清め塩がたくさん並べられた台が置かれていた。

戸を開け店の中に入ると、いつもビールやソフトドリンクが入っているガラス窓の大型業務用冷蔵庫や、ワインを置いてある木製の棚に、紫と白の縦縞の幕が掛けてあった。鯨幕*1という。「鯨の体色が白と黒」に由来するらしい。また、「現在では、黒の代わりに白一色や水色を使っただものが用いられ、明るい雰囲気になっているものが多い*1」*1「そうだ。普段の飲み物がたくさんある風景とは全く違った。

「あがりかまち」と呼ばれる、板がついた玄関を上がり、リビングへと入った。本座敷に布団が敷いてあって、ノブおばあちゃんが寝ていた。ミエおばあちゃんと同じく北枕だった。布団に小学五年生ぐらいの身長で寝ていて、こんな身長が短かかったんだと驚いた。布団の前で正座をして合掌し、その後お通夜用の服に着替えた。ズボン*1は東京から持ってきたものだが、ワイシャツとカーディガンは夏から祖父母の家に置かせてもらっていた。近く

お葬式があることがなんとなく分かっていたからだ。祖父が机で何か書いていたので見に行くと、お葬式の金額についての事だった。少し覗くと、合計金額が百万円を超えていたので驚いた。

紫色の葬祭業者のふかふか座布団が四十枚ぐらいあった。柄は草の模様だった。椅子もあった。腰が悪い人が座るようだ。硬そうで、高さはお年寄り設計でとても低く、ふくらはぎの高さぐらいだった。

夕方五時に祖父母の家でお通夜が始まった。できればお通夜も葬祭ホールの横のお通夜会館でしたかったと大人たちが言っていた。曾祖父が亡くなった時に、家でお通夜をやるのを最後にしようと言っていたらしい。その時はお座敷、縁座敷、板間、十二畳もある部屋が人で埋め尽くされたそうで、喪主の負担が大きかったのではないかと思う。平成二十二(二〇一〇)年のデータ^{*18}では、葬儀をする場所の七十四・八%が葬儀専門の式場、自宅は八・八%しかない。だが昨日が友引で、会館が連泊で埋まっていたため、急遽家でやる事になった。

聞いたときに友引が分からなかったので、国語辞典^{*4}で調べてみると、「俗に、葬式(ソウシキ)をおこなうのはよくないとされる日。(友を引くことに通じるため)」と書かれていた。

今回は部屋の左側に座った。通夜や葬式で座る席は、親族などの関係で順番が決められる。なのでミエおばあちゃんのお葬式の時も右側に座っていたのだ。参列者は親族の他にも、祖父と祖母の友達、近所の人もいた。

お坊さんは一人。曹洞宗の保安寺の方で、豪華な金色の装飾が入った茶色の服を着ていた。お経を唱え始めた。上から吊り下げるタイプの渦巻き線香が、枕飾りの小机に置いてあった。その線香からは煙が多く出てきていて、離れていても薄い雲のように見えた。

この強烈な煙で、お坊さんののどはどんどん枯れ、途中咳込んだ。お経を唱えるのが止まらないように、少しずつ咳をしていた様で、聞いていても最初の方の咳には気づかなかった。お坊さんは線香を何度も台の上で動かしたが解決せず、最終的に畳の上に置いた。しかし、お

経は止まってしまった。

お坊さんは大きく二回咳き込み、息を整えた。母は咳をしているお坊さんのために、水を取りに行こうかと考えたそうだ。僕は、お坊さんは大丈夫なのかなと思ってた。やっとお経が再開した。

他人事だと思っていたが、巻き込まれた。線香から離れていた後ろ方の席の僕にも煙が来て、のどがとてもイガイガした。ミエおばあちゃんのお葬式の時、祖父が飴を勧めていたのを思い出した。その時は別に何事もなく、何で飴を持っているのだろうと思っていた。なぜ、祖父がいつも葬儀の時に飴を持っているのか、この間聞いてみた。お葬式やお通夜の線香・お香の煙を吸うと、のどがイガイガしてきて咳が出てしまい、周りの人に迷惑をかけるからだそうだ。また、知らない人でも咳をしている人がいれば、飴を一粒あげるらしい。

息を整えたお坊さんは、無事に読経を再開した。焼香が始まった。後ろの床の間に置かれていた、CDも再生できるスピーカーから、「まわし焼香とさせていただき

ます。」という司会の声が流れた。司会の人は葬祭業者の方だ。お経が始まる前まではBGMが流れていた。お経は焼香が回っている最中も続く。その時に妹に数珠を奪われかけたが取り返せた。丸くて粒粒した綺麗な輪っかに興味があつたのだろうか。

焼香が終わり、喪主の祖父が前でノブおばあちゃんの昔の話をし始めた。少し涙ぐんでいた。ノブおばあちゃんは若い頃、郵便局に勤めていたそうだ。初めて聞いた話だった。ノブおばあちゃんが嫁ぐ前の家で火事を体験したという話もしていた。結局家は全焼したそうだが、その時に家の防火扉を全て閉めたおかげで、周りの家が燃えるのを防げたそうだ。家が陶器屋で、緩衝材のわらがたくさんあつたらしく、火が大きくなると思ったらしい。火事の最中に火元に近づけるのは勇気があるなど思う。

お通夜の儀式が終わり、すぐに水を飲みに行った。線香の煙のせいだ。祖父母の家の井戸水はいつでも水道水に比べておいしく、冷たいが、その時はもっとおいしく

感じた。

僕がこれまで見た葬式の流れなら、翌日にお葬式をやってから火葬場に行くが、今回はお通夜会館のように友引で火葬場も埋まっていたようで、順序が違ふようだ。

翌朝、曾祖母を棺に収めた。掛け布団を取ると、身長が短く感じた理由がわかった。腰が悪かったため、腰を曲げて寝ていたのだ。敷布団には、体操のマットのように取っ手が六つぐらいついていた。数人で持つことで、簡単に棺に入れられるようになっていた。

ミエおばあちゃんの時と同じで、棺の中に物を入れた。その中に、通知表が入っていた。約八十年間、嫁いだときからずっと持っていたものだったそうだ。大人に、成績がいいはずだから、ちょっと見てご覧と言われて聞いてみると、一〇、一〇、一〇……十段階評価の十点。しかもその時代は相対評価だったので、クラストップということだ。賞罰欄には賞が二つもあった。燃やす前に写真撮っておいた。成績が一番いい一枚だけ、この世に取っておいた。今はもうないものを取っておける写真は素晴

らしいと思った。

着物や靴を入れ、花を入れた。この花は、サンリードフラワーから来たようだ。サンリードとは、葬祭ホールや結婚式場を持っている会社で、今回の葬儀もここに頼んだ。サンリードフラワーはサンリードの施設だ。花を入れるのは、供花というらしい。

出棺するときにお茶碗をビニール袋に入れて割った。袋に入れると、割れた破片が飛び散らない。なぜお茶碗を割るのかを調べた。※19 ※20まず、割るお茶碗は亡くなった人が生前使用していたものにする。なんかもったいなく感じる。お茶碗を割る理由の説として、霊をあの世に送り出す、断ち切るという意味合いが込められているというものがあった。ここに戻ってきててもあなたのご飯はありませんよ、もう向こうに行ってくださいということだそう。

棺は霊柩車に乗せられた。バスに乗り、霊柩車を追いかけた。火葬場につき、告別室に行った。ただ、親戚がまだ二組来ておらず、最後に顔を見たいと言うことで、

十五分位待った。立っている時に、少しバランスが崩れてしまい壁に手をついた。その時、爪が壁に当たり壁が削れてしまった。

ミエおばあちゃんの時のように告別式をして、火葬炉に入れて待合室に行った。普段なら、ちょうどお昼ときなので、量が多すぎて食べきれない、あの日本料理屋のお弁当を食べるが、朝なのでお弁当はなお茶だけ飲んだ。お茶を淹れてみたい気分だったので全員分のお茶を淹れていると、初めて見た親戚のおばさんに「偉いねー。」と言われた。この待合室は、一面が大きな窓になっていて、山側の庭園を見ることができ、敷地の広さはここにも現れている。一時間、お茶だけで過ごすのはかなり疲れた。普段お弁当をここで食べられるのは、時間的によかったのだと思った。親戚がジュシーというカバヤのお菓子をくれたので、嬉しかった。

収骨をした。ノブおばあちゃんの骨は、ミエおばあちゃんのお骨よりも残らなかった。また、骨が変色して緑色になっている部分があった。変色^{※2}の原因は、服用していた

薬との関係の説、棺と一緒に入れたものの関係の説があるそうだがまだ未解明らしい。

骨を収めるのを手伝ったあと、骨壺に名前を書こうとしている祖父たちのところへ行行った。ノブおばあちゃんの名前と亡くなった日付を書いていた。骨壺の蓋の裏にはあらかじめ月と日という字が書かれていた。ここに日付を書く。祖父たちが日付を書くときに、十二と十八だけを書くところを、追加で日もマッキーで書いてしまったので、十二月十八日日没になってしまった。祖父がこれじゃあ日没した意味やと言って、パッと、ポケットからハンカチを取り出し拭いたがマッキーは落ちなかった。すごく焦っているようだった。祖父が、「まあ誰も見ることはないから」とそのまま、骨壺の蓋を火葬場の職員の人に渡したところを見てしまった。バスで火葬場から家に帰った。

家で親戚とともにランチという名の昼ごはんを食べた。ご飯中、大人たちに、「このあとすぐもう一回ご飯出るから控えめにね」と言われた。その後、数十分お昼

休憩をして、歩いて葬儀場へ行った。祭壇のところにさっきの骨壺が置いてあり、周りには大量の花が飾られていた。大学の教授の名前が書かれているものもあった。つむじのおじさんがその大学で仕事をしている。花は祭壇をはみ出て、壁際にもおいてあった。これは花輪と言う。BGMはオルゴール調で、テレビ朝日で放送されていたドラマの主題歌だった。ノブおばあちゃんがよく見ていたらしい。しかも、祭壇の横で生演奏していたそうだ。上手で自然すぎて気づかなかった。

式が始まり、お坊さんがお経を唱え始めた。こちらにも、金色の装飾がある茶色の服だった。骨壺にお経を唱える光景を初めて見た。普段だったら棺に向かって唱えるからだ。お経の途中にとても眠くなった。危うく熟睡しかけたが、焼香のときに立ったおかげで眠気が吹き飛んだ。今回のお葬式は少し短かった気がした。

お葬式が終わった。式をした部屋の隣の壁を開けると、会食室が出てきた。壁ではなく、見上げるほどの高さの大きな仕切りだったのだ。昼ゴハンと言う名の昼ゴハン

Ⅱが出てきた。いつもなら火葬場で食べる弁当だった。一日四食！と言いたかったが、ブランチの誘惑に惹かれてサンドイッチを食べてしまっ、お腹いっぱいだったので、大人のビールを注ぐのを手伝ったあと、帰りまーすと言って、いとこと一緒にお弁当を持って祖父母の家に帰った。

その後、大人たちが大量に花束を持って帰ってきた。いつもだったら火葬の前に葬式をするので祭壇の花も棺に入れて燃やせるが、今回は火葬のあとに式だったので花が大量に出たそうだ。特に今回は供花が多かった上に、花をたくさん使う花祭壇だったので、更に多かったそう。十人ぐらいが両手で花束を四、五个抱える量があった。大人たちが帰ってきたはずなのに、すぐ居なくなっただと思ったら、近所に花束を配っていた。

ミエおばあちゃんのお葬式の時の花祭壇はわざわざ頼んだが、ノブおばあちゃんのお葬式の時には、プランとしてカタログに載っていたそうだ。そのカタログの写真は、ミエおばあちゃんのお葬式の時の写真だったそうだ。

祖父の友達はお母さんのお葬式を花祭壇にしたらしい。きれいな祭壇なのでいいプランだと思う。

葬儀の二日後、座敷にある小さな祭壇に置かれた骨壺の前にご飯を置きに行った。線香を二本立てるときに祖母が、「ノブさんに習って、節約してみようかねー」と言い、線香を半分で折った。一本の線香が二本になった。

「家が燃えたあと、線香が早く燃え尽きるように短くしたらしいよ。あと節約のためらしいよ。」と祖母。リズクが減るといふことらしい。仏壇の手前の木の所に直線で細い焦げ跡がついていたが、火の点いた線香が落ちたものとしか思えない。誰がやらかしたのでろうか。ノブおばあちゃんの最後の節約は、喪中はがきの節約だと大人が話していた。夏に亡くなった、ミエおばあちゃんの中で、もう出しているからだ。

祖母と棚を漁っていたら、使っていないテレビのリモコンが出てきた。その時祖母が、「ノブはおちゃん、テレビ好きだったからリモコンを棺に入れようって話してたのに忘れたー」と言っていた。確かに、僕の曾祖母

のイメージは、食事以外リビングの座椅子に座ってずっとテレビを見ている人だった。昔は、畑仕事もやっていたらしい。

ノブおばあちゃん、享年九十六歳

祖父にとって、お葬式とはどんな行事だと思うのか聞いてみた。「お葬式は、結婚式とかとは違って、一回しかない故人の最後のセレモニー。だから色んな人が来てくれる。例えば、ノブおばあちゃん同級生はもう亡くなってしまって、お葬式には来られなかったけど、その人の子供が来てくれたよ。だから盛大にお葬式をしてあげるのがいいと思う。花祭壇だったのは、ノブおばあちゃんが花好きだったからだよ。」と教えてくれた。また、「セレモニーの堅苦しい流れを変えて、弔電を少ししか読まないことでお葬式の時間を短くして、少しでも参列してくれた人に負担を掛けないようにした」そうだった。だからお葬式が短かった気がしたのだ。お葬式は長く、疲れる

ので、是非短くする風潮が広がって欲しい。

僕はお葬式を、故人にとっても、遺族にとっても大事な行事だと思う。なぜなら祖父の言う通り、「故人の最後のセレモニー」だからだ。火葬の後もお墓に行けば会えるという考え方もあるだろうが、やはり故人を見られる機会としては最後なのだ。だからお葬式は大切な行事だと思う。二人のお葬式は、お葬式なのにみんなが笑顔だった。不思議。二人とも長生きで幸せそうだったから、お葬式なのにみんなが笑顔だったのかもしれない。そして、これからお葬式に行くことがあれば、必ずポケットに飴を入れておこうと思う。

参考文献

*1 凶説葬儀 松本慈恵著

国書刊行会 二〇〇一年八月十二日

*2 さいたまそうぎ社連盟

岩槻葬儀社ブログ

<https://saitama-sougi.co.jp/article/detail.php/1443/466369>

*3 白い布を顔に乗せないといけないのですか？

お葬式のむすびす
<https://www.urban-funes.com/faq-list/anchi/>

*4 三省堂国語辞典 第七版

二〇一八年一月十日
発行者 株式会社 三省堂

*5 株式会社よりそう

obousan.minrev.jp ニ〇一ノ一〇九

*6 終活ねっと

<https://syukatsulabo.jp/funeral/article/8718>

- *7 広辞苑 第七版
岩波書店 二〇一八年一月十二日
- *8 いい葬儀
曹洞宗の葬儀の特徴―流れ・マナー
<https://www.e-sogi.com/guide/562/>
- *9 株式会社よりそう
よりそうのお葬式
<https://www.yoriso.com/sogi/soutoushuu/>
〔いんきん←いんきの脱字アリ〕
- *10 株式会社日本環境工学設計事務所
<http://jeec.co.jp/kasou/>
- *11 株式会社アルフィックス
http://www.alfix.biz/p_example.html#e2
- *12 宮本工業所
http://www.miyamoto-k.co.jp/product/env/furnace_f10.html
- *13 終活ねっと
火葬場の台車式火葬炉とは？
火葬場の種類や施設についてご紹介！
<https://syukatsujabo.jp/funeral/article/13740>
- *14 葬祭評論家の窓
火葬のプロセスとは？ その四
http://blog.livedoor.jp/funeral_critic/archives/1968235.html
- *15 呪術廻戦 芥見下々 集英社
アニメ・TBS系で放送中
週刊少年ジャンプ連載中
(二〇二〇年十一月時点)

*16 冠婚葬祭研究所

<https://ceremonylab.net/?mode=f5#K1>

心に残る家族葬

https://www.sougiyabiz/kiji_detail.php?oid=546

*17 有限会社エスケー

<https://www.sk9.jp/size.html>

*22 火葬後のご遺骨が緑色なのは どうして？

原因などを合わせて解説！

終活ねっと

*18 主婦の友新実用BOOKS決定版

葬儀・法要・相続マナーと手続きのすべて

<https://syukatsujabo.jp/funeral/article/13398>

主婦の友社 二〇一二年十月三日

*19 葬儀の時に茶碗を割るのはなぜなの？

株式会社 中本葬儀

<https://nakamoto.jp/>

*20 終活ねっと

<https://syukatsujabo.jp/funeral/article/9295>

*21 株式会社メルメクス



中学生の部

佳作

曾祖父の覚悟

—山村の漁村から—

上越教育大学附属中学校 三年

中尾 慶人

額に入ったモノクロ写真。大きな船の写真だ。祖父に、
 どうして船の写真があるのかを聞いてみると、曾祖父が
 船の乗組員であったことを知った。その船は、捕鯨船で
 あった。鯨を捕る仕事に興味がわき、曾祖父について少
 し調べてみた。

祖父の家は、青森県八戸市南郷にある。平成の大合併
 以前は南郷村と呼ばれていた。今は、陸上競技場や、道
 の駅、温水プール等が隣接し、図書館もある。休日には、
 家族連れでにぎわう、緑豊かなところだ。しかし、それ
 は平成に入ってからのことで、以前は貧しい農村であっ
 たという。

この貧しい農村で昭和二年、私の曾祖父正治は生まれ
 た。ちなみに、高祖父は豊吉といい、職業は山師であっ
 た。小さな製材所に勤めており、材木の買い付けや、伐
 採の仕事をしていたという。正治は、終戦直前、千葉県
 で大工の見習いをしていた。戦後、帰郷。結婚し、船に
 乗る仕事に就いたという。

そもそも、こんな山間の村なのに、なぜ海の仕事があっ
 たのか、不思議であった。祖父に聞くと、一枚のDVD
 とカセットテープを見せてくれた。それらにはフィルム
 撮影された無声映像と、捕鯨について取材をうけた正治
 の声が入っていた。

戦後、日本は危機的な食糧難であった。それを打開す

べく、捕鯨は積極的に行われるようになった。鯨をもとめ、南氷洋へ出向くのだ。赤道を越え、吠える南緯四〇度、絶叫する六〇度と呼ばれる場所で鯨を捕るのだ。

「豪州のフリーマントル港に緊急入港したのは忘れられない。嵐によって、船体に穴が開き、船内の明かりはすべて消えた。このまま海に沈むと思った。暗闇の中、無言でたばこを吸っていた。誰一人、寝ていない。たばこの煙だけをみていた。あの白い煙の動き…忘れられない。」

荒れ狂う極寒の海、氷で閉ざされた中で、命がけの仕事であつたに違いない。どんな気持ちだつたのか。煙の動きになぞらえて想像してみた。私は怖かつた。

「現金収入がなければ、生活できない。住むところもない。食することもできない。子どもをそれなりに育てることもできない。だから、捕鯨船へのつた。」

「捕鯨船にのるといって、快く送り出してくれる家なんてなかつた。出稼ぎに行くときは水盃を交わす船員もい

た。それでも、現金を得るために覚悟をして海へ仕事を求めた。」

正治がここまで現金収入にこだわるのには訳があつた。当時、正治達は知り合いの小屋を借り、馬と隣り合わせの生活をしていた。豊吉のわずかな収入では家や土地を購入することはとうてい叶わない。「正治はもつと上の学校に通いたかつたのかも」と、母が言っていた。頭脳明晰だつたらしい。だからこそ悔しい思いをしてきたのかもしれない。

捕鯨をしていたのは、大洋漁業という会社である。寒さに強く、辛抱強い東北出身の出稼ぎ労働者を積極的に雇っていた。村から出稼ぎに行き、会社の信用を得るとまた同じ村から人を雇う。そのうち、村には会社と村をつなぐ世話役なるものがあらわれ、どんどん村の青年たちは大洋漁業へ出稼ぎに行くのであつた。捕鯨の最盛期は昭和三〇年代である。無声映像はその時、横浜から出航する「第二日新丸」の船団を撮影していた。村長をはじめ、村人総出で出稼ぎを後押ししている。長い

航海だから、必要なものを皆で準備をする。そして盛大な見送りをするのだ。紙テープが何百本も船からたれさがり、ゆっくり船出していく様子をみる事ができた。その中に、世話役として青年たちを取り仕切る正治の姿があった。

「村の青年の中でも、割り切って金を得ると腹をくくる子は耐えられる。高校に進学かそれとも就職か。迷いながら船に乗る子は、赤道をすぎたあたりで海に飛び込むうとするから、よく観察していなければならぬ。

今（昭和三〇年代終わり）の子どもたちには選択の自由がある。だからかなあ、自分たちと比べると、覚悟が弱いんだ。」

私が中学を卒業するころ、家族を支えようとする正治のような強さを持つことができるだろうか、ふと思ってしまった。

「一度、漁に出ると小さな家を建てられる給料をもらえた。村には大きな家が何軒も建つようになり、村の財政

を支えたのも捕鯨の出稼ぎによるものだった。」

出稼ぎ労働者の賃金は、農協と郵便局で受け取ることができた。村の女性たちが笑顔で長蛇の列をなしている写真もあった。南郷村は豊かになり、正治も家と土地を手に入れ、三人の子ども達も、大学に進学させた。長男である私の祖父は、小学校教員になった。

しかし、時代は遠洋漁業の終わりを迎えようとしていた。二〇〇海里水域制限である。DVDには、昭和五一年NHK朝のニュース番組が記録されていた。正治が会社に、従業員の雇用継続を訴える場面があった。正治は捕鯨船ではない、ベーリング海でのマス漁へと移った。

私の母の記憶も書き添えよう。正治は孫である私の母に、船をおりるたびに好きそうなものを買って与えていたようだった。昭和五〇年代にしてはかなり贅沢な、ブランド、滑り台、子ども用自転車。どうして正治がこんなにもおもちやを買ってくれるのか、当時は不思議だったという。その後、正治は定年を迎える前に大洋漁業を退社。その後、村会議員となり村の発展に努めたようだ。

南郷カッコーの森公園の片隅に、鯨を捕らえる大砲のような鉦が設置されてある。そのわきには平成二年に建立された、遠洋漁業に関する歴史が刻まれている。「クジラの村」といわれた南郷。その中心を担った、たくましい海の男が私の曾祖父だ。遺影でしか会ったことがない曾祖父だったが、これを書くことでちゃんと生きていた人だったのだ、ということ強く感じた。高祖父がいて、曾祖父が海へでる。祖父が教員となり、母が生まれ、私がいる。私はこの話を通じて家族のつながりを感じた。家族のために捕鯨という過酷な職業に就いた曾祖父。息子や孫のために人生のほとんどを極寒の海で過ごした。彼の覚悟が、今の私の恵まれた生活の基盤となっている。遺影の曾祖父に自然と頭がさがってしまふ。

曾祖父が捕鯨の仕事に就いたのは、二十歳前後だった。五年後、私は二十歳を迎える。その時、どんな人間になるのか、ぼんやりと想像した。その瞬間、ぼんやりではだめだ、どんな人間になるべく、どのような努力をしなければならぬかを考えなければと、強く思い直した。

なぜなら、私は曾祖父の命がけの仕事を知ってしまったから。収入がなければ生活できないことも改めて教えられた。私もいずれば、自立しなければならぬ。経済的自立と精神的自立を曾祖父から学んだような気がした。学業に専念できる幸せと、それを活かすことで私は大人にならなければならぬ。それに私には目標がある。それは何か人の役に立つことだ。どの分野で何をしようかはまだ漠然としている。が、人に喜ばれる職業に就きたい。

温故知新。古きを知って、新しきを築いていこう。故人の想いが私の中に息づく。曾祖父は私の中で生きていく。五年後、遺影に胸を張って手を合わせたい。それまで模索し続けようと思う。

曾祖父の覚悟が私を突き動かす。

余談

祖父の家には、マッコウクジラの歯、その歯を削りペーシングを象ったもの、カニの甲羅で作った船の模型など

もある。母の記憶ではペンギンのはく製や、かわったマトリョーシカ、シロナガスクジラのひげも、あったらしい。ちょっとした博物館だ。その多くは、市や小学校に寄付したという。

八戸88ストーリーズ
nacchi.jp/progoams2/dashijin/88stories/52.
html

参考資料

捕鯨に生きた 平成九年初版

大洋漁業南氷洋捕鯨船団の記録を残す会編

成山堂書店

祖父 元沢正光所蔵

カセットテープ

本文の「」はカセットテープの音声を文字で起こしたものだ。

DVD 南郷市野沢在住 金沢秀さん編集

南郷アートプロジェクト

www.nangoartproject.co.jp/



佳作

「小笠原諸島を訪ねて」

お茶の水女子大学附属中学校 二年

秋篠宮 悠仁

学校五年生の夏休みに母と一緒に行った小笠原諸島への旅行です。私は初めて大型の船に乗り、二十四時間かけて小笠原諸島に向かいました。

この旅行で撮った写真や手元の本・資料を見ながら、小笠原諸島を訪ねたときのことを記してみたいと思います。

小笠原諸島は東京都ですが、約千キロメートル離れたところにある島です。したがって、この場所へ行くためには、東京の竹芝桟橋から小笠原諸島の父島の二見港まで貨客船の「おがさわら丸」に乗っていく必要があります。船は天候の影響を受けやすく、台風の進路によっては欠航になることもあります。

「おがさわら丸」に乗船し、自分の荷物を部屋に入れ、出航の様子を見るために急いで甲板に出ました。そこには、すでに大勢の人が出航の様子を見ようと集まっています。

船が離岸し南下していくと、東京湾内の高層ビルが立ち並び風景から、広い海の景色に変わりました。海は穏

今年、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で約二週間の夏休みとなりました。このようなことにより、中学校の休暇期間中に旅行に行くことが難しかったので、今まで出かけた場所を思い出しながら振り返ってみることにしました。数ある思い出の中で、特に印象に残っていることのひとつが、三年前、私が小

やかで、あまり揺れもなく、想像していた以上に快適でした。

船内には、個室から大部屋までの客室がたくさんあり、洋室も和室もありました。売店、レストラン、船内案内所などがあり、まるで小さなホテルのようでした。

昼食を終えた後、再び展望デッキに出て海を眺めると、漁船や貨物船などが何隻も見えました。昼間に強かった日差しは夕方になると和らぎ、十八時すぎに太陽が沈んでいく様子もゆっくりと望むことができました。夕食の後、もう一度デッキが上がって、満天の星空を観察しました。夏の大三角形、さそり座などを見ることができ、その晩は心地よい眠りにつきました。

夜が明け、日の出を見ようと五時前に起きました。窓の外を見ると、空が明るくなり始め、海原が広がっていました。急いでデッキに上がり、水平線から昇る朝日を眺めました。九時頃になると進行方向左側にアホウドリの移住地として知られる髯島の先端が見え始めました。目的地の小笠原諸島の父島に近づいていることがわか

り、とても嬉しい気持ちになりました。下船の準備のため荷造りをしているうちに、船は父島にどんどん近づき、あっという間に二見港に十一時ごろ到着しました。

ここからは、小笠原諸島で過ごした五日間の中で特に印象に残ったことや考えたことなどを紹介します。

まずは、島の自然についてです。小笠原の海の色は美しい青色をしており、「ボニンブルー」と表現されます。ボニンとは英語で小笠原諸島を表す *BONIN ISLANDS* になんだ言葉です。青い海をイメージすると沖繩を思いうかべる人が多いと思いますが、小笠原の海の色は沖繩とは違う深く濃い青色です。また、サンゴが生息しているところや、砂浜が広がっているところではエメラルドグリーンになっているところもあり、色の多様さも楽しむことができます。透明度は三十メートルを超え、沖繩と双璧をなす澄んだ海です。

その海中には、様々な生物がいます。代表的なものとしてウミガメをあげることができます。ウミガメは本土の近海にもいますが、特にアオウミガメは、小笠原諸島

の近海に数多く生息しています。小笠原諸島は日本で最大のアオウミガメの繁殖地です。ガイドの方が案内してくださった無人島の南島では、美しい風景が広がり、真っ白な扇池の砂浜で孵化したばかりの可愛いウミガメの赤ちゃんを見ることができました。大きさはハセンチメートルほどで、よちよち歩いていました。

また、小笠原海洋センターでは、水槽で飼育しているウミガメを観察して野菜を与え、ウミガメの生態や調査の展示パネルを見てまわりました。現在、ウミガメは国際自然保護連合のレッドリストで、絶滅危惧種に指定されていますが、このセンターでは、海洋生物の多様性の維持のために、様々な保全活動をしていることを知りました。そして、近くの浜辺で、センターの方と一緒に標識をつけた子ガメを放し、子ガメがゆっくりと進み、海に入っていく姿を見送りました。

次に、魚についてです。南島を後にして、船で海中公園に行きました。そこには、クマダイやクマノミ、ノコギリダイなど色々な種類の亜熱帯性の海水魚が泳いでい

ました。シュノーケルとマスク、そしてフィンをつけて海にもぐると魚が近寄ってきて、私はその数の多さに驚きました。また、水深数メートルのところに、キイロハギがエダサンゴの中を泳ぐ姿や、ウミガメがエダサンゴの上で休んだためにへこんだ跡も見ることができました。このように、少し小笠原の海に入っただけでも豊かな生態系にふれることができます。

小笠原の山はどうでしょうか。

小笠原諸島の気候は亜熱帯に属しているため、本州では見られない固有種を見ることが出来ます。植物では、タコノキ、ムニンヒメツバキなど、動物ではオガサワラオオコウモリ、ハハジマメグロなどです。しかし、近年の小笠原諸島では、固有の動物が外来種に食べられるという問題が起っています。グリーンアノールというイグアナの仲間やプラナリアの一種はオガサワラシジミなどの貴重な昆虫を食べてしまいます。そのため、小笠原では、島や森林に入る前に、在来生物を守ることを目的として、消毒液でプラナリアを落としたり靴についた種

子を除去したりしていません。「おがさわら丸」に乗船したときも下船するときにも靴底を洗浄する行動の大切さがよく理解できました。私たち観光客も、貴重な自然を守ることを心がける行動をとることはとても大事だと思います。

父島の南端には、千尋岩という岩があります。ガイドの方の案内で、ふもとから三時間以上かけて森の中を登って行くと視界が開け、ボニンブルーの海が広がり、南島も見えます。千尋岩はハートロックとも呼ばれ、海から見るとハートの形をした岩になっているので、その名がつけられたそうです。高さは二百メートル以上あり、遠くからでもはっきりと見ることができました。試しに地図で調べてみると、千尋岩は等高線が狭くなっている急であることがよくわかりました。このような岩の形は本州ではあまり見られないもののように思います。

小笠原諸島は、火山が隆起してできた島で、一度も大陸と陸続きになったことがない「海洋島」です。では、こうした島の生き物は、どのようにして島々にたどり着

いたのでしょうか。

あるものは海流に乗って運ばれ、あるものは風によって運ばれ、翼をもつものは自力で、あるいはそれに紛れて、「Three Wave (波)、Wind (風)、Wing (翼)」によって、海を越えて小笠原の島々にたどり着き、環境に適応したものが生き残ることができました。さらに、人が島に住むようになり、いろいろなものが持ち込まれました。小笠原諸島は、二〇一一年に世界自然遺産に登録され、多様な自然を見たいと関心を持つ人が増えました。絶滅の危機にある固有種も多い小笠原諸島の自然を守るために、地元の人々や、研究者、ボランティアなどの多くの人々の地道な努力が続けられていることを忘れないでおきたいです。

さて、小笠原の海岸では夕日が沈むときに運がよいと見ることができると有名な「グリーンフラッシュ」があります。グリーンフラッシュとは太陽が一瞬、緑色に見える現象です。日没時や日の出時の二秒から三秒だけ見られるとても貴重な光景です。そして、遭遇する確率は父

島が日本で最も高いそうです。父島でそれを見た瞬間は、水平線から緑の光が出てくるような感じがして、とても美しい光景でした。

次に小笠原の文化や歴史について紹介します。

まずは、小笠原に伝えられ、「東京都指定無形民俗文化財」に指定されている南洋踊りです。南洋踊り保存会の方々が、衣装をつけて、南洋群島の様々な島の歌と踊りを「レフト、ライト、レフト、ライト」とかけ声をかけながら、細長い木製タマナ（テリハボク）の打楽器であるカカが刻むリズムに合わせて、左右に足を出しながら披露してくださいました。この踊りは「ウラメ」、「夜明け前」、「ウワドロ」、「ギダイ」、「アフタイラン」という五つの曲からなっています。これは、大正末期から昭和初期に南洋諸島へ出かけたジョサイア・ゴンザレスによって伝えられたといわれています。私は保存会の方々に南洋踊りの踊り方を教えていただきました。初めて踊った時にはテンポがわからず、難しく感じましたが、だんだんとリズムや繰り返し部分がわかってくるにつ

れ、少しずつできるようになりました。

また、小笠原は、島の食材を使った料理と多様な食文化があります。父島に到着した日の昼食に島の郷土料理である島寿司をいただきました。

この他にも、島で作られたシカクマメや島オクラなどの新鮮な野菜や果物、海の幸を使ったおいしい料理をいただくことができました。他にウミガメ料理もあります。煮込み料理など、あらゆる部位を使って料理をしていると現地の方に聞きました。昔は小笠原諸島の人々にとって、ウミガメは貴重な食糧の一つであり、今日まで、小笠原諸島の郷土料理として食べられ、食文化として伝えられています。

今回の旅行では、小笠原諸島戦没者追悼之碑を訪れました。その他に行く先々で戦災の跡が見られ、この地での歴史について考える機会になりました。

「小笠原諸島戦没者追悼之碑」は、硫黄島を含めた小笠原諸島全体で亡くなった約二万四千名の戦没者の御霊を鎮める場所になっています。この碑は、沖ノ鳥島以外

の主要な島から集められた石やサンゴを使って建てられたそうです。父島に到着した日に、この碑の前で、戦争で亡くなった多くの人々のことを想いながらお花をお供えしました。

追悼之碑を後にして、「小笠原村ビジターセンター」を訪ねました。センターには、島で見られる自然や文化のほか、島の生い立ち、開拓や戦争の歴史についてのパネルや展示があり、様々なことを学ぶ機会になりました。

戦時中、父島には軍の要塞が築かれたということを聞きました。その後、実際に山を登ったときには軍の通信所や車両、発電機の一部を目にしました。また、海面上には座礁した貨物船「濱江丸」の一部が見えました。このようにして、ビジターセンターを見学し、島の中を歩き、案内してくださった方々のお話を聞きながら、戦争のことを学び、当時の島の人々の暮らしを考えることは大事なことだと思いました。

そして、滞在四日目には、日帰りで母島を訪れました。その旅をお伝えします。

朝の七時半に二見港を出航した船「ははじ丸」が南下すると、海上にはたくさんのカツオドリが飛び交うようになり、約二時間後には母島の沖港に到着しました。ここも父島と同様に、船を降りたときにはマットで靴の泥などを落としました。

初めて行ったのは、東京都道として最も南にある「都道最南端」の南崎です。ここでも、外来種を持ち込まないようするために、再度靴底の土などをよく落とすことから、タコノキやオガサワラビロウが茂る遊歩道を歩きました。固有種の小さなカタツムリをたくさん見ることができ、母島の生物相にも関心を持ちました。その後には果樹農家を訪ねて、マンゴーを摘み、生産用のパッションフルーツのさし木をするなどしました。引き続き案内してくださった畑では、島オクラやシカクマメなどの島野菜の栽培のお話を伺い、島の環境に適した野菜の大切さを知る機会になりました。

戦前からの暮らしを伝えるロース記念館では、写真や地図を始め、タコの葉細工や甘蔗圧搾機の模型などを見

ることができました。記念館を造るのに用いられたロー
ス石は、母島特産の加工しやすい石材で、記念館の近く
には、以前使われていた石切場がありました。

五時間半ほどの滞在はあっという間にすぎ、「ははじ
ま丸」が停泊する港に戻る時間になりました。子どもた
ちが打楽器の力を鳴らし、大鯨と小鯨ののぼり旗を掲
げる島の人たちが、父島に向かう私たちの船を見送って
くれました。そして最後には、訪ねた農家の方が海に飛
び込み、手を振って見送ってくださり、私たちは感謝の
気持ちをこめながら、いつまでも手をふり続けました。
母島を歩きながら、緑深い自然にふれ、人々の暮らしと
あたたかさを感じる思い出に残る時間を過ごすことがで
きました。

最後に、私が見た島の生活について触れてみたいと思
います。

父島に下船してすぐ、店に行ったとき、野菜が並べら
れているはずの棚に野菜がほとんどなくなっていること
に気がつきました。そのとき、おがさわら丸に乗船中、

船尾に積まれている緑色や白色の大きなコンテナに、島
で暮らす人々の生活を支える食料品などが入っていると
教えていただいたことを思い出しました。夕方、再度店
を訪ねたところ、棚には食料品が補充され、改めて竹芝
棧橋と二見港を結び定期運航便が島の人たちの生活を支
えていることを実感しました。

台風が多く通過する小笠原諸島は、台風情報が入ると、
家の雨戸をしっかりと締め、雨戸がない窓は板などで保
護し、学校も台風の状況によって休校となり、家の中で、
普段できない話などをして過ごすそうです。

台風が通過するときには、「おがさわら丸」も出航できな
いので食料品は島に届かず、生活が不便だと思えますが、
その一方で、台風がこないことも、自然に大きな影響を
与えるそうです。今年は、七月、八月と台風が小笠原諸
島に接近しなかったため、海水温の高い状態が続き、サ
ングが白化しているとの話を聞きました。また、適度な
強さの台風がくることによって、海水がかき回され、外
洋の海水と入れ替えが行われ、海水温が下がることは、

サンゴにとっていいことであると海を案内してください。の方が話してくださいました。

サンゴ礁は、海の中で最も多くの生き物がすむと言われるとともに、漁業が営まれ、人々に食糧を提供しています。また、サンゴ礁が育つ海は美しく、旅行者を引きつける観光資源でもあります。地球温暖化が進む中で、このように人々の生活とも関わりが深いサンゴを守っていくことは生き物と文化の多様性を維持していく上でも大切なことだと思います。

五日間の滞在を終え、最後に小笠原の港を出発する前、お世話になった島の方々にお礼とお別れの挨拶をしたところ、お花の首飾りであるレイをかけてくださいました。これは小笠原の風習で、訪れた人が帰るときによく行っているそうです。

いただいたきれいなレイとともに乗船した私は、急いで自分の部屋に荷物を下ろすと、デッキへと向かいました。埠頭を見ると、海や山を案内してくださった方々、宿泊先でおいしいお料理を作ってくださいった方などの姿

が見えました。

船が出航するとき、私たちは互いに手をふり、別れを惜しみました。

乗船前に島の人から、

「もし、また島に戻りたいと思ったときには、レイを海に投げてください。」

と言われていたので、また小笠原に来たいと思った私と母は、いただいたレイを首から外して海に投げました。

私たちが乗っている「おがさわら丸」の横を「見送り船」が途中まで来てくれたことも忘れられない思い出です。そして、次々と船人が飛び込む姿も感動的でした。島の人々のあたたかさが最後まで感じられ、私は父島や見送り船の姿が見えなくなっても、しばらくの間、小笠原の方を見続けていました。

小笠原諸島を訪れてからこの夏で三年が経ちました。

この間、島でお世話になった方々が幾度か私の家を訪ねてきてくださり、思い出話に花を咲かせたり南洋踊りを一緒に踊ったりしました。

世界でCOVID-19が拡大している今、島の人たちはどうしているのでしょうか。そう思った私は、夏休み中、小笠原でお世話になった方々と、久しぶりにオンラインでお話をすることにしました。画面の向こうから、このような時期でサービスマンは大変であるが、みんな元気で過ごしていると話していました。そして、普段は観光客を迎え、案内することに忙しかったのが、この春は観光客が減ったため、家族とゆっくりと過ごすことができたこと、また、この機会に新作の料理を考えたことなど、思い思いに話してくださいました。

報道によると、小笠原諸島の父島も母島もCOVID-19の感染者を受け入れられる医療体制が整っていないことから、「おがさわら丸」の乗船前の検査実施を決めたとのことです。八月十一日から、竹芝客船ターミナルから小笠原諸島に向かう定期船の全乗客を対象に、PCR検査を無料で行う対策をしているようです。ひとつはび島内に感染者が出てしまうと離島である小笠原は大変なことになってしまいます。そのようなことが起きないよう、

また乗船客と村人の健康を守るためにも大事な対応だと思いました。

今はまだCOVID-19により、日本、そして、世界は非常に厳しい状況にあります。いつ収束するのは予測が難しいですが、この感染症が収まったら、三年前のときには仕事で行けなかった父も一緒に、ぜひ小笠原諸島を再訪したいと思っています。

二〇二〇年八月下旬

〈参考文献〉

小笠原諸島返還50周年記念誌『原色 小笠原の魂—
The spirit of Ogasawara Islands』小笠原諸島返
還50周年記念事業実行委員会 二〇一八



中学生の部
選考委員特別賞
那須正幹賞

「〇〇〇〇」歌舞伎

〜平成中村座小倉城公演〜

北九州市立飛幡中学校 二年

大石 寛子

『歌舞伎との出会い』

私は二〇一九年十一月二十日、平成中村座小倉城公演・

夜の部「小笠原騒動」を観に行った。

元々は、母と祖母が観に行く予定だったが、母は仕事が入って行けなくなったので急遽私が行くことになった。

あんまり乗り気でなかった私は、「歌舞伎っておばさんとかおじさんが観に行くようなものやん。話の内容も難しそうやしなんて言いよるか分からんやろうし。もしかしたら寝てしまいかもしれん。しかも期末試験一日目やん」と思った。でも、「話題になつとるし、めったに歌舞伎なんて見る機会ないかな」とも思ったので「とりあえず観に行ってみるか」と軽い気持ちで行くことにした。後で聞くと母はチケットを発売された瞬間から電話やオンラインで買おうとしたが、結局、二階席しかとれなかったらしい。私は「発売された瞬間でも二階席しかとれんとか、どんだけ人気なん」と思った。そんなにすごいものとは思ってなかったので驚いた。

平成中村座に行ってみると予想以上の人でにぎわっていた。にぎわっていたのは二十軒長屋というものらしかった。二十軒長屋は、江戸の町のような雰囲気漂っている。江戸の町がどんなものは時代劇で少し見た程度であり知らないが、とにかく趣のある感じだった。私たちは来られなかった母のために平成中村座のグッズ

や平成中村座っぽいものをお土産として買ったが、あまりにもすごいにぎわいだったので、とりえず隈取の絵がプリントされている袋に入った豆を買った。もうちょっと平成中村座っぽいものが良かったが仕方ない。こんなにぎわいだったらちょっと買うのにもかなり並びそうだ。並ぶのはあまり得意ではないので、すんなり諦めた。

それからさっそくチケットをもぎってもらい、中に入った。すると、外よりもさらに、にぎわっていた。一人一人のスペースも狭く、ちょっと窮屈で押しつぶされそうなくらいだ。「こんなに平成中村座ってすごいのか!? こんなにお客さんいるの!? えっ建物小っちゃくなくかった? こんなに入る?」と、雰囲気は圧倒され、「平成中村座すごいな」と思った。このときは開演四十分ぐらい前で、まだまだ開演まで時間があるのに、「みんな、何して過ごすんだらう? そんなにすることあるん?」と思った。私たちも何をしようか困った。私たちはとりあえず「筋書」という本みたいなものを買ひ、売店周辺

にいたスタッフのお姉さんにおすすめされたイヤホンガイドを借りた。筋書は文字のとおり、お芝居の簡単な筋が書かれたパンフレットだ。イヤホンガイドは音楽プレーヤーにイヤホンがついたようなもので、公演時間にあわせてお芝居の役名や内容の解説が聞ける。初めて歌舞伎を観る人にとってはありがたいものである。平成中村座の中は土足厳禁なので、建物(小屋)に入る時に靴を脱がなければいけない。そのとき入り口で靴を入れるための袋を係のお姉さんが一人一人手渡ししてくれる。「家から自分で持ってきて下さい」ではなく用意してくれているというのは気が利いているなと思った。平成中村座の中は思っていたよりも広く、とても暖かかった。私は仮設劇場だから外よりも人がいる分だけ少し暖かいぐらいだろうと思ひ、厚着をした上にカイロも持って行っていた。しかし、きちんと暖房の設備があつて、少し暑いぐらいだった。少なくともカイロは絶対いらなかったと後悔した。

座席の数も結構あつた。私たちは二階席だったので階

段を上がって二階に行った。すると私の身長（百五十七センチ）よりもはるかに大きな提灯が天井から吊るされている。その提灯には大きな文字で「平成中村座」と書いてあった。こんなに大きな提灯が世の中にあるんだと驚いた。私たちの席の近くにはお大尽席というものがあつた。きらびやかで座席のスペースも一般席よりはるかに広く、見るからに良い席だったので「こういうところにはお金持ちのセレブとか歌舞伎が好きすぎてたまらない人が座るんだろうな」と思った。

開演時間になるまで筋書を読むことにした。でも、文字ばかりで、本をあまり読まない私はちよつと読む気になれなかった。全然知らない人が載っていたり、歴史などの難しそうなことが書いてあったりと、レベルが高い気がして三分も経たずに筋書を閉じた。正直どこを読んでも良いか分からなかった。公演時間十五分前ぐらいになつたのでトイレに行くことにした。早めに行かないと混んでしまうと思ったからだ。トイレに行くまでの廊下にはこんなものもあつた。「平成中村座様」や「中村勘九

郎様」などと書かれたずらりと並ぶ花束だ。その中には有名な芸能人や有名な会社からの花束もあり、またまた平成中村座のすごさを知つた。トイレは、普通入り口が目印として男性、女性と文字で書いてあったり、男性、女性のマークが書かれているが平成中村座は違う。殿、姫とかかかれています。私はお姫様になつた気分になり、少し嬉しくなつた。トイレは「仮設」という感じはなく、めちゃくちゃきれいでびっぴかびかだ。トイレから戻り、席についてしばらくすると幕が開いた。ちよつと言っている言葉は難しい感じがして聞いたことがないような話し方だつたけれど、なにかかっこよかつた。始まってすぐに、女の人が自分の親の首をしめながら登場した。ものすごく衝撃的だったが、その女の人はびっぴりするぐらい美しかった。「こんなに美しい人が世の中にいるんだ！」と感動した。イヤホンガイドをつけていたので、内容が分からなくなつた。登場人物の中に「大石」という名前の人がいたので「仲間だ」と、自分も有名な気分になつた。二幕が終わるまでの六十

五分は、あつという間だった。二幕までで、すでにものすごく興奮した。早替りや舞台から客席におりてくる演目などワクワクする仕掛けがたくさんあった。早替りは「えー！ びっくりするぐらい早い！ 本当は別の人なんじゃない？」と言いたくなるぐらいのスピードだ。お芝居の中で花道から客席に俳優さんが降りてきたときは、私だけでなく、観客全員が驚いた。私は一階のお客さんがうらやましかった。「いいな、いいなあ」と思った。幕間、サンドイッチを食べながら「早く三幕を観たい！」と待ちきれない気持ちだった。平成中村座は一回一回外に出なくてもご飯が食べられる。今まで行った劇場はたいてい飲食厳禁だった。客席で食事ができるのは、とてもありがたいことだ。そして幕間の終わりごろにはごみを回収してくれる。なんて優しいんだろう。

二十五分の幕間の後、やっと三幕が始まった。三幕は悲しい話だった。でも、家族愛や、その時代の生き方を感ずることができ、少し考えさせられる場面だった。三幕の五十分間もあつという間だった。四幕までの幕間に

再びトイレに行くとき長い列ができていた。でも、係のお姉さんの話がとってもおもしろい。お客さんたちに時間を長く感じさせないように「この鏡はここら辺まで近づくと美しく見える鏡です。」などと思わず笑って近寄ってしまふような話や、演目に関する話など、待っている時間も退屈にならない。混雑させないための工夫と客さばきには「お見事！」と言いたくなった。二十分の幕間の時間でお客さん全員をトイレに行かせ、四幕までに間に合わせるために、細心の注意を払い、係の人どうしが連携をしっかりとっているのだ。

四幕は大詰めにつながる大事な場面だ。特に水車小屋でのひやひやするようなアクロバティックな立廻りはすばらしかった。いや、すばらしかったでは表しきれないぐらいの感動だった。刀を使ったり、家の上に登ったり、本物の水が使われていたりと観ていてワクワクする工夫が盛りだくさんだった。四幕と大詰の間には小倉祇園太鼓の演奏があった。お祭り感や、ご当地感も味わうことができ、小倉城公演ならではの演出だとおそれいった。

そしてついに大詰。ごんごん演出が激しく、力強くなっている、序幕から四幕までと比べ「中村屋」「萬屋」という声や拍手が多くなった。大詰の終わり頃は、ずっと「○屋」という声や拍手が鳴り響いていた。幕が引かれても、私を含め、観客の拍手は鳴り止まなかった。私は歌舞伎を観に来る前、母に「中村屋」という声が何回かけられているか数えてくるという宿題を出されていた。幕が開いた時から指を折りながら頑張って数えていたのだが、大詰めはもう声がかげられすぎて、何が何だかわけが分からなくなってしまう。結局、たぶん二百回くらいはかかっただろうという報告をした。

『頭の中は歌舞伎まみれ』

小笠原騒動は、アクション満載の一大スペクタクル作品である。そのなかに笑いや涙の場面もあり、最初から最後までドキドキやワクワクがとめどなく続く。私にとって初めての歌舞伎だったので、あまり内容が難しくない小笠原騒動はとても観やすく、素直に「おもしろい

な」とか、「すごいな」と感じる演目だった。もし、歌舞伎十八番に入っているようなちよっと難しい演目を最初に観ていたなら、今、私は歌舞伎ファンになっていなかったかもしれない。私のように初めて歌舞伎を観に行く人や、私の世代の人にはびつたり演目だと思う。

私は公演が終わった後、出待ちをしたかったが、期末試験初日で次の日もテストがあったので、さすがにできなかった。家に帰る車の中でも、家に帰っても、私はこの感動をどうにかして皆に伝えたくて、ずうっと平成中村座のことについてしゃべっていた。結果、テスト勉強は観劇の興奮を引きずって集中してできず、順位は過去最下位だった。正直順位を見たときは「やばい、やらかしてしまった」と家に入れてもらえないのではないかと思っただけれど、歌舞伎を観に行ったことは全く後悔していない。平成中村座小倉城公演は過去最下位になるだけの価値、いや、それ以上の価値があったと思う。だからまあ順位のことについては「平成中村座を観に行ったから仕方ないよー。」と言ってごまかそうとしたが、怒

られたので素直に謝った。平成中村座は言い訳にならない
かったみたいだ。心の中では「お父さんとお母さんは観
に行っていないから怒るけど一緒に観に行ったら絶対怒
らないと思うのになあ」と考えていた。平成中村座を観
に行った次の日は、友達に「こんなにすごいお芝居を観
に行ったよ！」と熱く語った。当然のように試験のまっ
最中にいる友達は少し引ききみだったけれど、そんなこ
とはまったく気にせず、帰る時まで一日中自慢しまくっ
た。

私は小笠原騒動を観た中で、特に、中村七之助さんの
演技、美しさに感動した。とかうかびっこりした。七之
助さんは私が観た小笠原騒動で、二役を演じられていた。
一役目は、「お大の方」という役。このお大の方というの
は悪い人で、登場は親を殺しながらというインパクト抜
群な人である。最後は、悪事がばれてその場で自害する。
二役目は「おかの」という役。場面はおかのの家。貧困
にあえぐおかのと家族は、夫の良助が殺した「お早」の
亡霊に取り憑かれて苦しんでいる。最後はおかのも陰腹

を切る。このとおり、二つの役は全く対照的な役だった
が、ほんとうにまるで別人で、もうそこに「お大の方」
という人と「おかの」という人がそれぞれそこにいるよ
うだった。役の個性や気持ちなどがはつきり伝わって
くる。私はタイムスリップしてその場にいるようだった。
そして、どちらも言葉にできないくらい美しかった。

七之助さんはあるテレビ番組の取材で、「九州のお客
さんは魂で演じると応えてくれる。」とおっしゃってい
た。私は、魂で演じられておられるからこそ、こんなに
人を感動させるお芝居ができるんだとますます魅了され
た。

『もっと！ 平成中村座』

試験が終わって、私は平成中村座小倉城公演について
調べてみた。その中で「お練り」というものが小倉の街
であったということを知った。お練りとは役者さんや関
係者が行列して歩いたり、船で航行したりすることだ。
お練りは十月二十七日に魚町商店街からスタートしたそ

うだ。小倉でのお練りはとても盛り上がり多くの人が役者さんを一目見ようと集まったという。「知ってさえいれば私も行ったのになあ!」とほんとうに悔しくなった。

私はこんなにワクワクし、興奮し、拍手し、感動したお芝居は初めてだった。こんなにすばらしいお芝居はないと思った。「なんでもっとはやく歌舞伎を観なかつたんだろう!」もっとはやく歌舞伎に出会っていれば!」と思った。

小笠原騒動が小倉の話ということは、この話が江戸まで伝わり、今に至るまで歌舞伎の演目として残っているぐらいすごい騒動だったのだからかと思った。そこで、小笠原騒動のこと、歌舞伎のことをもっと知りたいと思い、調べて文章にまとめてみようと考えた。

まず、小倉城の城長さん(北野幸幸氏)にお話を聞きに行った。城長さんに「平成中村座小倉城公演についてインタビューさせていただきたいのですが。」と言うとすぐに「かくれ勘三郎」が貼ってあるところに連れて行ってくださった。「かくれ勘三郎」は、お亡くなりになった

中村勘三郎さんの目のイラストで、平成中村座のあちらこちらに十八個貼られた。平成中村座を立ち上げた勘三郎さんが、今でも公演を見守ってくださっていることを象徴している。しかし、私は、平成中村座の公演の時にはそのことを知らず、小屋では気付くことができなかつた。

私は「かくれ勘三郎」のことはなんとなく知っていたが、平成中村座の小屋とともに、もうなくなっていると思っていたので、すごく嬉しかった。見たときは「本物だあ!」と思った。この「かくれ勘三郎」は公演が終わっても記念として貼っているのだという。城長さんは「このかくれ勘三郎は勘九郎さんの奥様と息子さんが貼って下さったものなんですよ。」と教えて下さった。私は城長さんや平成中村座のスタッフの人が貼ったのだと思っていたので、ひとつ知らないことを知ることができた。城長さんはあまり詳しいことは知らないと始めにおっしゃっていたけれど、こんな話をして下さった。「昼の部のお祭りという演目のときに勘三郎さんの奥様と勘九

郎さんの奥様と息子さんが勤九郎さんに向かって小倉城の天守閣から手をふっておられた。そして、それが広まって次の日から天守閣に来るお客さんが増えた。」「小倉城の中で公演が行われたわけではなかったけれど、名前を小倉城公演にもらった。」「平成中村座小倉城公演の出演者の方々はとても仲が良く、公演が終わった後、皆さんで小倉のお店で食事をしていたみたいだ。」「平成中村座小倉城公演の誘致には何年もかかった。」と。私ほどの話も初めて聞いた話だったので、情報がゲットできて嬉しかった。特に「小倉城の中で公演が行われたわけではなかったけれど、名前を小倉城公演にしても良かった。」という話は疑問にも思っていなかったもので、聞いてみて「確かに小倉城の中っていうわけじゃないのに！」と新しい発見だった。「俳優さん達が小倉のお店で食事をしていた。」というのを聞いたときは、「公演があつてるときに小倉のお店に行けば会えたかもしれない！」とちょっと残念だった。城長さんは平成中村座小倉城公演の誘致のことについてはよく分からないの

で、市役所の企画調整局や博多座に聞いてみると分かると思うと教えて下さった。

後日もう一度、小倉城に行ってみた。あいにく城長さんはいらっしやらなかったが、事務の方にインタビューさせてもらえることになり、部屋に通してもらった。小倉城の取り組みとして平成中村座のときにしたことは、平成中村座小倉城公演のチケットを小倉城で見せると小倉城に一回、二割引で入れるようにしたこと、「かくれ勘三郎」のシールを貼ったことだと教えて下さった。小倉城に二割引で入れるという取り組みは小倉城の近くで行われた公演ならではものだし、小倉のことをもっと知ってもらおうきっかけになると思う。ちなみに「かくれ勘三郎」を貼ったのは博多座からの提案だという。その他にも、この公演は北九州市の側から公演依頼をしたのだと教えてもらった。どうして小倉で平成中村座の公演が実現したのかは、ずっと気になっていたことだったのでひとつ謎が解けた。

今度は図書館で小笠原騒動のことについて調べてみる

ことにした。

まず、資料がたくさん置いてありそうな北九州市立中央図書館に行った。図書館で小笠原騒動のことについて書いてあった本は五冊だった。一冊目は平成中村座小倉城公演のパンフレット。二冊目は「真説小笠原騒動」という本で中は台本みたいになっている。作者は劉寒吉。

登場人物は歌舞伎の小笠原騒動とは違うけれどなんとなく名前が似ている。表紙には○月○日録音、放送と書いてあったのでラジオではないかと想像する。登場人物は歌舞伎と比べるととても少なく、台本も短かった。字が昔の手書きのものだったので、文字からも歴史を感じる事ができる。はじめて本物の台本を見たので「なんかレアな感じだなあ」と嬉しくなった。三冊目は昭和五十一年明治座で上演された「四月陽春大歌舞伎」というパンフレットだった。これは市川猿翁さん(当時は、市川猿之助さん)が「小笠原騒動」を復活させたときのパンフレットだ。中には市川猿之助さんのインタビュコーナーがあり、そこには小笠原騒動が上演されたきっ

かけがこう書かれていた。「明治座は歌舞伎公演が少ない劇場だから珍しくて興味豊かな理屈抜きに楽しめる芝居でなければならぬ」それで最初は石川五右衛門の「楼門五三桐」を提案されたらしいが猿之助さんは「登場人物にややこしさがあり、歌舞伎を見慣れていない人にとって少し芝居が分かりにくくなってしまいつまらぬ」と思い反対したらしい。そこに、劇作家の中川芳三さんが「小笠原騒動」はどうかと薦め、「いつかやってもいいな」と思っていた猿之助さんは初演本を見たとき「これはいける」と役者の勤がひらめいたそうだった。こんな感じで小笠原騒動を上演することが決まったらしい。私は、「明治座だから珍しいものを」という条件があって、主演の役者さんが猿之助さんでよかったなあと思う。もし条件がなければ全然違う演目になっていたかもしれない、猿之助さんでなければ小笠原騒動を却下していたかもしれない。これは奇跡みたいだと思う。

四冊目は「陽春大歌舞伎」のスクラップブックだ。中には、ポスターや新聞の切り抜き、舞台写真(プロマイド)

があった。このスクラップブックには小笠原騒動のことは書かれていなかった。

五冊目は昭和五十一年四月に明治座で上演されたときの台本だ。四月なので三冊目と同じ陽春大歌舞伎ときのものだと思う。図書館の係のお姉さんが持ってきてくれたとき「これ辞書!?!」と思うくらい分厚くて重そうな本だった。「えー！ こんな分厚いのせーんぶ覚えるの? いや脳みそばんぱんになるよ。多すぎて脳みそはちぎれるんやないん！ やっぱり歌舞伎役者の方はすごすぎる。」と尊敬どころではないくらいすごいなと思った。自分だったら歌舞伎以外の勉強は大嫌いなので、もう分厚さと重さだけで即ギブアップするだろう。役者さんたちのおすごさを感じて、もっと歌舞伎が好きになった。

次にパンフレットなどを参考にしながら、小笠原騒動があったとき的小笠原藩の歴史について調べてみることにした。「小笠原騒動」とは、五代小笠原藩主小笠原忠苗の治世下、小倉藩小笠原家で起こった御家騒動だそうだった。江戸時代の史料には「小倉犬飼(犬甘)兵庫騒動」・「犬

甘兵庫か(が)叛逆之騒動」などと書かれているらしい。

小笠原騒動に出て来る犬神兵部は、犬甘兵庫知寛がモデルとなっていて、小笠原豊前守は、五代藩主小笠原忠苗がモデルである。犬甘兵庫は四代藩主小笠原忠総の時代に家老になり、五代藩主小笠原忠苗に大変重用された。

小笠原(笹原)隼人は小笠原帯刀がモデルになっている。私がとりこになった七之助さんがされていたお大の方は忠苗の側室である中川氏という人がモデルらしい。小笠原騒動の中ではお大の方と犬神兵部は自分たちの子どもを次の藩主にしてお家に乗っ取ろうとするのだが、史実では、子どもは二歳で亡くなっていて、世継ぎ争いは無かったと書いていた。

小笠原騒動の後も小笠原藩では騒動が続いていて、「白黒騒動」という騒動も起こったらしい。白黒騒動とは、六代小笠原藩主忠固が昇進の願望を抱いた。そこで、帯刀改め小笠原出雲(長植)が幕閣に働きかけ、昇進運動に莫大な金銀を費やした。そのため、他の藩士は反発しついに藩士、その家族、家来、奉公人を加えると約三

百六十人が隣国の筑前国福岡藩黒田家領黒崎宿(北九州市八幡西区)に立ち退くという大騒動になったのだ。なお、のちのち出雲をはじめ城に籠もった一派を「白方」、黒崎に退去した一派を「黒方」と呼んだことから「白黒騒動」と呼ばれるようになった。小笠原騒動から白黒騒動まで、小笠原藩ではお家騒動が続いていたようだ。

次に、中村勤九郎さんに手紙を出してみることにした。(もちろんダメでもともとだ。)中には、私の歌舞伎に対しての熱い気持ちと質問を書いた。きちんとした手紙を書くのは初めてなので、手紙の書き方の本や教科書を見て何回も書き直しながら手紙を書いた。清書をする時はとにかく全集中で頑張った。残念ながらお返事は来なかったが、手紙の書き方は分かったので、学校の試験に手紙の書き方が出たときは困らなかった。

次に、中村勤九郎さんや中村七之助さんが所属している株式会社ファンウッドに電話でインタビューしようとしたのだが、あいにくいつかけても担当の方は不在で、結局お話は聞けなかった。

次に、博多座に電話してみることにした。まず、小笠原騒動という演目は誰が決めたのかをたずねると「勤九郎さんにどんな演目をしたいか聞くと、地元だし小笠原騒動がいいんじゃないかという案が出た。」と教えてくださった。次に、どうして平成中村座小倉城公演のときは、通常の公演では五軒長屋なのが二十軒長屋になったのかをたずねると「初めての九州公演だから何か特別なことをしたいということで増やした。」ということだった。

だいたいこの公演にはどのくらいの人がたずさわっているのかという質問と、パンフレットや建物の中にある提灯の「中村座」の村の字の点が無いのはなぜかという質問には、今すぐには答えられないので、また電話をこちらからかけ直すと言ってくださった。丁寧に調べて下さるなんて、なんて優しいんだろうと思った。わりとすぐに電話がかかってきて「たずさわっている人数はだいたい三百人から四百人。細かい人も合わせると、もしかすると五百人くらいになるかもしれない。」とのお答えだった。五百人となると私の学校の全校生徒よりも多く、小

学校の五学年分くらいだ。とんでもない人数だ。平成中村座の公演をするたびにこれだけの人数が関わっているとは思ってもみなかった。提灯の文字のことは、勘亭流という書体だと教えて下さった。「京都南座などの劇場で入り口にある出演者の名前が書いてある看板の文字も勘亭流になっているので行ったときはぜひ見てみてください。」ともおっしゃった。勘亭流という書体は初めて聞いたので調べてみると、「歌舞伎の看板、番付などに用いられる文字の書体で、肉太で丸みがあり、『内へ入る』書体は縁起を祝ったものとされる。」とあった。勘亭流という名前の由来は「江戸時代の看板を描いた岡崎屋勘六という勘亭流を始めた人の号が勘亭だから」と書いてあった。インターネットで調べていくと無料で勘亭流を試すことができるアプリケーションやホームページもあり、試してみると、どんな文字も丸くてくねくねと変化する、なんかそれっぽくなっておもしろかった。

最後に最大の謎「なぜ小倉の地で公演を行ったのか」という謎を説明すべく、小倉城の城長さんに教えても

らった北九州市役所の企画調整局に電話した。電話したその場に平成中村座小倉城公演の担当の方はおられず、電話を折り返して下さった。「ついにキターー！」と思いきっさくなぜ小倉で公演が行われたのかを尋ねた。待ちに待ったその答えは……「平成二十八年から平成三十年三月まで小倉城リニューアル工事が行われた。工事が終了したのと、小倉城の天守閣再建六十周年を記念してイベントを実施するということになり『日本の伝統文化を小倉城から』というテーマで企画を考えていた。そして、和のテイストということで歌舞伎はどうかという案が出た。そこで、人気があり九州ではまだ公演が行われていない平成中村座を小倉でしたらどうかということになり、公演のお願いをすることになった。公演のお願いは何度も何度も東京に足を運んで製作会社や関係者の方に頭を下げてやっと実現することができた。」と教えて下さった。ちなみにどれくらい前から相談をしていたのかを聞くと小倉城のリニューアル工事が始まった平成二十八年くらいからだという。私は何度も何度も足を運び、

お願いされた姿に感動した。そして、それだけの努力に役者さんやスタッフの方も一致団結して舞台を作りあげた結果、私たち観客が感動する舞台を観ることができたのだ。舞台の裏にはこんなに血のにじむような努力があったんだと思った。まさか最大の謎の答えが、こんなに感動するものとは思わなかった。私はとにかく関係した方々に感謝したいし、北九州市を誇りに思う。そして、これからも北九州が活気づいてほしいと願う。

『歌舞伎街道まっしぐら』

私は今回この平成中村座小倉城公演を観に行き、インタビューしたことで、まだ疑問は残っているが、（締め切りが迫って全部の謎は解けなかった……。猛反省。）歌舞伎がどんどん好きになり、大好きになった。そして歌舞伎のことなら勉強できるし、こんなに長い文章だって書けることも分かった。インタビューをするまで、私にとって歌舞伎は、役者さんと演目のことにしか興味がなかった。でも、インタビューして新しい発見がたくさ

んあったことで、スタッフさんや裏方さんにも興味がわいた。役者さんだけでなく「スタッフさんや裏方さんはすごい」と気付いた。

私の夢は歌舞伎に関わる仕事をする事だ。

私はこれからも歌舞伎を観まくって歌舞伎のことをもっともーっと知って、人生歌舞伎街道まっしぐらで、もっともっと歌舞伎愛を深めていきたい。

《参考文献》

- ・「平成中村座小倉城公演筋書」
- ・（博多座 二〇一九年十一月）
- ・「南座 五月花形歌舞伎パンフレット」
- ・（南座 二〇〇九年五月）
- ・「眞説小笠原騒動」（劉寒吉 作 くるがね劇場）
- ・「小笠原諸礼忠孝 五幕十二場―小笠原騒動―」
- ・（昭和五十一年四月 明治座上演台本）
- ・「四月陽春大歌舞伎パンフレット」
- ・（南座 昭和五十一年四月）

- ・「市川染五郎と歌舞伎へ行こう！」
(市川染五郎 二〇〇〇年旬報社)
- ・「小倉藩の逆襲 豊前国歴史奇譚」
(小野剛史 二〇一九年 花乱社)



中学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

「ツナグ」

前橋市立第一中学校 二年

新池谷 悠

私は、小さい頃からずっと、動物、生き物が大好きだった。犬や猫はもちろん。女の子が嫌う虫までも私は好きだった。だから、虫を見ると、「キヤー」とか「キモイ」とか言ったり、さらには、泣き出したりする人は、理解できなかった。私の場合は、生き物を見つけると、それらを触ってみたいという好奇心が強く、怖いという気持ち

ちは、ほとんどないのだ。チョウのきれいな羽、犬や猫などのなめらかな毛、魚のぬるぬるしている触り心地が良さそうな体表、そういうものを見るだけではがまんできず、触ってみたいって仕方がなくなる。小さい時、兄が大切にしていたカブトムシを触り、ブローチのように服に付けたことがある。その時は兄に、「カブトムシの）足がとれちゃう。早くとれ」などと死ぬほど怒られたらしいが、私はカブトムシを触れたことしか頭になかったのだろう。その記憶は一つもない。私は、今でこそ少しましになったものの自分の「したい、やりたい」という気持ちが強すぎて、相手（生き物）の嫌がることをしてしまうことが多数ある。この時、カブトムシが嫌がっていったかどうかは分からないが、私は、自分の思いとは裏腹に生き物に嫌われることが多かった。しかし、同じ種の人間には、こういう気持ちを抱くことはない。不思議なものである。

生き物が好きという気持ちのおかげで、私は、色々な生き物を飼育してみたり、調べてみたり、研究者のよう

なすごい大人の人に出会うことができた。生き物について調べることは、何のためにしているのかなどは分からなかったり、楽しいか、と言われても楽しいとは言えない時もある。しかし、調べていると、生き物同士、またそれらを取り巻く様々な事象は、つながっていることに気づく。そういう『ツナグ』つながりを見つけると、私は、すっきりとした気持ちになることができる。「世の中のことは、全てつながっているんだね」とよく母は、私に言う。母は、私と違って、調べることが本当に好きなので、図書館でたくさんの本を借り、それを楽しそうにノートに写している。そういう母を見ると、私は、時々、妬ましく思ってしまう。しかし、そんな母がいたから、たくさんさんの生き物や人と会うことができたのだとも思う。母と私が出会ってきた生き物、それらとのつながりを忘れないように、日記のような感じで、『ツナグ』を書いていこうと思う。

私の初めての夢は、「犬になる」。猫や犬、ライオン、象などの有名な動物しか知らなかった四歳児の私は、犬

がその中で一番好きだった。祖父母は犬を飼っていたため、私はそこに帰るのがとても楽しみだった。しかし、祖父母の家は、私の家から遠い。帰ることができるのは、せいぜい年に二回程度。私の数少ない犬と触れ合えるチャンスだった。祖父母の家に帰ると、まず、「マッシュュー（祖父母の飼っていた犬の名前）」と呼ぶ。散歩も必ず同行した。私の場合、祖父母の家に帰る上で一番の楽しみは、犬に会うことだったように思う。祖父母のことは、大好きだけれど、それ以上にマッシュューのことが好きだったのだ。つまり、私は、人間よりも犬などの生き物の方が好きなのだ。しかし、残念ながら私の「犬になる」という夢が叶うことはない。その代わりかは分からないけれど、私は、生き物を飼いたいという思いを日に日に強めていった。

一番、飼いたいと思った生き物は、やはり、犬だった。父に何度も何度も犬を飼うように頼んだ。しかし、答えはいつも「NO」。我が家は、マンションのため、そもそもルールとして犬を飼うことはできない。ならば、一

軒家を建ててほしいと言ったが、「もったいない」とか「転勤族だから必要ない」と、返されて、それも却下された。

父は、私と違い、生き物が嫌いなのだ。『将来、絶対、犬を飼ってやる』と決意を固めながらも、とりあえず私は、犬を飼うことは諦めた。そして、マンションでも手軽に飼える虫を飼い始めた。

私が飼った虫は、蚕・カタツムリ・トカゲ・カニなどだ。トカゲは、私の大好きな生き物の一つだった。ある意味、虫のなかでは、一番好きかもしれない。トカゲと少し似ているオオサンショウウオという生き物も愛らしくて好きだったけれど、特別天然記念物のため、飼うことは、さすがにできない。そのため私は、何度もトカゲを捕えようと試みた。しかし、すばしっこいトカゲを捕えることは、できなかった。けれど、母が捕えてくれた。

うれしくて、たまらなかった。虫かごに大切にに入れて、家に持ち帰った。餌は、よく分からなかったため、とりあえず肉食らしいので、豚肉をあげてみた。しかし、トカゲは、それを食べてはくれなかった。そのためか、母

が私に「野生動物を飼うことはできないから、逃がしてあげよう」と言ってきた。せっかく捕えたかわいいトカゲを逃がしてしまうのは、嫌だったけれど、餌を食べないでいるトカゲは、このままだと死んでしまう。それは、もっと嫌だったため、私はトカゲを逃がした。トカゲを私が飼った期間は、わずか二日。将来、大人になって、トカゲについてのきちんとした知識を身に付けたら、またトカゲを飼ってみたいと思う。

たくさんの虫を飼ったが、その中で一番、調べて、観察した虫は、蚕だった。

蚕は、芋虫の中では、とてもかわいい方だったため、私は、この虫を見た瞬間、好きになった。

蚕とは、白色・俵形の繭を作るカイコガの幼虫だ。そして、蚕の繭から糸をつむいで、つくられるのが絹である。これは、「繊維の女王」と呼ばれ、着物などに使われる高価なものだ。

蚕を飼い始めて、私は、餌の大量消費に圧倒された。五頭ぐらいいしか飼っていなかった時は、良かったけれど、

繭の中でサナギに変態、蛾となり、それが交尾して卵を産む。このようにして、蚕を増やした私は、多い時には、三百頭以上の蚕を世話することになってしまった。蚕の桑（蚕の餌）を食べる音が、バリバリと私の狭い家中に響き渡った。

三百頭以上もの蚕を狭い空間で、過密飼育したため、伝染病のようなものに感染し、蚕は次々に死んでいくことがあった。蚕は、好きだったけれど、毎日毎日数十頭ずつ死んでいくため、死んだ蚕は、ゴミ箱に捨てるようになった。以前は、きちんと土の中に埋葬していたのに。

蚕をたくさん飼っていたのもあり、私は、蚕を調べることにした。まずは、蚕の一生の観察記録から始めた。そして、桑しか食べないと言われる蚕に、桑以外の大根やニンジン、キャベツなどの野菜をあげる実験。人工飼料（人間が人工的に作った蚕の餌）にタンポポやクローバーの粉末を混ぜたものを与え、普通に人工飼料だけで育てた蚕との繭の重さを比較する実験。

そんな私の蚕の実験の手伝いをしてくれたのが「日本

絹の里」の町田さんだった。町田さんは、小学校低学年だった私にも容赦がなくて大人でも難しいような蚕についての知識を話す。町田さんの話の半分以上はちんぷんかんぷんだったけれど、子供扱いせず、真剣に話してくれたことが私は、うれしかった。町田さんは、「謎を見つけたら調べる」という物事を学ぶ上で一番大切なことを教えてくれた人であったと思う。

しかし、このままずっと、蚕、という訳わけではなかった。私は、少し、飽きっぽい性格なのもあり、蚕のような「虫」ではない生き物を飼いたくなくなったのだ。また、蚕は好きだったけれど、初めの頃のように「かわいい」からではなく、「実験がおもしろい」から好き、というように好きの形が少し変わっていったように思う。しかし、実験をすると、死んでしまう蚕も多く、少しかわいそうだと思うとともに、実験は本当に大変だった。その頃、書いていた作文にも「わたしは、カイコのなぞを調べることに少しつかれてきました」と記してあった。そのような理由で、私は、蚕を飼うことはやめた。飼うことはやめた

けれど、今でも少し、蚕について調べてはいる。

現在、今年の休校を機に、町田さんと手紙でつながることができた。町田さんは、安価な人工飼料を作る研究をされていた。私が蚕を飼育するうえで、一番の問題点だったのは餌代だったため、この大切さを改めて感じた。

しかし、私の蚕を飼うのをやめようと思った一番の要因は、テレビで「スーパーのウズラの卵の二十分の一は、^{ひま}雑に孵る確率がある」との放送を見たからかもしれない。

蚕を含め虫は、自分になついているのかどうかも分からなく、すぐに死んでしまう。だから「初めて見た人を親だと思ふ」と言われている鳥を私は、飼いたくなくなった。

自分の後ろにかわいいウズラがついてくることを想像すると、もう飼いたくなくて飼いたくして仕方がなくなった。ウズラを飼うために私は、まず、父と母を説得することにしました。母は私と同じで生き物が好きなため、賛成してくれるとして、問題は、父だった。父は、生き物が嫌いだ。

大学時代、自分の部屋に入ってきた猫をベランダから落としたほどだ。(父によると、その猫は、女子学生にか

わいがられ、調子にのっていたらしい。)もてない男の嫉妬だろうか。だから、ウズラを飼うことも反対すると思ひ、心配だったのだ。しかし、父は意外にもあっさりこれに賛同した。もし、メスのウズラが孵化したら、ウズラの卵をただで食べられ、お得だと考えたようだった。私は、それを聞いて、少し落胆したが、ウズラを飼えるのなら、父の理由など、どうでも良かった。スーパーの卵によるウズラ孵化大作戦が始まった。

ウズラの卵二十個購入。できるだけ、新鮮な卵を買いたかったため、母にスーパーに、いつウズラの卵が入荷されるのかを聞くように頼んだ。母がスーパーに電話し、それを聞くと、「なぜ、ですか?」とその理由を聞かれた。

母は正直に「孵化させるため」と答える。返答は、「そのような卵は、取り扱っていません」ときわめて真面目なものだった。結局、入荷する日時は、教えてもらえず、スーパーに何度も行き、在庫が新しくなっているかを確認するという非常に面倒くさい方法になった。そして、新鮮だと思われる二十個のウズラの卵を購入して、『ウ

ズラ孵化大作戦』は始まった。

温め方は、電気毛布でポリエチレンの箱をくるみ、卵を温めるといふものだ。これで温度を一定に保つことができるらしい。温度は、三十六度、湿度は、五十パーセントくらいに保つ必要がある。また、卵の中の胚が殻の内側に貼り付くことを防止するため、転卵という作業もしなければならぬ。六時間に一回、卵を九十度回すのだ。しかし、六時間に一回だと、夜、起きて回すか、朝、早く起きて回す必要が生じてしまう。そのため、まだ小さかった私は、夜は遅く帰ってくる父に頼むことにした。そのうち、朝も起きるのが早い父が回すことになった。その時、私は、父に、卵にひび割れがあれば自分を起こすこと、鳴き声が聞こえたら決してふたを開けないこと、などという注意を与えた。父が孵化したウズラにとつての初めての人になったら悔しいからだ。しかし、私は、なかなか孵化しないウズラの卵の面倒を少しづつさばっていった。そのため、まず短気な父に怒られ、また、母にも注意され、『ウズラ孵化大作戦』は、失敗に終わった。

私がさばったせいなのか、ウズラは孵化しなかった。

今、改めて、その時のウズラ観察ノートを見てみると、温度・湿度は、てんでばらばら、ひどいものだった。孵化する訳がない。そして、私は、孵化しなかったのは逆に良かったと思つた。温度・湿度などが一定していないと、障害のあるウズラが生まれやすくなる。本当は、そういうウズラに生まれてくるべきものでなくても、私がさばったがために、そういったものが生まれてきまう。命は、もっと大切に扱わなければいけない、と感じた。

ウズラのことを考えていると、また、ウズラが飼いたくなってきた。今度は、孵卵器を使って、孵化させたいと思う。孵卵器は高価な品のため、簡単に買えないけれど、大人になったらお金を貯めて買いたい。それまでに、ウズラの生態について、さらに勉強しておきたい。

ウズラと少し似ている鳥、「雷鳥」。私は、小学校五年生の時、雷鳥が生息する立山連峰の一つ、雄山を訪れた。だが、山などに行っても、会いたいと願う動物に会える

ことは、ほとんどなかった。だから、雄山に雷鳥がいたとしても、どうせ、会うことはできないだろうと考えていた。しかし、会うことができた。そして、雷鳥は、他の野生動物とは違っていた。雷鳥は、人を恐れない。雄山で私が雷鳥を見つけた時、近付いても逃げる素振りを見せず、悠々と歩いていたのだ。今まで、こんな野生動物は、いなかったため、とても驚いた。かわいらしい顔をして歩いている雷鳥にこの時、私は、「またもや魅了された。『将来、雷鳥の研究者になるのもいいな』」と思った。

雷鳥やウズラを初め、私は、鳥が好きだ。今、興味がある鳥は、雷鳥、ウズラ、トキ、コウノトリ、フクロウだ。イワツバメ、アカシヨウビンは、好きになったことがある。

トキやコウノトリは、一度、日本から姿を消している。つまり、絶滅したということだ。絶滅した原因は、狩猟、田んぼの農薬使用、戦争による営業場所の森林伐採などが挙げられる。このように様々な要因があるのだが、な

かでも水田を取り巻く水環境の変化は、大きな要因の一つであると思った。水路や小川がコンクリート化され、河川との合流部に段差が生じることで、水生生物が棲める場所が減少。乾田に変えられたことや残留性のある農薬を使ったことによる水田の生物の減少。つまり、水田に、コウノトリやトキの餌となる水生生物が減ってしまったということである。そして、水田の減少や乾田化により、地下水が減少する、という問題が出ていることを本により、知った。これは、人間にとっても悪い影響と言える。水田と地下水は、つながっていたのだ。人間が改良した水田は、お米などの作物を育てる上では、育てやすい環境かもしれない。しかし、生き物にとっては、住みづらい環境になったのだと思う。

コウノトリの郷公園がある、兵庫県豊岡市では、たくさんのお米を同時に育むという目的で「コウノトリ育むお米」というものが作られている。

ここでは田んぼに、冬期や早期に水を張る、中干しの延期などのことが行われている。冬期湛水により水生

物が増える。中干しを延期させることで、オタマジャクシはカエルに、ヤゴはトンボになることができる。そして、これらは、害虫となる生き物を食べてくれるので、農薬をあまり使わずにお米を育てることが可能になる。だから、水田の水生生物が増加して、それを食べるコウノトリやトキなどの生き物も増えるのだと言う。結果として、コウノトリや生き物にあふれる水田になるのだ。水田に水を長く張ること。これは、地下水を育み、そして生き物を育むことにもつながっていた。

次に農薬について調べてみた。豊岡市では、農薬の使用が制限されているが、特に、ネオニコチノイド系農薬の使用が禁止されている。ネオニコチノイド系農薬は、殺虫剤として使用されているが、これがミツバチや赤トンボの減少の原因として疑われている。また、新聞に、この影響で、「宍道湖（島根県）のワカサギやウナギが減少した可能性がある（読売新聞朝刊）」と書かれていた。この農薬は、昆虫類を死滅させるのだが、ウナギ・ワカサギなどは、それを餌とするため、減少したと考えられ

た。農薬は、昆虫だけでなくコウノトリやトキ、ウナギ、ワカサギなどといった、これらを餌としていた生き物も同時に殺すのだと思った。人間の都合で、本当は在るべきだった生き物を殺すため、生き物の生態系を壊す原因になっていることが分かった。

コウノトリやトキは、水田の変化や農薬によって、絶滅した。しかし、それを元に戻すには莫大な費用がかかる。トキでは、野生の環境に順化させる施設の整備費用や飼育経費として年間一億円以上ものの費用がトキに使われている。農薬を使用しないで作物を育てると、生産量が減り、生産額も減るかもしれない。しかし、農薬を使用しないと、ウナギやワカサギといった生物が増え、違うところでの生産性向上につながるかもしれない。また、トキやコウノトリを復帰させるために使われたお金は、使わずに済んだかもしれない。農薬を使ったせいで、ある意味、たくさんのお金が使われたように感じる。

私は、人間と自然とがうまく共存し、安定した生態系を築くことが、一番お金を使わずに、住みやすい世界を

作ることになるように思った。『コウノトリが教えてくれた』という本に「もっと考えてほしいのは、今ある物質的に豊かな生活を失いたくないという気持ちを切りかえることです。そうすれば、豊かさがすべてというひとつの価値観から解放されます。もっとさまざまな価値があることに気づくはずですよ」と書いてあった。今の生活は、とても豊かだ。クーラー、冷蔵庫、テレビ。そして、何でも売っているショッピングモール。これ以上の豊かさは、もう望む必要はないように思う。空飛ぶ車とかりニアモーターカー等にも憧れる。しかし、私は、豊岡市などでコウノトリと暮らす生活の方が幸せな気がする。でも、こういう生活を送りたいかは、人それぞれだ。私は、自然と共に生きる生活をしたい。

今年も私は、長岡市トキと自然の学習館、「トキみくて」という資料館を訪れた。しかし、雷鳥などの野にいる生き物にあった時のような感情は、生まれてこなかった。トキは、一日中、ほとんど動かなかった。飼育員さんが餌をあげに来た時でさえ、時間が経たないと動かず、反

応が鈍かった。動物といえば、餌をガツガツ食べるイメージがあるが、トキは、すごい少食だった。受け付けの人によると、トキは、ケージで飼われているもののケージの上でタカなどの猛禽類が飛んでいると、一日中、餌を食べない日もあるらしい。私の思っていたトキのイメージと異なり、シヨックだった。トキは、意外にも神経質で扱いにくいことが分かった。もし、トキが人間だったら私は、トキとは気が合わないだろうな、と思った。また、そのトキがもっていた餌は、とても質の良いものだった。トキが病気になるように、牛や豚より寄生虫がいる恐れが低い馬の生肉。雪などが降って餌の供給が止まることがないように、九州や四国から取り寄せている生きたドジョウ。そして、トキ用のペレット。一日の食事代が私より高いことは間違いないさそうだ。そんな高価な餌を食べ残すトキは、ぜいたく、という訳ではないのだろうか、そう思わずには、いられなかった。この出来事で、トキへの私の好感度は、少し下がった。

コウノトリの餌代のことはよく分からないけれど、コ

ウノトリは一日五〇〇グラムも食べる大食漢なため、きつと餌代は高いだろう。トキやコウノトリを保護することは、お金がかかる。しかし、地域資源として活用する発想があることを知った。「見学する人々が訪れれば観光の、コウノトリがいることによって農作物に付加価値が生じれば農業の、まちづくりのシンボルになれば行政の、共生のために人々の生活が変われば文化の、生きた教材として考えれば教育の資源として、多様な方法で活用することができる。(兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科・ニュースレター)」このように考えれば、コウノトリに地域の経済を発展させる役割を担わせることができる。生き物を保護するには、お金が必要だ。そのため、保護などをする必要がないと思う人もいるだろう。しかし、このように地域資源とすれば、コウノトリがいることで経済が発展して、コウノトリは色々な場面で必要な存在となる。だから、私は、これはすばらしい考えだと思った。

昨年、訪れたコウノトリの郷公園から野外コウノトリ

二〇〇羽達成のポスターが今年の秋頃、届いた。このポスターは、私の今まで所有したどのポスターよりも大きいB1サイズだった。中学校生活や今、流行している新型コロナウイルスなどに疲れていた私は、このポスターから元気をもらった。もう一度、コウノトリに魅了された。そして、「次はどこへ行くか」とポスターに記載されている文字を見て、私のいる前橋市(群馬県)にコウノトリが来てほしいと思った。いつか、コウノトリが日本全国にいるのが当たり前の日が訪れることを願う。また、このポスターからコウノトリの郷公園と自分とのつながりを感じ、うれしく思った。

人間は、自分たちの都合で生き物を保護したり、殺したりしていると思ったことがある。それは、野生動物だけではなく、ペットや畜産動物もまた経済的理由で命が左右されることがあるのだ。

昨年、流行していた豚コレラ(豚熱に名称が変更されたため、今後は豚熱と記載する)について、私は、ずっと調べている。

豚熱は、感染を防ぐワクチンがあるのにも関わらず、経済的理由で豚へのワクチン接種が見合わせられた。そして、豚熱は広がり、豚熱が発生した養豚場の豚は、全て殺処分された。

豚熱により殺処分されたたくさん豚。養豚場の豚は、人間に食べられるために飼われている豚ではある。しかし、人間が生きていく上で必要な食料として殺すこと、ただただ殺処分するのでは、全く意味が違うと思った。しかも、豚熱に感染した豚は、人間が食べても全く影響がない。それなのに、なぜ、殺処分するのか、私は不思議に思った。感染防止のために殺しているのだと思うが、感染が見つかった市内のみで食べるなどのことさえもできないのだろうか。

私は、この謎に対する答えを宮崎大学の教授に答えてもらうことができた。その理由は、主に二つあった。一つは、食肉に供する豚は、健康であることが大前提、ということ。二つ目は、豚の体内にウイルスが残っている可能性があるということ。人間は、食べても豚熱にかか

ることはない。しかし、人間が残した食品残さ(残飯など)がエコフィード(食品残さを利用して製造された飼料)として、豚の餌になると、それを摂取した豚が豚熱にかかってしまう。豚熱は、食品ロスの問題ともつながっていたのだ。日本の食品ロスは、年間六百十二万トン。毎日、国民一人がおにぎり一個分(百三十二グラム)の食べ物を捨てているイメージだ。食品ロスを減らすことは、豚熱から豚を守ることもつながるようになって感じた。

これらの理由によって、豚熱の感染が見つかった養豚場の豚は、殺処分せざるを得ないことが分かった。

また、この私の質問に答えてくれた教授は、こんな言葉も添えてくれていた。「地球の明るい将来のために、世間の一般常識についても、常に疑問を持つ習慣を身につけ、その疑問・課題について、それを解決するには、どうしたらいいのか、建設的に推し進めて考察していただく。」私は、これを実行していきたいと思った。今の私の夢は、動物が好き、という理由で獣医師だ。獣医師は、生き物を助ける仕事というイメージがあるが、

生き物の命を奪う仕事もやっている。

豚熱の殺処分をしたのも獣医師だった。豚の殺処分にあたっては、一頭一頭、豚に注射をするらしい。病気の拡大を防ぐためとはいえ、発症もしていない豚を殺すのだ。その辛さは、私には、分からないし、想像の仕様が。そのため、私は、現地の人の話を聞こうと思いい、豚を殺処分された養豚場の阿部さんに手紙を出した。見ず知らずの私が出した突然の手紙にも関わらず、阿部さんは、自筆でとても丁寧な返事を下さった。それは、素直にうれしかった。

豚熱は、先程も述べたように、経済的理由で豚への接種が遅れた。その理由は、ワクチンを接種すると、輸出に悪影響が出るからだ。最終的にワクチン接種を決めたのは、輸出の利益よりも感染拡大による豚の殺処分への損害の方が大きいと国が判断したからだと思う。世の中は、お金で動いているようで、とても嫌な気持ちになった。

阿部さんは、豚を殺処分されたことに怒りはなかった

そうだ。しかし、輸出に悪影響が出るから、と豚にワクチンを接種しなかったことには、腹が立ったと書かれていた。輸出している豚は、約一万二千頭程度。殺処分された豚は、約十八万頭。なぜ、国は、ここまで豚を殺処分するまで、ワクチンを打たなかったのだろう。輸出以外にも理由があったのかもしれない。そこは分からないけれど、もう少し、豚の命を大切に扱ってほしかったように思う。

阿部さんは、豚を殺処分された時のことをこのように綴られていた。「自分の農場で発生した時は目の前が真っ暗です。これからどう生活していこうと考えました。すぐ殺処分が始まり、豚の悲鳴、横たわる豚の死体、涙が三日間出続けました。殺処分が終わるまで寝ることもままならず、精神的にもボロボロでした。一ヶ月くらいは、外に出るのが怖いですが殺処分後も豚舎にいて豚のいない豚舎を見て、ボーとなりました。毎日、埋却地で手を合わせる日々でした。」これを読み、私には、阿部さんの辛さも感情もよく分からないと思った。想像する、

ということもできるけれど、阿部さんの感情は、想像で分かるというものではない。家畜は、人間に食べられるために飼われているため、どちらにせよ殺されることは殺される。しかし阿部さんは、「私は豚の命を引き替えて生活をしていますが殺処分というのは、命を頂く、人間が生きていく食糧となってくれる全てを否定していると思います」と言っていた。その通りだと思った。そして私は、殺処分は、豚を苦しめただけではなく、阿部さんのような人も苦しめたのだと思った。結局は、ワクチンを豚に打つことになったが、この殺処分は、いったい何だったのだろうか。私は、よく分からなくなった。

私は、小さい頃の旅行先で会った牛に魅了され、将来は、産業動物獣医師になりたいと思っていた。大好きな牛などの生き物に囲まれた生活は、楽しいに違いないと思ったのだ。しかし、豚熱について調べていくうちに自分は、産業動物獣医師になりたくないと思っていることに気がついた。阿部さんに手紙を出した時、自分は産業動物獣医師になりたいと思っている、と書いたのもあり、

自分のこの感情に気付くのが嫌だった。何だか自分がうそをついているような、後ろめたい気持ちになったのだ。産業動物獣医師は、とても辛い仕事だ。近年、人手が足りないのもそのせいだろう。豚の殺処分などをやりたい人は、一人もいないと思う。私だって、やりたくない。出来れば、そんなことに、そのような世界に入りたくないと思ってしまう。そういう辛い、怖い、苦しいことに目を背け、思考を停止したくなる。豚が殺されるのは、かわいそうだと思う。しかし、自分が豚を殺す獣医師の立場、阿部さんの立場にはなりたくない。今、私は、産業動物獣医師になりたくないのだ。そして、この感情に気付いてから、自分の今までの感情が本当なのか、うそなのかも分からなくなった。自分が今、何を思っているのがよく分からなくなってしまった。

豚熱は、今まで私が調べてきたものの中で、一番調べたものだと思う。調べた分、この感情を抱いてから、今まで自分が行ってきたことが無駄のようにも思え、イライラした。また、豚熱は、こういう辛いもののため、調

べていて楽しいとか、もっと調べたいとかいう感情は、わいてこない。だから私は、一旦、豚熱などの畜産関連のことについて調べるのは、やめようと思う。豚熱などのそういう辛いことから逃げているのかもしれない。逃げているのだと思うけれど、今、私は、少し苦しい。「閉じた世界は必ず腐っていく『医学のたまご』』と言う。だから、豚熱という存在を自分から消し去って、耳を塞ぐことだけはしない。言い訳がましいけれど、豚熱を調べることが中断するということだ。

豚熱について調べていて、もう一つ、思ったことがある。自分は、無力で、口先だけの理論を言うことだけしかできない、ということだ。これも豚熱を調べるのを中断しようと思った一つの要因だ。今は、豚熱について調べて、何かを言うことよりも、もっと学校の勉強をすることの方が大切ないように感じた。私は、もっと勉強していきたいと思う。

豚の病気は、豚熱以外にアフリカ豚熱という病気があ
る。アフリカ豚熱は、豚熱と同じで、人に感染すること

はない。しかし、豚熱と異なり、ワクチンがなく、致死率は極めて高い。この病気は、今、流行している新型コロナウイルスと似ているような気がした。また、このアフリカ豚熱が養豚場で発生した場合、その養豚場の豚が殺処分されるだけでなく、発生した地域の周辺で飼育されている未感染の豚を予防的に殺処分することが可能になる。だから、アフリカ豚熱が流行したら、豚熱で殺処分されたものよりも、もっとたくさんの豚が殺処分される可能性があるのだ。だから私は、アフリカ豚熱を流行させないことが大切だと思う。そのためには、豚熱、アフリカ豚熱について多くの人に知ってもらう必要がある。外国の豚肉や加工品などの国内への持ち込み禁止を広く呼びかけること。外国の豚肉や加工品には、アフリカ豚熱ウイルスが拡散している可能性がある。それを人間が残し、それらがエコフィードとして、豚の餌にまわると、それを食べた豚がアフリカ豚熱になってしまう。もし、豚がアフリカ豚熱になったところで自分には害はないかもしれない。しかし、それにより多くの人が困る、

ということを、人々に伝えていくべきだと思う。みんな、そのことを知らないから、豚肉を捨てるなどのことができるのだと思う。

豚熱、アフリカ豚熱、そして新型コロナウイルス。これらから身を守るためには、たくさんの人が協力する必要がある。私には、まだ、あまりできることはないけれど、豚熱について、少人数でもいいから、伝えていきたいとは思っている。これが今の私にできる唯一のことだ。

最後に、私の最愛なる未来（うさぎ）。未来は、私のペットだ。虫を除くと、私が初めて飼ったペットということになる。ここからは、未来に対する今の私の想いを伝えていきたい。

未来のことは、本当に大好きだ。しかし、私の、未来のことが好きすぎて、動物と人間とのへだたりを踏み越えてしまうことがあると思う。

今でもそうなのだが、特に小さい頃の私は、動物を手なずけたいと思っていた。アニメなどで、人間の肩に動物が乗っている姿に憧れ、自分も動物と同じようにして

ほしいと願った。動物といつも一緒に、相思相愛の仲間になったのだ。しかし、未来を飼って、それは、単なる自分の空想にすぎないことが分かった。未来は、抱かれることを嫌がり、抱こうとすると、私を蹴って、逃げた。どんなに愛情を注いでも、未来は、私の膝に自分から乗ってはくれなかった。自分が想像していたペットとは違っていた。だから、未来を好きになれず、嫌いだと思う時もあった。しかし、今、未来のことが好きといえるのは、未来と生活した日々の時間と共に、私のペットに対する考え方が変わったからだと思う。また、未来も抱かれることは嫌いなままではあるが、遊んでほしい時は、鼻先で私の体をツンツンついてくれる。私は、もうそれだけで、未来に心を奪われてしまう。一緒に生活していくことで、うさぎと人間という異種の生き物ではあるが、お互いに信頼感が生まれたのだったら、うれしい。

私の一番好きな本『獣の奏者』には、獣と人間のへだたりや思考の違いが書かれている。この本の存在も未来

への理解を深めたきつかけの一つであると思う。

この本の主人公エリンは、獣(けもの)(動物)の在り方を知るために〈獣ノ医師師〉(獣医師のようなもの)を目指し、野に生まれた獣が野に在るように生きられることを願う。エリンは、傷ついた王獣(おうじゅう)(動物)リランを育てるなかで、竖琴の音を通して、王獣と語ることができるようになる。しかし、獣は獣。語れたからと言って、王獣が人間と同じ訳ではない。エリンは、王獣に人の考え方を投影し、獣の心を分かたつつもりになり、興奮状態の王獣に手を食いちぎられる。私も、未来によく嗜まれる。それは、未来が自分と同じ思考を持っていると考えるせいであることに気づかされた。エリンは獣のことを「どんなに馴れていても、どんなに好きでも、反射的に食べさせてしまえる。——王獣は、そういう生き物なのよ」と言っている。動物と人間には、どうしても理解し合えない壁があるのだ。

私は、一度、未来に手や足ではなく、鼻を噛まれたことがある。その頃は、未来と私は、お互いに馴れていて、

未来も私になついていたと思う。だから、シヨックだったし、驚いた。なぜ噛まれたのか。私は、考えた。噛まれた時、私は、未来を両足の太ももではさんで、未来の頭に鼻をこすりつけていた。これは、未来にしてみたら、猛禽類のタカなどに爪ではさまれ、捕まっているような状態だったのではないだろうか。うさぎは、草食動物。そのため、たくさんの敵がいる。だから、未来には、敵からどう逃げて生活するか、という本能が備わっているのだと思う。

未来を初め、動物に噛まれた時、悪いのは噛んだ動物ではない。噛ませた人間だと思う。動物の根底にあるのは「恐怖」や「不信」という感情、そのことを理解し、動物と付き合っていかなければならないことを本で学んだ。しかし、そのことが分かった時、私は虚しさを覚えた。動物と距離を保って、つきあわなければならぬ、ということなのだ。とても、さびしい気持ちになった。

しかし、どんな時もエリンは動物と語ることをやめない。そして、死ぬ直前に自分の息子ジェシにこんな言葉

を残している。

「アルの言葉を聞いて。わからない言葉を、わかってもらう。その気持ちだが、きっと、道を聞くから。」

私は、この言葉が好きだ。そして、これらは、私が動物と関わっていく上で、大切にしたい姿勢を示している。

どうしたら、未来の言葉を聞くことができるのか。当たり前前だけれど、未来（うさぎ）は、言葉を発しない。

未来がどういう時に何を感じて、何を望んでいるかを未来の口から聞くことはできない。そのため、私は、未来の行動から未来の言葉を聞くことにした。未来の行動観察を始めた。

新型コロナウイルスによる休校のおかげで、未来と過ごす時間が増えた。部活や勉強、それだけで毎日が終わってしまう多忙な中学校生活。時間に追われる生活からの解放だった。

休校中、突然、マンシヨンの塗装工事による騒音が家中に響き渡った。不意の音に弱いと言われているうさぎにとって、私でも苦痛なこの音に未来は、とてもストレ

スを感じたことだろう。また、この時、未来は後ろ足を「ダンダン」とふみ鳴らしていた。これは、不満がある時や威嚇する時に行われる行動だ。やはり未来は、この音に不満を感じていたのだと思う。しかし、私は、未来にどうしてやることもできず「（体の）調子を悪くしないでね」と願うことしかできなかった。この私の思いは、残念ながら届かず、未来は下痢を始めた。また、休校中で、何もすることがなく暇だった兄が、おやつをあげすぎたことも原因の一つだと私は、思っている。私が未来の身体を心配して、何度も「そんなに（おやつを）あげないで」と言ってもあげ続けていた。迷惑な人なのである。

未来は下痢をした時も、後ろ足を「ダンダン」とふみ鳴らす。下痢は、水っぱいウンチで臭いもあるうえに、踏むと足が汚れるため嫌なのだろうか。この「ダンダン」という音は、「ウンチを早く片づけろ」という私達への未来の言葉であるように思う。このウンチをした時、未来は、後ろ足をふみ鳴らした後、小屋のぶら下げであるメッ

シュトネルの中に入る。これは、下痢が自分の体につかないようにしているのだと思う。未来は、とても賢いうさぎなのだ。未来がメッシュトネルに乗っている間に、私達が未来の下痢を片づける。そうすると、未来は、メッシュトネルから降りて、足を伸ばしてリラックスしだす。未来のそういう様子を見ると、「ありがとう」と言ってくれているようで、幸せな気持ちになる。

また、私は、未来のそういうしぐさや姿を見ると、「こんなかわいい姿が見れることは、今しかない」と思い、写真を撮りまくってしまう。そのため、母のスマホの半分以上は、私の撮った未来の写真が占めている。家族は、そんな私に「そんなに撮って、どうするの」とか「そういうのを親バカって言うんだよ」とか言ってくるけれど、私は、これからも未来の写真を撮り続けようと思う。

なかなか、下痢が治らない未来が心配になった私は、ケチな父に内緒で、動物病院に行くことにした。動物病院には、未来を連れて行く必要はなく、下痢した便だけを持っていけばよかった。便を検査すると、悪い菌はな

いようだが、腸内の乳酸菌が足りないとのことだった。

そのため、それが含まれた錠剤が処方された。錠剤を未来は、おやつのように「カリカリ、カリカリ」とうれしそうに食べており、私は、安心した。そして、次第に未来の下痢は改善したのだが、あれから半年ぐらい経った今、未来は、また下痢をしている。未来は、もうすぐ四歳、人間で言うところの中年だ。年齢を重ねると、腸内環境が乱れやすいらしく、気をつけてあげようと思う。また、未来の便にいる菌についても調べてみたいと思っている。

未来が怒る原因となるのは、音と臭いだ。未来は、人の喧嘩が嫌いだ。喧嘩をすると、足をダンダンとふみ鳴らすのはいつものことだ。しかし、トイレに反対に座って、尿をもらしているのも怒りの表れではないかと、私は最近、思っている。そんな未来を見てみると、みんな自然と喧嘩をやめる。未来は、我が家に平和をもたらしでもいる。

未来が嫌いな臭いは、焼けた肉の臭い。だから、焼き肉をすると、必ず機嫌を悪くする。自分も焼かれるよう

に思い、恐怖心を抱くのだろうか。そこは、よく分からないけれど、焼き肉をする時は、未来は、肉の臭いが届かない兄の部屋に、移動させるようにした。

そして、最近、未来は、自分が皆の視線を集めていたところがあるように感じる。全員でご飯を食べたり、テレビを見て談笑していたりすると、トイレをひっくり返そうとするなどして、怒り出す。小屋から出して、外で遊んであげている時も本を読んでいると、コードがあるところに行き、それを嘔もうとしたり、本についている葉をかみちぎったり、尿をもらしたりする。未来は、人がどうしたら自分の方を見てくれるのかを心得ているようだ。

そして、最近の未来のはやはり「ハリー・ポッターは友達」だ。リサイクルブックやブックオフで総計五百円程度という、本一冊も買えないような値段でそろえた、ハリー・ポッターシリーズ。これらの本と壁の間には、二十センチメートル程度の隙間ができています。また、その周りには、荷物が山積みになっていて、未来にその隙

間に入られると、未来を捕えることができず、困るのだ。未来もそれが分かっているようで、小屋に帰らせようとすると、そこに逃げ込む。だから「ハリー・ポッターは友達」なのだ。ちなみに、これは、シートン動物記に出てくるワタオウサギのおかあさんが、息子ラグに伝えた教え（バラのしげみは、ウサギのともだち）から気づいたことだ。バラのしげみがうさを敵から守ってくれることを、とても素敵に表現していると思う。未来が、小さな隙間に入って、私達から逃げる様子を見た時、この言葉が浮かんで、楽しい気持ちになった。

このようにして、未来を観察していくなかで私は、未来のしぐさや様子を見て、未来が何を言いたいのか、何がしたいのか、分かるようになってきた。しかし、時には、未来の言葉を聞くことを面倒に感じることもある。掃除も最近、母に任せてしまい、さぼり気味だ。生き物を飼うことは、楽しいことばかりではなく、やはり、大変なのだと思った。

そして、今、私は、未来の「死」について考えてしまう。

大好きな未来が死んでしまうことを想像するだけで、私は、切なく、悲しくなる。だから、今、未来の子孫を残したいと思っている。また、子孫を残させてあげたいとも思う。

私は、ずっと未来の幸せについてもたくさん考えてきた。『獣の奏者』のエリンが、動物の幸せについて「幸せという言葉を使って、自分がやっていることを納得してしまうのが怖い」と言った。私は、それを読むまで「未来は幸せだよね」という言葉を、よく口にしていた。これは、未来に幸せだと思っていてほしい、という私の願望であることに気付かされた。動物の幸せは、動物にしか分からないかもしれない。しかし、未来の毎日の様子を観察するなかで、未来をわかるように努力していきたい。

私は、動物行動学について書かれた『ソロモンの指環』という本がとても気になっている。まだ、全ては読んでいないけれど、その中に「知能の発達した高等動物の生活を正しく知ろうと思ったら、檻や籠ではだめである。

彼らを自由にふるまわせておくことがなんとしても必要だ。檻の中のサルや大型インコたちがどれほどしょんぼりしていて、心理的にもそこなわれていることか。そしてまったく自由な世界では、そのおなじ動物がまるで信じられぬほど活発でたのしそうで、興味深い生きものになるのである」と書かれていた。未来を私は、基本的に小屋の中で飼っている。だから、これを読んだ時、未来を自由な空間で飼ってあげたいと思った。しかし、未来を小屋から出し放して飼うことは、なかなか厳しい。コードをかみちぎったり、布団におしっこをもらしたり、本を噛んだり、そんなことを自由にさせておく訳には、いかないからだ。未来がコードをかじるなどして、何かを壊したら、私はよくても父は許さないだろう。私は、未来を「ジョンボリ」させたくない。だが、ソロモンの指環の著者、コンラート・ローレンツ氏のように、ずっと動物を小屋から出しておいたり、何をされても叱らず、見守っておくことは、さすがにできない。そこで、私の監視の下で、未来をずっと自由にしてみることから始め

ようと思う。私は、小屋の中での未来を観察したことはあるけれど、自由な環境下での観察を行ったことはない。どういふ結果になるのかがとても楽しみだ。でも、できれば、未来が私の目を盗んで高価な品に手を出さないでくれることを願う。

動物が好きという気持ちで、今までずっと動物について調べてきた。しかし、最近、自分がなぜ、調べているのか、分からなくなってきた。動物のことは、好きだ。しかし、調べるのが好きかどうかは、よく分からない。調べる時間がほしくて、部活の顧問の先生に休みをかけた時もあったのに、今は、その情熱はない気がする。そんなことを考えているうちに、私は、最近、自分が何をしたいのかよく分からなくなっていた。

私は、将来、獣医師になりたい。産業動物獣医師については、なれる自信がなくなったが、獣医師になりたいという思いは、変わっていない。しかし、獣医師になるのは、なかなか難しい。兄がよく私に「獣医学部には、偏差値が七十ぐらいないと行けないよ。」と自分のこと

は棚に上げ、言ってくる。とても腹が立つけれど、その通りである。そう簡単に入れるところではないのだ。そんな時、私は、動物について、調べている暇など私にあるのか、と思う。今は、そんなことをするよりも勉強をすることの方が大切なのではないかとも思う。

勉強、部活、調べること。そのなかの調べることは、「楽しい」から始まったのに、最近、たくさんの分からないことに追い立てられるような感覚に陥^{おと}っていたように思う。今回、自分が調べてきた動物のことを書き出してみて、幼い頃の気持ちを思い出した。また、苦しい気持ちになって書くことをやめようと思った、豚熱に対する思いを何とか書くことができた。時間が足りなくて、納得がいくまでまとめることができなかったところもある。でも、自分が調べた動物のことを文章に残すことができ、うれしかった。

これからも私は、自分のできる範囲で調べることを続けていきたいと思うようになった。

動物が好きという気持ちから始まった、様々な人や動

物との出会い、つながり。このつながりを大切にしていきたい。そして、世の中の話は、色々つながっているけれど、私が見つけたつながりは、まだ、少ししかない。その「ツナグ」をこれから、見つけていきたいと思う。私と動物と人。この、たくさんの『ツナグ』は、まだまだ続いていく。

参考文献

『いのちのかんさつ4 カイコ』

中山れいこ著 少年写真新聞社

『ライチョウを絶滅から救え』 国松俊英 小峰書店

『最後のトキ ニッポニア・ニッポン』

トキ保護にかけた人びとの記録』

国松俊英 金の星社

『コウノトリがおしえてくれた』 池田啓 フレーベル館

『きみの町にコウノトリがやってくる』

キム・ファン くもん出版

『10年後の水を守るく水ジャーナリストの20年』

橋本淳司著 文研出版

『万葉と令和をつなぐアキアカネ』

山口進 写真・文 岩崎書店

『動物のいのちを考える』 高槻成規編著 朝北社

『医学のたまご』 海堂尊 角川文庫

『捨てられる食べものたち 食品ロス問題がわかる本』

井出留美著 旬報社

『獣の奏者 鬮蛇編／王獣編／探究編／完結編』

上橋菜穂子 講談社

『初めてでも仲よくなれる！』

かわいいウサギ飼いか方・育て方』

田向健一監修 西東社

『ソロモンの指環』 コンラート・ローレンツ 早川書房

『シートン動物記 ワタオウサギのラグ』

アーネスト・T・シートン文・絵 童心社



中学生の部
選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

「なにくそ はなくそ」

希望学園北嶺中学校 一年

前田 海杜

て反社会的行動でしょや中学生にもなってるさ。」

と文字にすると句読点を打つ隙間もない勢いでまくし立てた。てっきり英単語の小テストの勉強に勤しんでいるものと思っていた息子の裏切りに母の憤慨も相当である。この状況からもやはり鼻ほじりは人の心をかき乱す力を持つことは明らかである。こうして何度となく咎められようとも僕が鼻ほじりをなぜやめられないのか、それは習慣という言葉では説明しきれない気がして、僕はテスト対策も手につかないほど真剣に考えているのだ。

小学生の頃から僕のあだ名は「鼻くそ」だ。侮蔑的であると苛立つ反面、当然と言えば当然、と思う僕がいる。

物心ついた頃から優しい保育士さんに「かいちゃん、鼻くそほじっちゃだめよ、ティッシュで鼻をかみなさいねこうやって」とたしなめられるも、幼い僕には「全然わかってない」と反発心がむくむくと芽生えた。鼻が詰まっているという状況を改善するためには鼻をかむことは有効かもしれない。しかし鼻ほじりは鼻をかむという行為で代償出来るものではない。そして、僕にとって鼻ほじ

鼻くそをほじるという行為(以下鼻ほじりとす)の周囲への影響と、自身の表現としてのそれについての一考察。としたためる。思索に耽りつつまさに鼻ほじりを始めたところで不覚にも母に見つかってしまう。抵抗虚しく走り書きを素早く奪われる。母は僕を一瞥し

「いい加減にしなさいやそもそも人前で鼻ほじるなん

りという欲求を満たす代償行動は十三歳になった今も未だ発見出来ていない。

大気中のゴミやホコリ、ハウスダストや微生物などが鼻毛や粘液と混じり合い鼻水に変化する。それが乾燥したものの、それが鼻くそだ。それを手用的に除去する行為が鼻ほじりである。朝の鼻ほじりは格別だ。特に冬の朝は鼻粘膜が乾燥し、鼻くそがまるでかさぶたのように硬くなる。それを右手の人差し指でペリペリとはがしていく。その緊張感と、すっきりとはがれた鼻くそと対面した時の達成感言葉にできない。母は「あんた鼻血出ても知らないからね」と諫めるが、そこはスピード、力加減、指の角度など、僕のキャリアがものを言う。僕は今まで鼻血を出したことは一度もないのだ。ちょっとした自慢だ。

「かい、そろそろ人前で鼻ほじるのやめなよ。みっともないよ。コロナのこともあるし。」

先日、妹にたしなめられ、僕はむかついた。ストレスで交感神経の活動が活発になると鼻粘膜が膨張し、鼻が

むずむずするらしい。僕はますます鼻ほじりを続け、言う。

「うぎ。関係ないしょや。みおんに迷惑かけてないしょや。この後手洗うし。」

ウィルスや菌の感染経路の一つとして接触感染がある。手についた菌を鼻の奥の粘膜に押し当てると等しい鼻ほじりは自身の感染リスクを高める可能性がある。鼻ほじりには医学的なデメリットが多いことは頷ける。前言撤回。関係はあるし迷惑行為である。妹の言うことは至極もつともだ。僕が鼻をほじる。ほじった手から物に菌が付着する。そして付着した菌を吸い込んだ高齢者や抵抗力の弱い人が病気を発症することも考えられる。何気ない癖、習慣。自分にとっては無意識の域にある行動が誰かを危険にさらしている事に気づき、背中がぞわりとした。妹は特定疾患を持っており、発作を抑える内服薬との関係から例えば抗ウィルス薬の使用は慎重にならざるを得ない。なので感染予防は必須である。なんたる事だ。僕はショックのあまり、気がつくとも鼻をほじって

いた。

「鼻ほじりやばい。でも絶対やめられないでしょう。コロナ禍だしなんかいい方法ないかな。」

とパニックになり詰め寄った僕に母は冷めた感じでこう言った。

「まあ、感染にはそこまで神経質にならなくてもいいと思うよ。ほじった後手を洗えばいいし。それよりさ、人前で鼻ほじるやつ。それってこっち馬鹿にされてる気がするしさ、こいつ無神経だな、鈍感なのかな、って思うよね。人間関係への影響気にした方がいいと思うんだけど。」

人間関係。まさに数蛇な話題だ。僕は実際人間関係でのトラブルが多い。落ち着きのなさ、オーバーリアクション、話をつい盛ってしまったり、でまかせを言ったり。加減を見極められない僕の習性。そこに鼻ほじりという不潔感丸出しの行動が加われればトラブルというか周りに嫌がられる要素として充分だ。母は半ば諦め気味にこう言った。

「そうは言ってもさ、やめられるんならもうやめてるんだよね。色々さ、無理にやめさせないで他のことに興味向けさせて、癖が出る機会を失わせるといいとかやってみただけだね。でも結局ダメでさ。その後ほら、特定の行動へのこだわりって事もあって診断名ついた時、上手に促して励ませば自然とおさまるってことじゃないな、ってさ。」

僕は高機能自閉症と発達運動協調障害と診断されている。感覚のぎこちなさや敏感さと鈍感さが自分の中でひどくアンバランスに存在している自覚は物心ついた頃からあったので、小学生の時に診断名を告知された時にはとんど驚きはなく、むしろ納得した。その場の空気を読むことが苦手で、場所がどこであれ相手が誰であれ意に介さずに自分の思うように振る舞ってしまう。人前での鼻ほじりという行為もその一つと言えるだろう。また、急な予定変更などで強い不安に襲われると、気持ちを切り替えられずにパニックになる事もある。そんな時は鼻をほじるとリラックスできる。鼻ほじりという習慣行為

がもたらす感覚器官からの情報を脳が分類、整理、統合するというプロセスが僕を落ち着かせるのだと解釈する。なるほど。僕の持つ特性による習慣は僕を生き難くもさせ、また助けてもいるという矛盾が存在している。そして母はこうも続ける。

「みおんが産まれたあたりから鼻ほじり始まったんだよね。私ずっと入院してたから何ヶ月も海杜と離れたしよ、そしてある日突然妹ですよーって家族が増えてさ。そして妹は病気があります。お兄ちゃんそこんとこよろしくって怒涛だったわけだよね。でもさあんた赤ちゃん返りとかも全く無かったのよ。そのあたりで、鼻ほじりって海杜が見つけた逃げ場だったのかもって。」

妹が退院して一緒に暮らすようになって三日目くらいに僕は母にこう尋ねたそうだ。

「ねえ、この赤ちゃん、うちにいつまでいるの。」

母は言葉がなかったと言う。妹は早産、重症仮死で産まれ、新生児集中治療室で入院していた。僕は退院するまで妹を写真でしか見たことはなかった。写真に写る妹

は保育器の中で口には人工呼吸器を、鼻には経管栄養のチューブ、身体にはたくさんのモニターのコードをつけている。中心静脈カテーテルが入った脚はあまりに細くて、宇宙人みたいだった。退院した妹に実際に会った時のことは今でもはっきり覚えている。母に抱かれた妹はぶかぶかの肌着を着ていて、ほとんど泣きもせず、時々低い唸り声をあげた。シワっぼくて目だけがぎよるぎよろしてチンパンジーの赤ちゃんにそっくりだった。僕が知っている、例えば保育園にいる赤ちゃんはみんな丸々として泣き声もうるさいほどなのに、全然違う。怖かった。ベビーベッドに寝ていても、布団をかけていると全く体の膨らみがわからないくらい痩せていて、本当にここに赤ちゃんがいるのかと何度も僕は布団をめくった。この赤ちゃんが僕の妹。妹と向き合い、僕は不安だった。妹はモンスターみたいに思えた。妹がいることで僕の日常が変わるのかもしれないと怖かった。可愛いとか、僕が兄として妹を守らなきゃ、みたいな気持ちはわかなかった。そっと妹を突いてみた。柔らかいような湿った

ようなあたたかきような、生き物の感触がした。妹が突然目を見開いて僕を見た。まだほとんど見えてないよ、と母は言ったが、真っ青な目で僕を見つめる妹は、あんなの思ってる事、何でも知ってるよ。とでも言いたげに見えた。僕は反射的に目をそらし、手を引っ込めた。命なんだ。と思ったら怖かった。

妹が母のお腹にいる間に、曾祖父と曾祖母が相次いで突然亡くなった。人が生まれ、人が死ぬ。それは弛まぬ流れなのだ。今はわかるが、その頃は僕だけが置いてけぼりのように感じて怖かった。妹は生きてる。でもいなくなっても不思議じゃないほど弱々しい。でも生きてる。その現実には僕は混乱した。妹を突いた右手の人差し指を僕の鼻の穴に入れた。鼻の穴の中は温かい。僕は生きてる。ちよっとミルクみたいな匂いがするのは妹に触れたせいか。妹も生きてる。指先に鼻くそが触れる。鼻くそは僕の一部だ。安心感が僕を包んだ。僕は鼻くそをほじった。僕がここにいることを確かめるように、ほじった。かいちゃん、みっちゃんに鼻くそつけないでよ。まだ

穏やかだった母が僕を笑いながら諫めたけど、僕は鼻をほじり続けた。この子が妹か。と思いつながら。

妹は退院後も定期的な受診と入院が必要だった。特定疾患と診断され、僕らは互いが疾患や発達障害を持つ当事者で、きょうだい児と呼ばれた。いわゆるきょうだい児は一人の子供としてのニーズを軽視されがちで、自己評価が低くなりやすいと言われている。例えばきょうだいがケアを必要とする場面で自分の欲求を抑えたりする事に慣れる。また、きょうだいが疾患のことで心ない言葉や投げつけられたりした時には矢面に立つことを当然とされ、逃げる事も許されない。妹は僕からすると非常に理想的なきょうだい児で、自分のことは後回しにしても僕の話し相手になり、なだめ役となり、家でも学校でもトラブルも起こさず、「海社の妹なのになんかとしてるよね」とクラスメイトや先生方によく言われた。僕はいやほんとほんと、と鼻をほじりながら答える。妹にしてみれば僕は本当に恥ずかしい兄だろう。僕は特に学校で心から笑えることが少なかった。みんなが笑ってる場

面で笑えない。みんなと同じことを足並み揃えて出来ない。話を合わせようと努力してみても徒労に終わる。転校やクラス替え、入学のタイミングなどで、今度こそはみんなと馴染むんだ。と張り切って、過剰に戯けた態度でアピールして注意を引きつけようとするけども、気がついたらいつも一人だ。なので教室で僕はひとり鼻くそをほじり、硬さや大きさ、質感を評価して過ごす。それに集中してる間は孤独感も忘れられる。「前田また鼻ほじ。ちょーキモい。」そんな野次は日常だ。キモい上等。放っておいてくれるならそれでかまわない。孤独感や寂しさにフォーカスして掘り下げるような覚悟はない。スクールカーストというものがあるならば、その最下位である「鼻くそ」と呼ばれる存在の誕生だ。でも、そんな僕のこと鼻の奥にいる鼻くそは裏切らない。だって鼻くそは僕だからだ。

小学校生活最後の三学期はコロナ禍でうやむやに過ぎ去った。卒業式も縮小されレモニー感が少なく挙行された事は僕にとってはありがたかった。名残を惜しむと

いう僕には分かち合えない感情を味わっているクラスメイトや先生方と一緒にの空間にいる時間が一秒でも少なくて良かった。中学校は学区外に進学する事に決めた。小学校時代の僕を知る人は少ない環境でスタート出来る。僕は緊張しつつも期待に胸を膨らませた。コロナ禍で入学も延期となったが、自粛期間は楽しい新生活を妄想して僕は決心した。もうけして学校では鼻はほじるまい。もう鼻くそなんて呼ばせない。僕の鼻くそよ。君のことを忘れるわけではない。家でちゃんとほじるから。僕は張り切っていた。

しかし、中学生生活は予想以上にハードだった。六時半には家を出て交通機関を乗り継ぎ一時間以上かけて登校する。授業のスピードは速く、わからないところがわからないままに日々は過ぎていった。また男子だらけの学校生活は良くも悪くも遠慮がない。いつの間にか小学校の時と同じように僕はクラスメイトとトラブルを起こした。成績も予想以上にどん底な点数をたたき出した。こんなはずじゃなかった。僕は自分との誓いをあっさり破

り、自分を保つたために授業中も休み時間も鼻ほじりを始めた。終わりの始まりだ。

「前田鼻くそ。キモっ」

とうとうここでも始まった。どうする僕。

とりあえず打開策を見つけるため、今の心境を書き出してみた。

①鼻くそと呼ばれることについて

できれば呼ばれたくない。

②鼻ほじりが周囲に与える影響

不潔感、不快感、感染リスク

③自分にとって鼻ほじりとは

防衛機制のひとつ

④鼻ほじりをやめたいか

やめられるものならやめたい

⑤鼻ほじりをやめられるか

心の安定は鼻ほじりで保たれているので、他の方法が見つからない限りやめられない。しかし、鼻くそと呼ばれることで心が乱され、鼻をほじるという悪

循環があることも事実。でも無意識にほじっていることが多く、完全にやめることは困難。

⑥明るい学校生活と鼻ほじりの両立

鼻ほじりをやめられないと仮定し、それでも学校生活に不自由を感じることなく過ごす術はないものか。

・孤独を覚悟し、これが僕だと開き直す

・鼻はほじるけどそれを上回る魅力があるから大目

にみてもらえろ。ポジションを目指す

・鼻ほじりはかっこ悪い、という概念をくつがえす

材料を見つける

↓いずれも長期目標としてはありだが具体策としての短期目標の設定が難しいので非現実的。

「考察。僕と鼻くそ。僕と鼻ほじり。僕は十三年の人生で直面した問題から逃避するために鼻をほじっていることに気づいた。自分という存在を揺るがすようなライ

フイイベント、日々のちょっとしたボタンのかけ違いみたいな出来事、気分のムラ。そんな場面に出くわすたび僕は鼻をほじり自分を守ろうとした。鼻くそワールドに閉

じこもり、周りと自分を遮断した。そして僕の右手の人差し指によって取り除かれた鼻くそには、その時の僕の悲しみや怒りや諦めなんかの気持ちの燃えかすがつまっている。僕が僕であるために必要な行為、それが鼻ほじりだった。」

と、書いたところで母にこの紙を奪われる。

「僕が僕であるためにとって：歌詞かよー」母は大爆笑だった。なんて失敬なんだろう。ひとしきり笑った後で母は言った。

「不潔さはやっぱ不快だからさ、やめられるんならやめなよ。でも、自分が壊れるくらいならなんもほじればいいしょ。なくて七癖ってさ、みんな多かれ少なかれ無意識に人を不快にさせたり迷惑かけたりしてるもんだと思うのよ。それならさ、自分も他人も許すしかないよね。誰かに笑われる前に、自分で自分を笑いなさいよ。ごめん。キモいよね。俺ってしゃーないなって。そんなどうしようもなさを分かちあえる人と、きっと一人か二人は出会えるから。」

こうして小難しく考えたレジュメの結論は、母の「鼻ほじりはしてもいいがティッシュ使用。鼻くそはそれに包んで捨てる」という至極具体的な方法で着地した。

そして今、僕を取り巻くいろいろが変化したわけではなく、クラスメイトから鼻くそとは呼ばれるし、成績は低空飛行もいとところだし、不器用なものも相当だし、妹にも母にも

「またほじってるしょ」

と睨まれる毎日は変わらない。鼻ほじりに代わる心の安定に役立つ秘策も見つからない。しかし、そんな自分を自覚して、自分の人生に折り合いをつけて生きて行く覚悟が出来たように思っている。

「ねえ、鼻ほじる俺とほじらない俺なら、後者の方がいい？」

と友人におそろおそろ尋ねてみた。友人は

「別にどっちも前田だし。友達でいるのにそういうの関係なくね？」

と答えてくれた。嬉しかった。「やだー泣くかもー」と

言ったら「ちょーキモい。」と言われて、一緒に笑った。ありのままの僕を受け入れてくれる友人がいる安心感。僕はだからこそ、鼻ほじりを減らす努力をしよう。と思えた。

自分ではどうにもならないこと、でもどうにかしたいこと、そんなことをああでもないこうでもないと思ひ、時にやさぐれてみたり、ごまかしてみたり。まわり道ばかりの無駄みたいな感情の揺れをたくさん味わうことが僕には必要なようだ。僕の鼻ほじりと同じように、誰かの一見不可思議だったり不快に思わせる癖とか習慣には、その人にしかわからない葛藤ややるせなさが根っこにあるのかもしれない。僕は痛みを知っているから、そこに思いをはせることができる。人間のだらしなさや馬鹿さ加減を愛することができる。僕が誰かに迷惑をかけて、誰かから迷惑をかけられて。でも、迷惑と同じように恩恵もうけて。そうやって人間は感情を循環させている事に気づいた僕は、少しかっこよくないか。

これからも僕は泣いて笑って生きていく。時々鼻くそ

ほじってひと休みして生きていく。たまには鼻くそほじってもいいしょ。迷惑かけてもいいしょ。そうやって僕の根っこを承認してくれた母の言葉が背中を押してくれる。僕は鼻くそに心の栄養をもらった。僕はいろいろあってももう、しなやかに、「なにくそ」って笑って生きていける。

なにくそ、はなくそ。

参考資料

株式会社HANABISHI

「みんなのランキング」

鼻くそ世論調査2020

<https://ranking.net/articles/hanakuso2020>

小学生の部

受賞作品



大賞

「ぼくのファミリエンバウム(家系図)」

チャケレオン ドイツ Jakob F. Uggas-Gymnasium 五年

佳作 「ぼくの12時間サイバイバル体験記」

遠藤 光之佑 埼玉県 西武学園文理小学校 三年

「信じてー重度障がい者の学び力」

内田 博仁 神奈川県 横浜市立青葉台小学校 六年

選考委員特別賞

那須正幹賞 「虫ののろい」

伊藤 麦 東京都 八王子市立南大沢小学校 四年

最相葉月賞 「天国への案内人」

川口 颯 埼玉県 西武学園文理小学校 三年

リリー・フランキー賞 「カマキリが教えてくれたこと」

中野 理香 東京都 渋谷区立千駄谷小学校 四年

学校団体賞

(五十音順)

西武学園文理小学校(埼玉県)

日仏学院パリ日本人学校(フランス)

福岡雙葉小学校(福岡県)

最終候補作品

(氏名五十音順)

「レインボーカラーに輝いて」

小田 孝太郎 福岡県 五年

「ぼくの闘病記」

折笠 快斗 福島県 六年

「僕のタンニン」

金子 凌大 東京都 六年

「なぞの鳥」

佐々木 花 埼玉県 三年

「はじめて星を見に行った」

角田 光 神奈川県 二年

「救える命は必ず救うー新型コロナウイルス感染症流行中

でも頑張る医りよう関係者とこれからの災害医りよう」

田村 萌梨 鳥取県 五年

「曾祖母の戦争」

徳島 怜夜 佐賀県 六年

「ぼくのひいお爺ちゃん」

中野 玲央那 神奈川県 四年

「おはかと私」

光原 由萌 広島県 三年

中学生の部

受賞作品



大賞「葬儀のススメ」

平家 和志 東京都 多摩市立諏訪中学校二年

佳作「曾祖父の覚悟―山村の漁村から」

中尾 慶人 新潟県 上越教育大学附属中学校三年

「小笠原諸島を訪ねて」

秋篠宮 悠仁 東京都 お茶の水女子大学附属中学校二年

選考委員特別賞

那須正幹賞 「〇〇」歌舞伎〜平成中村座小倉城公演〜

大石 寛子 福岡県 北九州市立飛幡中学校二年

最相葉月賞 「ツナグ」

新池谷 悠 群馬県 前橋市立第一中学校二年

リリー・フランキー賞 「なにくそ はなくそ」

前田 海杜 北海道 希望学園北嶺中学校一年

学校団体賞

(五十音順)

さいたま市立浦和中学校(埼玉県)

上越教育大学附属中学校(新潟県)

中野市立高社中学校(長野県)

最終候補作品

(氏名五十音順)

「夢にむかって」

安樂 圭将 ニュージールランド三年

「一人旅」

五十嵐 徳裕 新潟県三年

「ソーシャルディスタンスで世間が苦しむ前、

私はマインドディスタンスに苦しんでいた」

石田 あい 東京都二年

「みんながいて、うれしかったこと」

泉 裕太 岡山県三年

「人は変わる!」

板倉 心 新潟県一年

「羽ばたけコウノトリ」

座間 耀永 東京都二年

「音を楽しむ」

萩原 七聖 埼玉県三年

「私の家族」

日野 慈巴 新潟県二年

「当たり前からはずれた日」

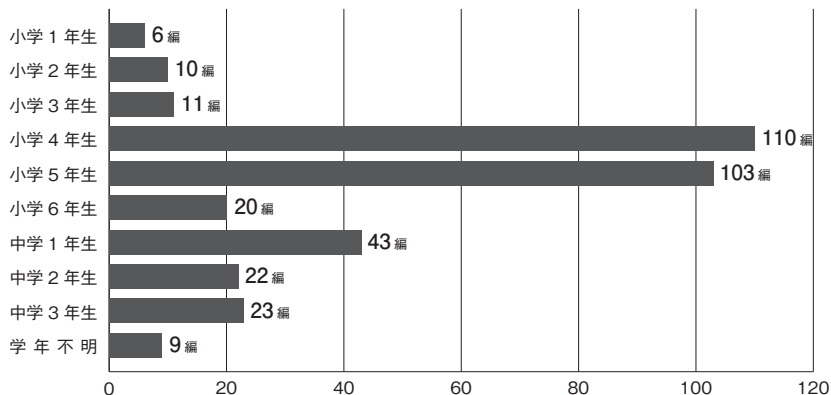
村田 涼香 新潟県一年

令和2年度 子どもノンフィクション文学賞応募結果

◎応募受付数 **357** 編

小学生**260**編(昨年375編)／中学生**97**編(昨年309編)

◎応募者学年別構成



◎応募者地域別構成

地域	応募数			九州内訳(再掲)	応募数		
	小学生	中学生	合計		小学生	中学生	合計
北海道	0	1	1	福岡県 <small>(本県)</small>	151	16	167
東北	3	3	6	市内	26	4	30
関東	41	19	60	佐賀県	1	0	1
信越	0	35	35	長崎県	0	0	0
北陸	0	0	0	熊本県	1	2	3
東海	2	6	8	大分県	0	0	0
近畿	7	4	11	宮崎県	0	0	0
中国	9	1	10	鹿児島県	0	0	0
四国	1	3	4	沖縄県	1	0	1
九州	180	22	202				
海外	17	3	20				
合計	260	97	357	合計	180	22	202

事前選考委員

(五十音順)

相本 倫子 石橋 聡 伊藤 和人 上野 浩昭 奥田 誠 幸野 英明

第12回子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

二〇二一年三月二〇日 発行

編集・発行 北九州市立文学館

〒八〇三二一〇八一三 北九州市小倉北区城内四一


電話 〇九三三五七一五〇五

FAX 〇九三三五七一五二五

印刷・製本 瞬報社写真印刷株式会社

登録番号 北九州市印刷登録番号 2009135A号

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。



国内外の小中学生の皆さんより
数多くの応募をいただきました。
こころよりお礼申し上げます。

子どもJコフィクション文字賞



主催：北九州市 共催：北九州市教育委員会 協賛：日本児童図書出版協会
後援：朝日学生新聞社 公益社団法人全国学校図書館協議会 公益財団法人海外子女教育振興財団